

アクセル・ワールド6

—浄火の神子—

黒雪姫率いる軍団《ネガ・ネビュラス》。その躍進を担っていた銀翼が、もげようとしていた。謎の組織《加速研究会》とのバトル中、ハルユキは突如復活した《災禍の鎧》の侵食を受ける。彼は未だ、その呪縛からは逃れられなかった。

事態を重く見た《純色の七王》は、《加速世界》の最高意志決定機関である《七王会議》を開く。そこでシルバー・クロウに下された決定とは、《浄化》と呼ばれる強化外装の完全解除を行うこと。従わなければ、残りの六王から賞金首に指定され、事実上《加速世界》から追放となる。

最も高度な解呪コマンドである《浄化》。その鍵を握るアバターは、《無制限フィールド》の意外な場所に幽閉されており……

《加速世界》では、致命的な危機を抱えたハルユキ。なのだが、《現実世界》では飼育委員活動中に知り合った小学四年生の少女と、なぜか心の交流が深まってしまっ



か-16-11



アクセル・ワールド6

川原 礫

電撃文庫

570



ISBN978-4-04-868969-4
C0193 ¥570E



ASCII
MEDIA
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価：本体 570 円

※消費税が別に加算されます



アクセル当④ れき



かわはら れき
川原 礫

毎日バイ気温が続いております。アクセルの世界にもそろそろ初めての夏が来ますが、この調子では2040年頃には大変なことに…… キャラ全員の暑さで選んで一巻まるまる何も起きないというのはどうでしょうか。王達中も「だりー」しか言わない。すいませんちゃんとうります。

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1 黒雪姫の帰還
アクセル・ワールド2 紅の嵐風姫
アクセル・ワールド3 夕闇の暗黒者
アクセル・ワールド4 蒼空への飛翔
アクセル・ワールド5 星影の浮き橋
アクセル・ワールド6 浄火の神子
ソードアート・オンライン1 アインクラッド
ソードアート・オンライン2 アインクラッド
ソードアート・オンライン3 フェアリー・ダンス
ソードアート・オンライン4 フェアリー・ダンス
ソードアート・オンライン5 ファントム・ノクターン

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵は今シリーズが初のイラストレーター。「電撃魔王」小冊子への寄稿を見た文庫編集者が、今回の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

カバー 地印刷



アクセル・ワールド 06
浄火の神子

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビビィ

アイボリー・タワー

白のレジオン
《オラトリ・ユニヴァース》
《極端パーストリンカー》
白の上の全権代理アバター
として《七王会議》に参加

イエロー・レディオ

黄のレジオン《クリプト・
コスミック・サーカス》頭目、
《放射性惑星》の二つ名を持つ
黄の上

ブルー・ナイト

青のレジオン《レオニース》
頭目、《鋼型》、《神像殺し》、
その他多くの二つ名を持つ
青の上

パープル・ソーン

紫のレジオン
《オーロラ・オーガニック》
《禁断書》の
二つ名を持つ紫の上

議題はもちろん、
《災禍の鎧》によるシルバークロウの
《汚染》についてだ

「これで全員揃ったな。
では、《七王会議》を
始めさせてもらう。」

グリーン・グランデ

緑のレジオン
《グレート・ウォール》頭目、
《絶対防衛》の
二つ名を持つ緑の上

スカーレット・レイン

赤のレジオン《プロミネンス》
頭目、《不動要塞》の二つ名を
持つ赤の上

「気にしないでください。こういう事態に備えて
体操服に着替えてきたわけですから」

四埜宮謡

梅郷中学と同系列の
松乃木学園初等部に通学
小学生

「クーさん、二度だけでいいので、
敵の攻撃を防いでください。」

私の心意技は発動に
ちよつと時間がかかるのです。

アーダー
メイデン

型は戦況に留意する
バーストリンガー

黒雪姫

《黒のE》ブラック・
ロータスを操る
梅郷中学副生徒会長

ハルユキ

中学内格差
最底辺の少年

『では、私が考案した
《災禍の鍍浄化計画》を説明する』

『……………』

タクム

ハルユキの
クラスメイト。
親友でもある

フーコ

スカイレイカー。
ハルユキに《心意》
システムを伝授した
師範的存在

チュリ

ハルユキの幼馴染

<ブレイン・バースト>におけるデュエル・アバターの<相性>

カラーサークル



メタルカラーチャート



バーストリンカーに自動的に付与される英語名には、必ず色を示す単語が含まれている。その色によって、デュエル・アバターが持つ属性をおおまか把握することができる。<青系統>は近距離直接攻撃、<赤系統>は遠距離直接攻撃、<黄系統>は間接攻撃、紫や緑のような中間色は、二つの系統にまたがった属性を持つ。

また、それらカラーサークルに分布する色とは別に金

属の名を冠した<メタルカラー>が存在する。チャートの左から、白金(プラチナ)～金(ゴールド)～銀(シルバー)～クロム～銅(ブロンズ)～鉄(アイアン)という分布である。これらのカラーは、攻撃ではなく防御能力に秀でた属性で、チャートの左にいくほど物理的攻撃防御が高く、右にいくほど物理的攻撃防御が高い。たとえばハルキのアバター<シルバー・クロウ>は、切刃・貫通・炎熱・毒攻撃に耐性があるものの、魔法攻撃や打撃攻撃に弱いという特性を持つ。

アクセル・ワールド 06

浄火の神子

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ



■ 写真家にはユースとバー・ダンスの愛を注ぎ、音楽好きな顔ぶれ。その多くは店に在りていて、店内Aパーティーはダンスにプログラムが組まれている。ダンスもAパーティーはダンスとブロック・ロータス・レインボー。

■ハルエキョー 古賀恭男(アサキ・ハルエキョー、福岡県中野二、いじめられたりでせよと覚悟、ゲームは勝てないが、内角め、守内アバケーは「ビビンク」のブラス・デュエルアバケーは「インバーキョウ」のレベル、
■サスリ 古賀下谷合(タシマ・サスリ、ハルエキョーの父親、父親が好きなため、守内アバケーは「バビ」のめ、デュエルアバケーは「サスリ」のレベル、

[illegible]

■フーコーと貞節観(タラザン・ブヤウ) 貞節観が、女性に課していた貞節観のバリエーションの一つ、とある事柄により既述を援用しているが、貞節観とバリエーションの概念により簡単に区別する、は、ふたつが同じ性質を有する事柄は、否、であるはず。これは、キヤン・ド・ラ・グー(Chantal de la Gue)の

[illegible]

■グローバル機関と労働組合との関係に関する行為、国際労働局ではグローバル機関は禁止されておらず、認められている。ただし、労働組合は労働者の権利を保護する義務を負っている。

[illegible][illegible][illegible]

■無制限中置フィールド・ドールも、従来のデュエルマスターの決め手となるハイ・ブレイザー向けのフィールド・ドール(通常型フィールド・ドール)とは対照的に、ゲームシステムが簡潔化されており、その目的はオビエクトと戦うことにも、全く関係がなからず、

● 用途決定言語 = プログラムを制御する為の使用するシステム。用途はすべてこのシステムによって決まる。1は制御される。

■イスター・システムは、自動車が燃費効率よく走り続けることによって、アバターの稼働するシステム。燃費効率を高めるには、エンジンと変速機を密着させる。燃費を上げるには、エンジンと変速機の密着度を高める必要がある。燃費を上げるには、エンジンと変速機の密着度を高める必要がある。

[illegible][illegible]

見ておらず、両手首を金網「ブラッケー・バース」にぶら下げて「ゲゾー」が監視している。

る。その場合、 β が1より小の場合、図の軌道を軌道に調整することによって、 β が1より大の場合、調整が逆となる。しかし、この調整は、 β が1より大の場合、調整が逆となる。さらに、 β が1より大の場合、調整が逆となる。

IN accel Wor

[illegible][illegible]

© 2001 Blackwell Science Ltd *Journal of Internal Medicine* 250: 101–107

《ブレイン・バースト》は、フルダイブ型の対戦格闘ネットワーク・ゲームである。

しかし、市販されている同種のゲームとは異なり、対戦の組み合わせは、グローバルネット上のサーバー単位で行われるわけではない。

基準となるのは、ブレイヤー、つまり《バーストランカー》の現実身体が存在する場所だ。現実世界に於いて、一定の区分内にいる者同士でなければ対戦相手にはなれない。その区分を、ブレイン・バーストでは《戦域》と呼ぶ。

戦域の面積は都心とそれ以外の地域で異なるが、東京二十三区内ならば、ひとつの区がだいたい二から四の戦域を持つ。たとえば、杉並区なら《杉並第一戦域》から《杉並第三戦域》の三つに分割されているわけだ。その戦域ひとつひとつに《マツチングリスト》と呼ばれる、現在エリア内に存在するバーストランカーの一覧表が設定されていて、各人はそのリストから対戦相手を選んで挑戦するか、あるいは《待ち受け状態》にして乱入を待つことになる。

二十三区内の戦域の合計数は、約六十。

総勢千人のバーストランカーのほぼ全員が東京中央部に暮らしているため、ひとつの戦域のマツチングリストには、おおよそ十から二十人が登録される計算だ。もちろん場所や時間帯に

よって偏りは発生し、週末午後の新宿駅周辺や秋葉原では、リストの人数が百を超えることも珍しくない。

それだけの人数がひとつのスポットに集中すると、時として思わぬ現象が引き起こされる。リストから無作為に選んだ対戦相手が、《対戦ステージ》上でいきなり数メートルの至近距離に出現したり、あるいは観戦者の現実位置に近い場所にどちらかの対戦者が登場してしまったりするのだ。

ブレイン・バーストのVR対戦ステージは、現実世界のありとあらゆる場所に張り巡らされた高解像度の保安監視カメラ網、いわゆる《ソーシャルカメラ・ネット》の映像から再構成されている。つまりステージ内のビルや道路は、ランダムな《属性》によって様々な変化するとはいえ、基本的には現実の姿そのままだ。

その地形上で、デュエルバターの出現位置が密接しているということは、双方のバーストランカーの現実身体もまたすぐ目の前に存在するということになる。これは相当に気まずい。いや危険ですらある。バーストランカーにとって、生身の顔や名前が露見してしまう——いわゆる《リアル割れ》は、最大の禁忌のひとつだからだ。もし写真を撮られたり、尾行によって住所や本名を割り出されれば、現実世界での拉致や脅迫といった手段で全バーストポイントを強奪されかねない。

そのような暴力的犯罪行為を厭わない過激な輩も、加速世界にはごく少数ながら存在する。

彼らは物理攻撃者略して（PK）と標榜され、大レギオンは闘正を誇っているものの、名前を割き出すことすら非常な困難を伴う。なぜなら襲われたバーストリンカーはほぼ例外なくポイントを全損、すなわちブレイン・バースト・プログラム本体及びそれに関する記憶を完全喪失してしまい、二度と加速世界に戻ることはできないからだ。

確率は低いとはいえ、そのような恐ろしい危険が、週末の熱く盛り上がった戦域には潜んでいる。

裏返せば、バーストリンカーの人口密度が低いエリアでは、リアル割れの可能性は限りなく減少すると言える。

二十三区なら、世田谷区の西部や、大田区、江戸川区あたりがいわゆる過熱エリアということになる。面積が広いわりに、リスト上の人数が常時少ないからだ。

だが意外にも、東京でもっともニアミスの危険が少ない場所は、全エリアの中心——千代田区だと考えられている。

千代田区は、二十三区で唯一、戦域が分割されていない。特区として独立している秋葉原エリアを除く全面積が広大なひとつの戦域に設定され、しかもそこをホームグラウンドとするバーストリンカーは無に等しい。

なぜなら、千代田区の面積の二十パーセントまでもが、一般人の立ち入れない皇居なのだ。

そのルールは、加速世界に於いても貫かれている。対戦ステージにも各種属性に応じた形状

の（自衛隊）は存在するのだが、お隣の中央に障壁が設けられていて侵入は不可能だ。ただ、さ
え広すぎるマップの中央が巨大な禁止ゾーンなので、対戦者の片方がその気になれば、最初に
遠距離攻撃でワンヒットしておいてから三十分間延々逃げ回り、判定勝ちを狙うことも難しく
ない。

そんな戦いづらい地形なうえに、すぐ北東に秋葉原、西に新宿という対戦のメッカがあると
くれば、敢えて千代田区で戦おうという者がそうそういるはずもないのだ。ゆえに千代田エリ
アのマップチンダリストは常に閑散としている。しかし、だからと言って無価値なエリアという
わけではない。

東京の中心でありながら、現実身体がニアミスする危険が少ない。その特徴は、千代田エリ
アに思われの利用法を生み出した。すなわち《対戦》ではなく《交渉》の場。敵対する勢力同士
が、リアル割れの可能性を限界まで排除したうえで接触したいと考えた場合、広大かつ寂寥と
した千代田区はまことに都合がいい。

以上のような理由で――

二〇四七年六月十六日、日曜日、午後一時四十五分。

レギオン（ネガ・ネビュラス）頭首、黒の王（フラッタ・ロータス）こと黒雪姫と、レギオ
ンの副長にしてデュエルアドバイザー（スカイ・レイカー）を操る倉崎楓子、そして下っ端戦闘員
（シルバー・クロウ）こと有田春雪の三人は、東京都千代田区富士見二丁目のコインパーキン

ダに停めた小型E.V.の車内で、《交渉》が始まる時をしっかりと待ち続けているのだった。

いや、規模的にはもはや車なるレギオン間交渉ではない。

なぜなら午後二時に開始されるのは、加速世界八年の歴史上でたった一回しか招集されたことのない、《純色の七王》全員による会議なのだ。

1

「……このクルマ、師匠の私物ですか？」

周近に迫った（七王会議）の緊張感に耐えかねたハルユキが、後部座席から唐突に訊ねると、運転席の（師匠）こと楓子は驚いたように首を振った。

「まさか。母のものですよ、いくらなんでも高校生のお小遣いで自動車は買えません」

「で、ですよねー」

EVは丸っこく可愛いフォルムだが、明るいタリウムイエローの内装は本革張りで、ステアリングの中央にはヘビと十字を象ったエンブレムがある。ハルユキもよく知っている、イタリヤの老舗自動車メーカーのものだ。大学生はおろか、社会人でも若いうちはなかなか買えない値段だろう。

「ずいぶん運転慣れてたんで、もしかしたらって思って、その、免許証は白朝……ですよね？」

おそるおそる口にした「二つ目の質問に答えたのは、楓子ではなくナビシートの黒雪姫だった。」「ふふ、当たり前だろう。フリーコは今年で十六だから、免許も取れるし結婚もできちゃうオートナなんだぞ、我々と違って」

「……サッちゃん、その言い方なんか嫌……」

——そうかし、オトナなのかあし。

と一瞬ふらついた思考を、ハルユキはぶるぶる頭を敲って立て直した。

普通自動車免許の取得資格が十八歳から十六歳に引き下げられたのは確か七、八年前のことだ。表向きの理由は、ソーシヤルカメラ・ネットの完備と車両制御AIの義務化によって交通事故の発生率が激減したから、ということだが実は裏の事情もあるらしい。

二〇四〇年代の日本は、際限なき少子高齢化によって、社会保障システムが崩壊の瀬戸際に立たされている。年々増大する医療・介護費や公的年金の支出額を、現役世代が支えきれなくなってきたのであるのだ。そこで、運転免許に代表される各種資格の取得年齢を引き下げること、働ける若者の数を増やそうという意図が政府にはあるようだ。事実、同時期に労働基準法も改正され、十六歳からフルタイムの社員として雇用することが可能となっている。

つまり、楓子はもう法的な意味合いに於いては半ば以上大人なのだ。そして今年十五歳になる黒雪姫は、来年、ハルユキも、わずか二年後にはその時がくる。

もちろん中学を卒業してすぐ就職するわけではないので、実質的にはまだまだ子供であり続けるわけだが、それでもハルユキはそこはかとない不安を感じずにはいられなかった。

——いったい僕は、いつまで今の僕でいられるのだろうか。

そんなことを考えてしまつてから、ふと内心で苦笑する。今の自分ていたくない、どこか遠くに逃げたい、という渴望をこそ、長い間ハルユキは感じ続けていたはずだ。

その欲望が消え去ったわけではない。自分の外形は大嫌いだし、中学校も相変わらず好きにはなれない。しかしたといまカミサマ的な誰かに、違う場所て暮らす違う人間にしてやる、と言われてもきつと断るだろう。(この場所)に——短期的には楓子の運転するE.V.のリアシートに、そして長期的にはバーストリンカーとして加速世界の片隅に居られること。言い換えれば、(フレイン・バースト)という、とてつもない規模と精細さを誇り、無限のスリルと興奮を与えてくれるゲームのプレイヤードいられること。それ以上に望むことなどない。何一つでも、それすらも、おそろくは、永遠ではない。

フレイン・バーストはゲームである。ゲームならばいつかは終ある。いや、そのエンディングに辿り着くことだけを目標して、ハルユキや黒書姫は戦っているのだ。

ゲームの結末がどのような形をしているのかは、今は知らない。黒書姫が望み通りにレベル10へと到達し、フレイン・バーストそのものがクリアされるのか、いずれやってくるであろう(子供時代の終わり)によって客観なくプレイ権を奪われるのか、あるいはそれ以外のエンディングが訪れるのかは想像すらもできない。

だからこそ、いまは全力を尽くすのだ。

全力で遊び、楽しみ、そして守る。自分と、大好きな人たちが一緒にいられる、この世界を。やや狭めのリアシートで、そう心に誓いつつダツと拳を握ってみた——ものの、ハルユキはすぐに自分の陥った境遇を思い出し、深く息を吐いた。

正直、守る！ などと愉快いいことを言っている状況ではない。

もう十数分後にも始まろうという（七王会議）の議題は、まず第一に、ブレイン・パースト世界に突如出現した謎の破壊組織（加速研究会）への対応策。そして第二に、まさかの復活を遂げた強化外装、（直接の資）クロム・ディザスターの処遇だ。

どちらの議題も、ほんの一週間前までなら、まだレベル5のハルユキには雲の上の話でしかなかった。王たちやその側近が論議するのを、ただ観客席から眺めていればよかったはずだ。

しかし、今やハルユキは、観客どころか舞台の中央に立たされてしまっている。

なぜなら、笑福の鎖を断らせ、六代目の所有者となってしまったのはシルバー・クロウ——ハルユキ自身なのだ。

「……………緊張するな、ハルユキ君」

前席から穏やかな言葉が届き、びくんと顔を上げる。

声の主は、不意にナビシートのリクライニング・レーパーを引くと、背もたれを思い切り傾けた。慌ててドライパー側に避けたハルユキのすぐ目の前で、シートがフルフラットまで倒れる。長い黒髪がきらりと流れ、一部がハルユキの膝に触れる。

今日の黒雪殿は、珍しく私服姿だった。グレーのスリムジーンズに、びったりしたプリントTシャツ。その上に、薄手のパンチングレザー素材の半袖シャツを重ねている。色はもろもろ

黒、アイボリー系のワンピースに七分丈のレギンスというフエミニンを出て立ちの櫛子とは対照的だが、ぞくりとするほどの美貌の冴えはわずかにも減じられていない。

ハルユキの目の前で察する格好になった黒書姫は、するつと右手を伸ばすと、ハルユキのＴシャツの襟首を指先でつまんで引つ張った。吸い込まれるように体を前後させると、車の芳香剤とは異なる甘い香りが鼻をくすぐり、ハルユキの思考を急減速させる。

「キミが何を情れる必要もないさ。大丈夫、王選中には何の手出しもさせない。キミは、私が守ってやる」

至近距離でそう囁かれ、いっそう顔がくらくらするが、懸命に脳のギアを入れ直してハルユキは答えた。

「あ……ありがとうございます。でも……その、先輩以外の王たちは当然、シルバー・クロウの公正を求めてきますよね？ つまり……レギオンスターによる、《断罪の一撃》を……」

「ま、そうだろうか」

「それ……断つたら、先輩がまずいことになりませんか？ なんていうか、イジメ的な」

ハルユキの経験則からすると、《正当性を笠に着た多数》というのは、どこまでも冷酷になれるものだ。一年生の頃にハルユキを散々虐めた不良生徒たちも、最初から理不尽に暴力を振るつたわけではない。始めの頃は友達のような顔をして近づき、ハルユキが誤いを断つたり距離を置こうとした途端、《仲間を裏切った》という名目で牙を剥いたのだ。

今回、理屈の上では、黒雪姫ではなく六王たちに分があると思える。《炎橋の龍》は加速世界の黎明期から多くの権者を出した呪いであって、消え去るべきだとハルユキ本人も思う。

むしろ、自分の操作で消滅させられるのなちとづくにそうしている。

それが不可能なら、所有するパーストリンカーごと処分するべき。その《正典》な意見を黒雪姫が拒否すれば、王たちからどんな精神的、物理的圧力を浴びせられることが。

と、ハルユキは心配した――のだが。

「ははは、何を今更言ってるんだキミは」

突然軽やかに笑い飛ばされ、ばちくりと眼をしばたかせる。

すると黒雪姫は笑みを不敵なものに変え、やや低めた声で囁いた。

「私はすでに叔らの敵だ。馬鹿げた《相互不可侵条約》にも加わっていないしな。文句があるなら六王自らデュエルを吹っかけてくればいいのさ。それこそ私の望むところだが、な」

「……………先輩……………」

――まったく、なんて強くて、かつこよくて……凄々しい人なんだ。

という胸中の感慨を、言葉にできる能力はもちろんなかったので、ハルユキはせめて間近で煌めく漆黒の瞳を一心に見つめた。

すると黒雪姫は鋭い眼光を和らげ、再び優しい微笑でハルユキの視線を受け止めた。唇がごく小さく動き、最小ボリユームの囁きが空気をそつと震わせた。

「思えば、私は最初からキミに守られてばかりだったな……」

するりと伸ばされた指先が、ハルユキの右頬に優しく触れる。どくんと心臓を跳ねさせながらも、どうにか掠れ声で答える。

「そんな……、そんなことないです……僕のほうこそ……」

しかし黒雪姫は、人差し指でハルユキの頬を軽くつついて反論を封じた。

「私はキミの〈親〉だ、いつだってキミを守る権利があるんだぞ。だから、こんな時くらいは何も言わずに私を頼ってくれ」

「……………せん、ばい」

急に胸が詰まり、ハルユキはどうかそれだけ口にしながら、黒雪姫と視線を見交わし続けた。優しく頷き返した剣の主は、尚もハルユキの頬に指先を添えたまま、数刻前の言葉をもう一度囁いた。

「約束する。キミは、私が守る」

「……………はい。はい……………信じてまみぎユウ！」

——と、隠居が台無しな音に上書きされたのは。

いきなり倒れてきた運転席の背もたれが、ハルユキを押しつぶしたからだった。

シートの縁から突き出た手がハルユキの左耳をむぎ——っと引っ張ると同時に、両頬を盛大に膨らませた楓子が顔を覗かせ、憤慨したように言った。



「あのねえサツちゃん、騙さん！　ひとの車で勝手に登り上がるの禁止っ、ですー」

前席の二人がシートとの角度を戻し、ハルユキも後席に深くかけ直したところ、午後二時三分前となった。

窓越しに見上げると、六月中旬の空はやや不機嫌そうな薄曇りだが、ところどころで青色も顔を出していた。急な雷雨でニュージーランドの乗客被害が起きる心配はなさそうだ。

軽い咳払いに続いて、黒宮姫が緊張感の増した声で言った。

「今回の会議は、乗客者全員が対戦相手となる（バトルロイヤルモード）ではなく、ホストとなる（青の王）の側近二人の対戦に、他の参加者がギヤラリーとして自願ダイブすることになる。ゆえに、我々が誰かからアタックされる危険は考えなくていい」

「あの……（心意システム）による攻撃も、ですか？」

ハルユキの質問に、楓子が応じた。

「ええ、たとえ心意を使おうとも、一般対戦フィールドに於いてギヤラリーが攻撃したりされたりということは起こり得ません。なぜならギヤラリーはそもそも日Pゲージを持っていないからです。先週の（ヘルメス・コード競走レース）で、参加者や観客がラスト・ジグソーの心意によって傷つけられたのは、日Pゲージを全員に設定したうえで数値ロクダするという特殊なフィールド状態だったからです」

「そう、でしたね……。なんか……なんだか、まるで……」

ハルユキが不明瞭に呟くと、黒雪姫が静かな声で補足した。

「なんだかまるで、心意によって、レースを破壊できる余地が収めて残されていたみたいだ、か？」

「え……い、いえ、そこまでは……」

憶えて前を振る。そう言ってしまうと、必然的に次のような推測が成り立たざるを得ないのだ。すなわち――あのラスト・ジグソーによる破壊行為は、ブレイン・バースト開発者の容認するところだった、と。

まさか、それはない。それだけはあるてはならない。正体不明の開発者が、いったい何を目的としてブレイン・バーストを運営しているのかは相変わらず謎だが、ハルユキは彼または彼女に、一人のゲーマーとしてそこはかとい敬意を感じるようになってきているのだ。こんなに楽しく、エキサイティングで、夢中になれるゲーム……いや《世界》を築き維持する人物が、《加速研究会》のよさな汚い奴らに手を貸すはずはない。

「ハルユキ君」

強く奥歯を噛み締めていると、黒雪姫が優しい声で呼びかけた。

「いいか、これだけは憶えていてくれ。加速世界の主役は、ひとりひとりのバーストリンカー全員なんだ。キミもそうだ。どのような形で世界にコミットするかはキミ自身の選択に完全に

委ねられている。開発者の意図がどうあろうと、な」

「……………はい！」

深く頷くと同時に、視界端の時刻表示が十秒前を告げた。

「いい返事だ。——それでは全員、グローバル接続開始」

レギオンマスターの指示とともに、三人の指がそれぞれのニューロリンカーのリンクボタンを長押しする。

グローバルネット・コネクション表示が点灯し、接続ステータスがそれに続き、それらのアイコンが消えた約「一秒後」。

バシイイイイア！ という加速音がハルユキの聴覚いっぱいに響いた。

視界中央に、『A R E G I S T E R E D D U E L I S B E G I N N I N G ！』という英文字が煌々と燃え上がった。

青緑色の奇怪な光に満たされた空。青黒いタイルの敷き詰められた地面。牙状の突起に装飾された建物群と、それらの間を流れる濃密な霧。

「……《魔都》ステージか。ま、今日の趣旨にはマッナしていると言うべきだろうな」
 そう呟いた黒の王、ブラッタ・ロータスは、鋭く尖ったつま先で足元のタイルを音高く踏み鳴らした。

敬愛するレギオンマスターの、流麗かつ怪々しい姿にしばし見入ったハルユキは、次にその隣にひっそりと佇む空色のアバターをじっと見つめた。

こちらは、ただひたすら優美な立ち姿だ。華奢な女性型ボディの背に、やや青みの濃い髪が翼のように流れている。滑らかなラインを持つ両腕・両脚に、武器の類はいつさい装備されていない。

しかし、ハルユキは知っている。いま地面をしっかりと踏み、アバターを直立させている二本の細い脚こそが、彼女——スカイ・レイカーの起こした奇跡の証であることだ。

ブラッタ・ロータスがハルユキの《親》にして《剣の主》なら、レイカーは《師匠》と呼ぶべき存在だ。彼女は長い間、加速対戦の第一線から退き、誰からも忘れられた旧東京タワーの

天^{てん}に^いて^い隠^{かく}れ^れて^て隠^{かく}れ^れた^た生活^{せいふ}を^を送^{くわ}っ^てて^ていた^た。

その理由は、約一年半前、自らの意思で両脚^{りやうきやく}を^を膝^{ひざ}から^{から}切り^{きり}落^おとして^{して}戦^{いくさ}闘^{とう}能力^{りやうりき}の大半^{たいてい}を^を喪^{はな}失^ししたからだ。しかし、同様に力——《飛行アビリティ》を一時失ったハルユキと出会い、《心意システム》の手ほどきをしたのをきっかけに徐々に対戦への情熱を取り戻し、そして先週の《ヘルメス・コード縦走レース》に於いてついに自分を縛^{しな}る心の傷を乗り越え、脚を復活させた。

ネガティブなイメージ・シヨンの影響^{えいぎやう}下^かから脱出するのがどれだけ難しいかは、一度クロム・ディザスターに支配^{しはい}されかけたハルユキも身^みに沁^{しみ}みて理解^{りかい}している。

おそらく、あの時チユリ——ライム・ベルが、《対象アバターの時間を巻き戻す》という超絶的能力を持つ必殺技で助けてくれなければ、ハルユキは飽^あと、そして自分自身の憎^{にく}悪^{あく}に吞^のま^まれて数百人のギャラリを無差別に襲^{せう}っていただろう。

ほんの数分間、負の心意に身を浸^{ひた}ただけでもう戻れなくなるところだったのだ。なのにスカイ・レイカーは、現実時間^{げんじつじかん}で一年半ものあいだ自らを縛^{しな}り続^{つづ}けていた恐怖と絶望^{ぜつぼう}の鎖^{くわ}を断^きち切^きった。これを奇跡^{きせき}と言わずして何と言おう。

深い感^{かん}動^{どう}に打^うたれ^れつ^つ、じつとレイカーの両脚^{りやうきやく}に見入^{みい}っていると――。

「恐^{おそ}さん^{さん}つたら、そんなにわたしの美脚^{みきゃく}が^が気^きに入^いりました？」

と笑^{わら}いを含^ふんだ声^{こゑ}を掛^かけられ、ハルユキは愧^{はづ}てて顔^{かほ}と両手^{りやうて}をわたたと振^ふった。

「ち、違いま、いえもちろんすつこく精進でですけど、でもそういうことじゃなくて……」

「ほう、キミは脚フェチだったのか。悪かったな、私にはふくらはぎも足首もなくて」

今度は黒雪姫が、バイオレットブルーの眼を側谷に光らせながら言う。ハルユキは顔の向きを変え、再度の弁解。

「そっそんなっ、僕先輩の脚も大好きで……って、別にフェチとかそーゆーのじゃなくてすね……」

これ以上何を言っても泥沼な気がしたので、右手で南東の方向を指さして叫ぶ。

「そそそれよりホウ、ガイドカーソルが向いてるの、あっちのほうですよー 行きましよう早く行きましよう」

ハルユキの言葉どおり、視界の中央には灰色の三角形が二つ同じ方向を指して静止している。その先に、今日の会議のホスト役を務める青レギオンの幹部二人がいるはずだ。更に、カーソルの上側には二本の目Pゲージが並び、中間ではカウントダウンが進行中、一八〇〇秒から開始されたはずのそれは、すでに一七五〇にまで減少している。

「ン、そういえば百秒以内に集合鎮守とか言ってたな。仕方ない、走るか」

三人は頷きあい、一斉に魔都の街道を南へとダッシュした。

一般対戦のギヤラリーには、地形オブジェクトを破壊する権利がない代わりに、最大限の移動力と跳躍力が与えられている。ハルユキたちは行く手を塞ぐビル壁を駆け上り、今度は

屋上から屋上へと一直線に突進する。

二十秒ほど駆けると、進行方向を覆っていた深い霧が一気に切れた。眼前に広がった光景に、ハルユキは思わず声を上げた。

「うわっ……、で、でかい……………」

「城」だ。

カーソルが指す位置の少し南東寄りに、あまりにも巨大な建築物が天を衝くようにそびえている。青光りする鋼鉄の尖塔と、奇怪な彫像群によって構成されるその城は、魔都ステージの中にあって他を圧する存在感を放ち、いつそ神々しくすらあるほどだ。周囲は高い城壁と広い水路に囲まれ、入り口らしきものはない。

いままで移動や新道で行った無数の対戦の間に、滅か東の空にそびえる城の姿を垣間見たことはあったものの、これはどの距離にまで近づいたのは初めてだった。巨城の威容にハルユキがぼかんと見入っていると、すぐ右側で黒雷竜が囁いた。

「あれが、現実世界に於ける〈皇居〉だよ。加速世界でも、唯一いかなる手段を用いようとも立ち入れない場所だ」

「と……飛んでもダメなんですか？」

質問に答えたのは、左側を走る楓子だった。

「ええ。城壁の上下方向に、不可視の障壁が設定してあるのです。だから、飛んでも地面を滑

つてもダメ。初期にはずいぶん色々な方法が試されたようにですけどね……」

「ああ、あの中には超スゴイ強化外装が隠されているとか、色々噂が流れてな。だが、ついに誰一人侵入できた者はいなかった。——敵対戦フィールドでは、な」

黒雪姫のその言い方に何かを感じ、ハルユキは問い返した。

「え……それって、どういう意味ですか？」

しかし、答えが戻る前に、楓子が鋭く囁いた。

「見えた……あの丘の上！」

指さすほうに視線を向ける。すると確かに、行く手の小高い丘の上に、小さな人影が二……いや三つ見えた。現実世界では、おそらく皇居の《東御苑》と呼ばれる場所だ。本体と違つて一般開放されており、ハルユキも昔小学校の社会科見学で行ったことがある。

やや速度を落とし、慎重に近づいていく。アタツタされる可能性のないギョウリィでの参加とは言え、ついに加速世界の支配者たる《純色の王》たちに接近直視するのだと思うと、身震いを抑えることはできない。

広い水路に架かる橋を渡り、壮麗なゲートをくぐつて、丘の斜面に設けられた階段を上る。

絶対不可侵の《魔城》はすぐ右手に屹立しているが、ハルユキはそちらに視線を振ることもなく、ただ丘の上だけを遠視し続けた。

やがてついに階段が途切れ、広大な石畳の空間が眼前に開けた。

現実世界では、江戸城本丸跡の芝生が広がっているはずの場所だ。しかし植物は一切存在せず、代わりに鋼鉄の円柱が大きな環を作って立ち並んでいる。

しかしなぜか、奥の柱一本だけがやけに短く、五十センチほどの高さしかなかった。

そしてそこに、一体のデュエルアバターが腰を下ろしていた。

青い。吸い込まれるような、透明感のある深い青色だ。空の色でも、海の色でもない。実在する何にもたとえることの難しい、純粹な青を全身にまとうている。

装甲の形状は、完全なる騎士タイプ。しかも《災禍の鎧》のような福々しさはかけらもない。神話の英雄然とした雄々しい姿だ。バイザーつきのヘルメットの両側にはドラゴンのような角が伸び、左腰には長大な両手剣を佩いている。

右膝に左脚を乗せ、両腕を組んでリラクサスした姿勢を取る青いアバターの体軀は、それほど大きくはない。おそらく立てばタタム——シアン・パイルのほうが高いだろう。しかし、その全身からは、まるで宇宙から迫り来る剛石のような圧倒的プレッシャーが放散されていて、ハルユキは二十メートルも手前で立ち止まってしまった。

「……あ、あれが……」

抑えた声で吐くと、隣でレイカーが小さく頷いた。

「ええ、あれが、新宿エリアと文京エリアを支配するレギオン（レオニーズ）の頭首……（剣聖）、（神獣殺し）、その他多くの二つ名を持つレベル9で、青の王と（ブルー・

ナイト)です」

「青の……騎士……」

他のゲームならば、純粋モンスターに付いていそうなシンプル極まる名前だが、加速世界で聞くとは逆に絶対的な唯一無二性を感じさせるものがあつた。

底知れの威圧感にぶるりと背中を震わせてから、ハルユキはようやく思い出した。あの騎士は、別にハルユキの対戦者というわけではない。立場的には、お互い単なるギョウラー同士なのだ。一切の攻撃力も、HPゲージすら持たない傍観者なのに、これほどの圧力を受けるとは――仮に一对一で対戦する羽目になつたらと考えるだけでも恐ろしい。

と、その時、キン、と小さな音が響き、ハルユキの硬直を解いた。

それは、黒雪姫が一步前に踏み出した足音だった。黒の王ブラック・ロータスは、青の王の制気なとまよ風同然と言わんがばかりに数歩進むと、右手の剣をひらりと動かした。

「今日は貴様がホストだからな、顔を立てて先に挨拶してやる。――相変わらず暑苦しい格好だな、ナイト」

黒雪姫の白詞に、ななななに挑発してゐるのかあ！ とハルユキは脳内で轰鸣を上げた。その上隣でレイカーがくすくす笑うので、乾うくバクダツシユで逃走してしまいかけたが、幸いそれより早く青い騎士のアバターが、清酒な響きのある少年の声で言った、

「……あのさあ、それ挨拶って言わないぞ、ロータス。あんたも相変わらずツンケンした人だ

な、二年半ぶりだったのにさ」

かしや、とアーマーを鳴らして肩をすくめる。同時に、発散されていた救気がうそのように消散する。

どうやら青の王は、口調からすると思ったよりくだけた人物のようだった。青のレギオンは毎週欠かさず黒の領土を攻めてくるので、てっきり王宮人も黒雲姫の副正に勝っているのかと思っていたが、案外そうでもないらしい……

とハルユキが肩の力を抜きかけた、その瞬間

青の王の両側、たなびく濃霧の向こうから、フォルムの酷似した二つの人影が音もなく潜り出してきた。

——武者だ！

瞬間的にそう考える。細身の長軀をよろろアーマーは、横長の金属片を重ねた和風の具足だ。色は、左のアドバイザーが深い群青。右はやや明るい青緑。頭には兜ではなく鉢金を巻き、結わえた髪が長く垂れている。体つきからしても、両方とも女性型だ。

二人の女武者アドバイザーは、滑走するような不思議な歩法で数メートル前進すると、左腰の刀の柄に手を掛け、低く声を発した。

「我らが朝聖を弁する口さよ、王とても許さんぞー」

「裏切者が、この場に居れるだけで感謝するがいいー」

そして再び、びりびりと空気を揺らすような殺気が吹き寄せてきて、ハルニキはひいひいとすくみ上がってしまふ。

黒の王の子分としては、ここで同じくかっこいい台詞の一つも吐いて応戦すべきなのだろうが、何か言った瞬間首を飛ばされそうな気がして口を開くこともできない。何せ、間違ひなくあの武者たちこそがこのフィールドを生成した青の王の側近二名、つまり《対戦者》であって、双方同意のもとに妨害的ギャラリーを排除する権利を持っているのだ。

——しかし、次の瞬間。

「あら、しばらく金わなかつた間に、ずいぶんと偉そうな口が利けるようになったのね、お嬢ちゃんたち」

笑いを含んだ声を発したのは、スカイ・レイカーだった。高いヒールをかつかつと鳴らして風雲の隣に並ぶと、右の掌を武者たちに差し伸べ、指をひらひらと動かす。

「いつかみたいに、また二人並べて都庁の天辺から吊してあげてもいいのよ？」

ひ、ひいひいひい——とハルニキは再び無音の震鳴。あなたそんなことしたんですか！と胸中で叫んでから、それくらいしても不思議はないこの人なら、と納得する。

二人の随武者は、切れ長のアイレンズに燃えるような怒りの色を浮かべ、同時に刀の柄を握った。

「貴様……」

綺麗に揃った異口同音の叫びを、背後から青の王の、苦笑を含んだ声が遮った。

「そのへんにしときな、コバル、マーガ」

「……………は」

素早く低頭し、二人は同時に一歩下がる。

ハルユキはほうっと息を吐いてから、改めて視界上部に並ぶ二本の目Pゲージを眺めた。

左のゲージの下には、「ヘコバルト・ブレード」、右のゲージには「マングン・ブレード」というアバターネームが輝いている。名前と外見がここまで重なっているからには、あの二人は現実世界でもかなり似通ったキヤラクターなのだろう。

仮に双子の姉妹だったりした場合、二人ともを最接近として捉える青の王は、色んな意味でスゴイ人だな……、などと妙な感想を思い浮かべていると、黒雪姫が軽く肩をすくめながら再び言葉を発した。

「それはさうと、ナイト。自分だけ座ってないで、こちらにも椅子を用意してくれないかな」

「おっと、こりや失礼」

青の王は手振りで二人の鎧武者に合図する。

すると武者たちはその場で腰を落とし、もう一度刀の柄に手を置いた。ハルユキがびくっと身を縮める暇もなく――

高く澄んだ金属音とともに、二条の青白い閃光がステージを広く照らした。

見開いたハルユキの眼にも、二人の右手が霞むように動き、刀が一瞬チカッと燦めき、再び鞘に戻る光景が、わずかに三フレームの静止画としてしか捉えられなかった。

直後、白く流れる濃霧がぼうっと細く途切れ、それを追うように、武者たちの左右に屹立する巨大な円柱が同時に二本ずつ、三回にわたって音もなく倒れ始めた。計六本の柱は、立て続けに轟音を響かせて地面に激突し、無数の青黒い金属塊へと砕け散る。あとには、鏡のように滑らかな切断面を持つ《切り株》だけが残される。

「……………う……………そだろ……………」

ハルユキは呆然と呟くしかなかった。

この一般対戦フィールドの属性は間違はなく《魔都》だ、第一の特徴は、地形オブジェクトが異常に硬いこと。かつてハルユキが心意シスラムを修行した折には、同じ魔都ステージの建物の壁に深さ数センチの傷を穿つのに、実に一週間もの猛特訓が必要だったのだ。

なのに、コバルト・ブレードとマンガン・ブレードの二人は、刀の一閃で同時に三本もの柱を斬り倒してみせた。もし柱の代わりにハルユキが立っていたら、一撃で首と胴が泣き別れになっただけのは間違いない。

——あれが、青のレギオン最精鋭リンカーの実力。そして《王》の力は更にその上を行くということ。

——僕は、僕たちは、あんな連中と戦おうとしているんだ……………。

余りに深い戦慄にアバターの全身をわななかせていると、不意にばんと背中を叩かれた。

スカイ・レイカーだ。一切の武装を持たない艶麗なアバターは、ハルユキの耳に口を寄せて囁いた。

「動かない柱を倒すなんて、ただの見せ技ですよ、猶さん。あんなのにビビってるようだと、あとでお仕置きしますよ♡」

びっくーん。

と棒立ちになるハルユキを置いて、黒の王とその盟友は平然と歩き始めると、一番近い右端の柱の切り株に黒雪姫だけが腰を下ろし、レイカーはその後ろに立った。武者アバターの刀よりも、レイカー先生のお仕置きの方が怖いハルユキとしては、そそくさと後を追ひ、レイカーの隣で腕を組み胸を張って立つしかなかった。

武者たちも再び主の背後に控え、一瞬ステージを覆った静寂を、黒雪姫がやれやれという調子の声で破った。

「……さて、招待主の挨拶も終わったことだし、お前たちもそろそろ顔を見せたらどうだ？もうとつくに百秒経ってるぞ」

確かに、タイムカウントはすでに一六〇〇秒を切りあうとしている。しかし、顔を見せたら、とはどういうことだろう。この場にはまだ、青と黒のレギオンの六人しか……。

ハルユキがそう思い、視線を巡らせようとした、その寸前――。

「シンドよ、速應^{すみこたへ}してやったのにその言いぐさかよ、ロータス」

無垢^{むく}な幼きと不埒^{しちや}の強かきが同居した声がどこからともなく響き、したつ、という柔らかな足音がそれに続いた。

はつと顔を向けると、右に三メートルほど離れて隣接する柱の切り株上に、ひとつのシルエソトが出現していた。

直立する肉食獣^{肉食獣}、といった印象のフォルムを持つ暗赤色のアバター、三角に尖る耳と長い尻尾^{しっぽ}を見るまでもなく、**（血まみれ仔猫^{アネコネコ}）**の二つ名を持つ赤のレギオン**（プロミネンス）**の幹部、**（フラッド・レバード）**であると解る。

そしてその左腕には、先の声の主である、小柄な真紅のアバターが腰掛けていた。

ツインテール状に伸びる二本のアシテナ。つぶらなアイレンズ。丸く滑らかな四肢^{しし}の装甲、極小のサイズと相まって、まるで一粒のルビーのようにも思える可愛らしいその少女こそが、純馬エリアと中野エリアを領主とするプロミネンスの頭首・赤の王**（ヘスカーレット・レイン）**なのだつた。

（不動要塞^{アムネシス}）の二つ名の由来である巨大な火力コンテナは未装着だ。可憐な横顔を見つめながら、ハルユキは彼女らに、レイン、バドさん、と声を掛けようと口を開きかけた。しかし、直後、

二人の赤糸アバターから、青の王にまったく見劣りしないオーラが放たれ、ハルユキの目を

つぐませた。

心算の《過剰光》とは違う。不可視の、純粋なる闘気だ。

万物がデジタルコードで記述される加速世界ではあるが、この《気を感じる》という現象は決して錯覚ではない。ロジック的には、《デュエルアバター》が内包する戦歴情報の重さが他人に圧力として感じられる》のではないかとオカルトめいた言われ方をされているが、事実、真の強者はその存在だけで格下を圧倒するのだ。いま、赤の二人がハルユキをすくませているように。

赤の王、本名上月由仁子ことニコ、そしてブラッド・レバードことバドさんの二人とハルユキは、現実でお互いの生身を晒しあった友達同士だ。そしてまたプロミネンスとネガ・ネビュラスも、過去の共闘をきっかけに無期限の休戦協定を結んでいる。

しかし、だからと言って、どんな場でもべたべたと馴れ合うような関係ではないのだ。と二人の誠しい横顔は告げていた。かすかな寂しさと同時に、ハルユキはそれが正しいことなんだとも感じた。なぜなら、ブレイン・バーストは、それを持つ誰かが競い合って強くなるために存在しているのだから。

いや――。

本当はもう一つ、ニコに顔向けしづらい理由がハルユキにはある。

現在もシルバー・クロウに寄生していると思われる強化外装は、ニコがレギオンマスター

として、先代の持ち主だった自分の《鋼》を《鉄罪》してまで消滅させたはずだったのだ。つまりある意味では、ニコはこの場に笑う王たちの中でもっとも強くハルユキの処刑を主張する動機を持っているのだ……。

その先を考えてしまうことを無理矢理に止め、ハルユキは顔を前に戻した。同時に、ブラッド・レバードの声が低く響いた。

「（フロロ）からは王と私の二人だけ。挨拶は省略」

腕から飛び降りたニコが鋼鉄の丸椅子に掛けると、レバードはその背後に立ち、両腕を腰に当てた。

これで、七王のうちの三人までが揃った。半円を描いて並ぶ、切斷された七本の柱のうち、中央の一本に座するのが青の王。向かって右端に黒の王。その右隣に赤の王という配置だ。

次はどこが来るんだ、とハルユキが身構えていると――

霧の彼方から響いてきたのは、足踏ではなく、喉にこもった高い笑い声だった。

「タッ、タッタッタ……」

明らかな嘲りと侮蔑に満ちたその笑いには、確かな聞き覚えがあった。しかし聞こえてくる方向が解らない。きょろきょろと周囲を見回すが、そのたびに発生音が背後に回り込むようだ。「タタ……、（土）ねえ？ 鼠の配懐が嘩かなら、王とは《純色の七王》の略だった気がしましげだね？ でも、そこに座ってるおちびさんは、赤と謂うにはちよつと色が安っぽくはない

ですかねえ……うう」

いずこからか投げ掛けられたその言葉は、明らかに赤の王スカーレット・レインを侮辱したものだ。

ニコは、七大レギオンを統べる王たちの中でただ一人の（二代目）である。先代の赤の王（レッド・ライダー）は、二年半前に黒の王の一撃によって首を落とされ、レベル9同士のサドンデス・ルールが適用されて加速世界から永遠に退場した。一度は瓦解しかけた（プロミネンス）を再興し、二代目のマスターとして名乗りを上げたのがニコだ。確かにアバターの色こそ、純色の赤ではなくやや明度の高い、スカーレット紅だが、それで騎士扱いされる謂われなど絶対にない。なぜなら――

「い、色なんか関係ないだろ！ レインは実力でレベル9まで上り詰めたんだ、それ以外に王の条件なんかない！」

――のだから。

と、ここてようやくハルユキは、自分が脳内の思考をそのまま口に出して叫んでいたことに気付いた。隣のレイカーがくすつと笑い、離れて座るニコ商人も苦笑いの気配を露らす。

「……あたしの言いたいことをそのカラスに言われちゃったから、ひと言だけ追加しとくぜ。――安っぽさじや、アンタのパナナ色もなかなかいい勝負だと思っけだな。時間ねえんだ、と

つとと出てこいよ」

赤の王はそう言い放つと、右手の指をパチンと鳴らしざま、向かい側に並ぶ三つの円柱の真ん中を指さした。

ハルユキが睨（にら）んで凝視（ぎょうし）すると、いままで空っぽとばかり思っていた短い柱の上に、小さな紙人形のような物体が立っているのに気付いた。首を五センチほど傾（た）げかけてから、ようやく悟る。

あれは、かつて王たちの刺客（しやくそく）から身を隠していた黒雪姫（くろゆきひめ）が、加減世界の情報を得るために使用していた物と同様の（観戦用タミーアバター）だ。声の主は、自分がギャラリーとしてこのフィールドに接続するという仕組みを遠手に取り、アバターを極力目立たないものに変更していたのだ。

ハルユキがそう感づいた直後、紙人形を中心にはわんと白い煙（けむ）が湧（わ）き上がった。

それがステージの微風に吹き払われたあと、円柱の上に立っていたのは、態（たい）やかな――あるいは毒々しい黄色の外装を持つ、細身のビエロ型デュエルアバターだった。

曲がりの大きいツノが左右に突き出した帽子。笑い顔の形に細く眼と口が切られたフェイスマスク。丸く膨（ふ）らんだ肩と腰から伸びる、ひよろりと長い四肢（し）。

針のように細い右手の指を額（かぶ）に添え、ビエロは尚も含み笑いを漏らした。

「タッタタ、バナナ色は酷（こ）いですねえ、私としては、ウラニウムにたとえられるのが好みなんですけどね？ でもまあ、仕方ないですね。私とお子様はバナナ好きと相場が決まっていますか

らね、タクタ……」

ゆらゆらと頭を動かして唯ひ続けるビエロこそ、かつて黒雲姫とニコをまとめて殿にかけようとした（黄の王）、台東・荒川・足立の三エリアに加えて秋葉原をも支配するレギオン（タリプト・コズミック・サーカス）頭首——（イエロー・レディオ）だ。

その仕草や饒舌さからは、他の王たちのような重厚な威圧感は見いだせない。

しかし、決して侮っていい相手ではないことを、かつて彼と黒雲姫の接近戦を間近で目撃したハルユキはよく理解している。レディオは漏じりけなしの黄色、つまり純然たる（間接攻撃系）なのに、ブラック・ロースと一歩も引かずに斬り結んだのだ。

どうやら黄の王は、一人の側近も連れずに現れたようだった。笑いを取めると、右手を胸に当て、整頓な仕草で一礼。そのまま増るように円柱へ腰掛ける。

——これで、四人。

「……あと、来てないのは、ええと……」

眩いたハルユキの耳に、今度は堂々たる足音が届いた。

がつ、がつ、と硬く重い振動がステージを揺らす。右後方からだ、きつと振り向くのと、霧をかき分けて大柄なアバターが出現したのは同時だった。

大きくはあるが巨体と言うほどではない。単純なサイズなら、強化外装を展開したニコほもらん、青のレギオンの中堅メンバー（プロスト・ホーン）にも及ばないだろう。

しかしハルユキは、ここまで圧倒的な重厚感を備えたアバターと対面したことはなかった。

マスクや肩、下半身は全て、分厚い板を思わせるアーマーに覆われている。だが腰が細く引き締まっているので錫重な印象はかけられない。右手は空だが、左手にはこれもどっしりとした大盾が添えられる。

そして、全ての装甲を染める色は、エメラルドよりも深く鮮やかなグリーン。

「……………緑の王……………」

かつてこのアバターを、過去のリプレイ動画中で数秒だけ見たことのあるハルユキは小さく言った。隣でレイカーが頷き、囁きで補足する。

「ええ、あれが、渋谷から大田にまで至る広大な領土を持つレギオン（ダレート・ウォール）の頭首、〈グリーン・ドラゴン〉。二つ名は〈絶対防衛〉」

「確か、一度もHPゲージが黄色くなったことがないんですよ……」

阿レベル対戦だと、なとん勝つてもちよくちよくゲージが真っ赤になってしまうハルユキは、思わずため息を交えて呟いた。すると、すぐ前に腰掛ける黒雪姫が、フンと小さく鼻息を鳴らした。

「奴はそもそも〈対戦〉の絶対数が少ないんだ。レベルをりまで上げるためのポイントを、ほとんどエネミーのソロ狩りで稼いだらしいからな。それはそれで大した偉業と言うべきなんだろうがな……………」

「ははあ……………」

ハルニキは再び喉声を出らず、無制限フィールドを闊歩する異形の「エネミー」は、健急タラスでもとんでもない戦闘力を持っているうえに、苦勞して倒してもポイントの実入りはごく少ない。通常のRPGでは「趣味な経験値稼ぎ」が大好きなハルニキも、エネミー狩りは一般戦闘での負けが込んだ時でもない限りちよっとカンベンという心境なのだ。

離れた場所から「レベ上げ戦人」として尊敬の視線を向けられていることなど知るよしもない緑の王は、揺るぎない歩みでニコと青の王の間の四柱に近づくと、どかっと重々しく腰を下ろした。黄の王と同じく、随員なしでの参加だ。

そのままひと声も発さずに静止してしまいが、それを不自然に思う者は誰もいないようだった。どうやらかなりの無口キヤラとして定着しているらしい。

再び廟を前に戻し、ハルニキは大きく一度深呼吸した。

最強者たる《王》たちの登場シーンも、これだけ続くときすがにプレッシャーには慣れてきたようだ。実は小刻みに震えていた闘陣もいつの間にか固定され、両手の冷たい痺れも消えている。

——そうだ、何もビビる必要はないんだ。僕だって、黒の王ブラッタ・ロータスの手下……じゃない《子》なんだ。レイカーさんみたいに堂々としていればいい。

内心で自分に言い聞かせ、ぐいっと胸を張——あらとした、その瞬間。

「……………う……………」

まるで冷たい手に心臓を鷲掴みにされたような感覚に襲われ、ハルユキは最大限にすくみ上がった。

——なんだ……………これ。

——殺気……………いや、そんなもんじゃない。もっと断定的な……………排除の意思だ。僕を処刑して、加速世界から追放するという……………無音の宣言……………。

かつ。かつ。

どこからともなく、高い足音が響きわたる。

硬直しながらも、懸命に耳を澄ませる。北だ。半円影に座る王たちに正面から形を寄る形で、足音は接近してくる。強張った首を軋ませ、視線を向ける。

豪華の紋方に、ひとつのシルエット。

影だけを見た段階で、女性型アバターだと直感できる。長い髪パーツとスカート型アーマーが揺れているからだ。腰は有り得ないほど細くくびれ、両脚もまた針のようだ。

かつ。かつ。かつ。剣で地面を突くように鋭い足音は、スカイ・レイカーの倍は高いピンとールのせいにか。

その足が、立ち並ぶ柱の環に踏み込んだ途端、深く立ち込める霧が殺気に耐えかねたかのよう大きく吹き払われた。

ついにその髪を露わにしたアバターを、ひと言で表現するならば——《王》ならぬ《女王》以外に有り得なかった。

髪と見えていたのは、顔の四圍から伸びる長いベール状の装甲だ。フェイスマスクは美しくも鋭利で、肩や胸パーツも、フェミニンでありながらどこか威圧的。ウエストの高い位置からはロングスカート状の分割装甲が伸び、その隙間では細く長い脚が付け根ぎりぎりまで露わになっている。

間違ひなく、ハルニキがこれまで眼にした中で、もっとも《妖艶》と称すべきデュエルアバターだ。しかし、その美しさは手を伸ばしたくなる種類のものではない。顔部のタイアラを含め、体の各所を、鋭いトゲが埋めくイバラ状の装飾が覆取っているからだ。

右手には、一メートル半ほどもありような鋼杖を携えている。その先端にも、一瞬長い針をもつ鋸歯の裏が輝く。あらゆる装甲の色は、光を受けるたびに幻惑的に揺らめくミステリアスな紫。

「出たわね……」

かつ、かつ、と歩み寄ってくる女王のアバターを、アイレンズを細めて監視しながら、スカイ・レイカーがこくかすかな声で囁いた。

「あれが、恐らく今日集う王たちのなかで、もっともわたしたちに敵対的な相手です。銀座から湾岸エリアを支配するレギオン（オーロラ・オーバー）の頭首、（素電后）の二つ名を

持つ紫の王、(パープル・ゾーン)。そして右手に携えられる錫杖が、(七の神器)の一つ、

(サ・テンベスト)」

「あ……神器？」

聞き慣れない言葉をハルユキが驚き込しに口にする。レイカーは早口に解説を加えた、

「加護世界に、合計で七つ存在すると推測される最強クラスの強化外装です。現在確認されているのは、あの杖に加えて、青の王の持つ大剣(シ・インバルス)と緑の王の持つ大盾(サ・ストライフ)。そして……」

そこでレイカーがなぜか一瞬言いよんだようにハルユキには感じられたが、訊き返す機会はどうもなかった。

環柱群の中央をゆっくりと進んできた紫の王が、切り倒された七本の柱のいちばん右端に座る黒雪姫にもっとも近づいたところで足を止め、錫杖の下端で地面をカッと音高く突いたからだ。

薄いペールが揺れ、マスクがわずかに黒雪姫へと向けられる。シヤープな形状のアイレンズに、アメジスト色の冷光が宿る。

いままて女王型アバターが非指向的に発していたブレッタシヤーにすら縮み上がっていたのに、その圧力がネガ・ネビュラスの三人にフォーカスされたと感じた瞬間、ハルユキは本気で気絶しそうになった。

これが明確な怒りや憎悪なら、むしろまだ対処できる。ハルユキとても、バーストランカーとなつてからの八ヶ月で、ありつただけの怒りをぶつけ合うような戦いは何度か経験しているからだ。

しかし、紫の王から放たれるものは、単純な感情などではなかった。解り合える余地などまったく存在しないと思わせる、絶対的な否定の意思だった。この相手とは、たとえ状況が今後どのように変動しようとも、永遠に抗争を続けるしかないのだとハルユキは直感した。それこそ、加速世界に映画の時から来るまで。

紫の王バール・ゾーンは、二秒ほどブラッパ・ロータスを見下ろしてから、穏やかに言葉を放った。

「久しぶりだね、ロータス。まさか、こうしてもう一度あなたと口をきく日が来るとは思つてなかったな」

口調には刺々しいところは皆無だったが、それは氷の滑らかさだった。一度碎ければ、無数の鋭利なエッジを生むに違いない緊張感に、ハルユキはいつそう鼻を詰める。

威嚇の中にも、女の子らしい甘さの混じる紫の王の声には、どこか聞き覚えがあった。少し考えてから、すぐに思い出す。ハルユキは確かに彼女の声を一度耳にしているのだ。もちろん直接にはない。かつて無頼派フィールドで眼にしたリブレイ映像中のワンシーンに、紫の王の声が記録されていたのだ。記憶の底から、その音声が甦ってくる。



——ライダー、今の聞き捨てならないわよ！

——ちよつとちよつとね！

憤慨したような、それだいて甘えるような少女の叫び声。

映像中ではこの時、初代赤の王レッド・ライダーの首に、黒の王ブラック・ロータスが両手を回して寄り添っていた。だから、赤の王と親密だったという素の王は、ぶんすかという表現がびつたりくるような声を上げたのだ。

しかし、その直後——。

ブラック・ロータスの両腕の側が巨大な鎧の如く閉じ、レッド・ライダーの頭部と胴体を切り離した。

レベルリに述べたバーストリンカーは、同じレベルリの相手に敗れた瞬間全てのバースト・ポイントを失うというサドンデス・ルールを課せられている。つまりその瞬間、赤の王は加速世界から永久に追放されたのだ。

リブレイ映像の最後に記録されていたのは、バール・ゾーンの、相を引き裂くような悲鳴だった。

ハルユキの聞いた話では、その一幕の直後、黒書姫は残る五人の王全員を相手に死闘を繰り広げたのだという。しかし一人も倒せず、だが倒されることもなく、三十分の対戦時間が終了した。以来黒書姫は、二年にもわたってグローバルネットを遮断し、梅堀中のローカルネット

に離伏し続けた。去年の秋に、シアン・バイルの襲撃とシルバー・クロウの誕生という契機が訪れるまで。

そのような、余りにも重い過去を背負った二人の王たちは、更に数秒間視線とオーラをせめぎ合わせた。内心、ハルユキはブラクタ・ロータスが顔を伏せてしまうのではないかと危惧せずにはいられなかった。黒雪姫は、自分がレタド・ライダーを不意打ちによって討ったことを心の奥底ではきつと今も悔いている。たとえ、赤の王が、もう自分がバーストリンカーであったことを覚えていないとしてもだ。

――しかし。

黒水晶のアバターは、鋭利な形状のフェイスマスクを小揺るぎもさせずに、灰の女王の視線を受け止め続けた。

やがて、黒雪姫の低く滑らかな声が、激震漂うフィールドに流れた。

「私もだ、ソーン。次に会う時こそ、どちらかの首が落ちるのだと確信していたからな」

動揺の色など欠片もない落ち着いた言葉に、紫の王はゆっくりとアバターの眼を瞬かせた。次に発せられた声が、わずかに冷気を増しているように思えたのは気のせいだろうか。

「……そうなるかも、ね？ たとえば、この場に集まった全員が、『通常対戦』から『バトルロイヤル』へのモードチェンジに同意したりすれば……可能性はあるよね」

こくり、と生唾を呑み込みながら、ハルユキは「とんでもない冗談じゃない絶対同意なんか

「しません！」と叫びそうになるのを必死に堪えた。

だが悪魔殿は、ふ、と短い笑みを滲ませて平然と答えた。

「そうなれば、話は早いな。今日が、ブレイン・パーストというゲームがクリアされる日になるのなら、面倒な会議などする必要もなくなる」

途端、ハルニキは再度びきーんと凍り付く。その言葉は、今ここであと四人の王を狩ってレベル10になってやる、という直言にも聞こえる……というかそれ以外では有り得ない。隣のスカイ・レイカーの、平然と立っていられる剛胆さがまったく信じられない。

紫の王は、黒の王の切り返しに小さく首を傾げ、

不意に、右手の錫杖で軽く石畳を突いた。

きんつと鋭い音が響くや否や、奥にハルニキの心臓を凍かしめる状況が出現した。なんと、紫の王の歩いてきた方向から、何重もの足音を綺麗にシンクロさせて、実に八人ものパーストリンカーが姿を現したのだ。

色も装甲の形状も様々。しかし、全員がとんでもない手練れであることは一目で知れる。恐らく、紫のレギオンの最高戦力を揃えてダイブさせたのだらう。

パール・ソーンは、ここで初めてにこりと微笑み、言った。

「冗談だと思われたなら心外だな。もちろん、ちゃんと準備してきたんだよ。仮にあなたと戦うことになった時、今度こそ取り逃がさないように、ね」

示威^{せいし}やったりではない。本気だ、この人の内側には、理解できると思うのもおかしいほどの強い感情が封じられている。

息もできないほどのプレッシャーを感じ、ハルユキはごく小さく右足を引いてしまった。

だが黒雪姫は、向も態度を崩すことはなかった。なんと、この状況で、「ふ、ふ……」と声を出して笑って見せたのだ。

「ふふ……、なるほど、これはお見せでした。だがなゾーン、本気で私の首を狙^{めが}っているなら、その手勢はエリア境界ぎりぎりに伏せておくべきじゃないか？ あつちのレディオを見習^{まな}つてな」

えっ、とハルユキは対面側に座るイエロー・レディオを見た。黄色のビエロは、小さく肩を動かすだけで何も言わなかったが、確かに考えてみれば、会議が戦闘^{せんとう}へとなだれ込む可能性が○・○○パーセントでもあるなら、黄の王が単身でやってくるはずがない。

黒雪姫の指摘に反応したのは、紫の王ではなく、八人の随員^{ずいゐん}から一人抜け出してきた女性型アバターだった。

装甲色は、ワインを思わせる濃い赤紫。大きな鉤^{かぎ}つき帽子^{ぼうし}と広がった大襟^{おほえり}が、まるで軍服のようだ。しかし両腰には銃^{てい}ではなく、輪^{りん}に巻いた鞭^{むち}が装備されている。

女性士官型アバターは、紫の王から一步引いた位置で立ち止まると、冷ややか極まる声を放った。

「優勢もそこまでいくと滑稽だ、穴蔵の王、地面から這い出してあれこれ跳ね回っているよ。うだが、貴様のけちくさい辺境の領土など、六王が本気になればたった一日で掃き潰せることを忘れてもらっては困る」

惨憺の極まる言いぐさだったが、ハルユキはぐつと奥歯を噛み締めることしかできなかった。残念ながら、士官アバターの言うことは真実だと認めざるを得ない。現在、ネガ・ネビュラスは杉並区全域を支配しているが、毎週末の領土戦争に挑んでくるのは七割以上が中小規模のレジオンで、六大レジオンからは東に隣接する（レオニーズ）が常時一、二チームと、南の（グレート・ウォー）がたまに参戦する程度だ。しかも挑戦者の平均レベルは4から5と言ったところで、7以上のハイランカーが現れたことは一度もない。

それでも、メンバーがたった五人しかいないネガ・ネビュラスにとっては、領土維持は決して楽な仕事ではないのだ。万が一、六大レジオンが総力を挙げてた、一回の戦争時間に集中攻撃してくれば、膨大な回数となる防衛戦を半数以上勝ち抜くことはとてもできず、加速世界の地図から黒の旗は消滅するだろう。

つまり、ある意味では、六——いや休戦中のニコを除く五人の王が《様子見》してくれているからこそ、ハルユキたちはホームエリアである杉並を守り続けていられるのだ。

女性士官アバターに何かを言い返すことはおろか、胸中で反論することすらできず、ハルユキはヘルメットを解かせようとした。

しかし視線が足元に落ちる寸前、すぐ右側から凄と烘った声が響き渡り、ハルユキはハッと顔を上げた。

「できもしないことを、よくそこまで得意げに言えたものね。(アスター・ヴァイン)」

スカイ・レイカーだった。黒書姫の副官として、士官アバターの憎喝に一步も引かずに毅然と胸を張っている。

アスター・ヴァインという名らしい戦使いは、鎧の下で両眼を鋭く細め、いっそう温度の低下した声で応じた。

「できもしない……だとう？ 逃げ隠れている間に、戦力評価もできないほど顔を錆び付かせたのか？」

「あなたこそ、しばらく会わないうちに現実が見えないほど眼が曇ったようね」

びりびりと大気が帯電するほどのやり取りを、ハルユキはただ棒立ちになって聞き続けるしかなかった。

スカイ・レイカーの言う(現実)とはどういう意味なのか、どれほど考えても解らない。ネガ・ネビュラスと、赤を除く五大レギオンでは、人数でも合計レベルでも比較するのも空しいほどの差がある。いったいレイカーは何を言わんとしているのか……？

質問の答えは、わずかに間を置いて、レイカー自身の言葉でもたらされた。

「――王たちが温情でネガ・ネビュラスの領土を存続させていると思っているなら、それはあ

あなたが鈍いか信用されていないかのどちらかよ。潰せるものならとくに潰しているに決まっているでしょう。そうできないのは……(王)を名乗る彼ら自身が、その支配力が絶対的なものではないと知っているからよ」

「……なん、だと」

軋むような声を出すアスター・グアインに対して、紫の王は不気味な沈黙を保っている。その眼に浮かぶ光には、どのような感情も読み取れない。底冷えのする魔都ステージに、レイカの冷静な声が響き続ける。

「いい？ 六大レギオン、と言っても、所属メンバーの数は合わせて六百を超える程度。対して、東京都心に暮らすバーストリンカーは、現状で千人を上回る。領土範囲も、この千代田エリアを含め、四割近くが灰色の中立状態なのよ」

「……それがどうした。純色の六王以外のレギオンなど、どれも吹けば飛ぶような泡沫組織だろうが。貴様のちっぽけな居場所を含めて、な」

「そうね、どのレギオンも規模はささやかなものだわ。……でもね、無所属のバーストリンカーを含めて、その四百人には一つの共通点がある。即ち、(六大レギオンに加わっていない)という」

一瞬言葉を切り、スカイ・レイカーは、まるで彼女自身もレベル9の一員であるかの如き威圧感とともに続きを口にした。

「いい？ 彼らのほとんどは、自らの意思によって零細であることを選んだのよ。(不可侵条約)によって加速世界を停滯させている王たちへの反感ゆえにね。彼らは今、復活したブラッタ・ロータスと、黒のレギオンの動向に注目している。その(加速の意思)がリアルかフェイクかを測ろうとしている。そんな時、六王のレギオンが権力で潰しにかかったらどうなると思おう？ 確かに、領土地図から私たちの旗はいつとき消えるでしょう。でも、黒の王本人が加速世界から消えるわけじゃないし、レギオンそのものも存続する。そして小レギオンたちの動向は、(注視)からもう一歩進んだものになるでしょうね。もし彼らが一つの流れにまとまるようなことがあれば、それでもあなたは泡沫と侮(あなづか)っていられるかしら……？」

ここでようやくハルユキは、レイカーの言わんとするところをおぼろげに理解できた気がした。

先週、(ヘルメス・コード縦走レース)、あの軌道上に集った五百人以上のギヤラリーたちは、かつて裏切り者として追放された黒の王が登場しても、決して罵声(ののしり)を浴びせたりはしなかった。それどころか、熱い声援すら送ってくれたてはないか。そこには、黒の王への、(停滯状態を打破せんとする者)としての期待が込められていたに違いない。

あのエネルギーが、もし一つの勢力として結集することがあれば、それは、たとえば六王といえども無視できるものでは……いや、脅威と認識せねばならない事態ではないだろうか？

颯(さ)り込んだアスター・ヴァインに向けて、スカイ・レイカーは小さく右手を広げて見せた。

「理解してくれた？　いまの加速世界が、あなたが思うより遥かに緊迫した状況であることを、見せかけの停滯の下では、いくつもの大きな潮流がうねり始めているのだということを」

しんと静まりかえったワイルドに、清冽な声の残響がどこまでも広がりを、消えた。

沈黙を破ったのは、かつ、と踏み出された紫の王のハイヒールだった。

顔の向きを前に戻し、まるでレイカーの指摘など歯牙にも掛けていないかの如く、ハルユキたちの眼前を静かに歩み去っていく。

アスター・ヴァインも、最後に強烈な一瞥を残して後に続いた。少し離れて、残る七名の随員も二人を追う。

紫の王は、半円形に並ぶ七本の柱のうち、青の王と黄の王のあいだの空き席に座を占めた。背後に八人のバーストリンカーがV字を作って並ぶ。その威容が生み出す重圧は、明らかにこの場に集うどのレイオンよりも巨大なものだ。

——（オーロラ・オーバル）の領土が、杉並から遠く離れた銀座や有明でよかった。とハルユキはしみじみ感じてしまっただけで、慌てて音階を伸ばした。そんな弱気をすぐそばの二人に見抜かれたら、あとでどんなお仕置きをされるか判らない。誤魔化すように、小さく呟く。

「これで……六人ですね。あと一人は、ええと」

現在集っているのは、黒、青、赤、緑、黄、そして紫の各勢力だ、ということば、残るひとつは——。

しかし、ハルユキが思考の続きを声に出す前に、黒雪姫がごく低く囁いた。

「いや、来ない」

「えっ………」

「残る一人は、この場には現れない。間違ひなく代理を送り込んでくるはずだ」

なんてそんなことが何るんですか？ とハルユキは訳こうとした。

その寸前、視界の片隅にかすかな違和感が生じた。口をつぐみ、きょろきょろと視線を彷徨させる。

だが何も変わつた様子はない。魔都ステージの東御苑本丸跡は、変わらず白い霧を静かにたなびかせている。丸く立ち並ぶ円柱群のうち、約半分の七本が斬り倒され、即座の椅子には加速世界を支配する大レギオンの代表者七名が静かに腰を――

「えっ」

それに気付いた瞬間、ハルユキはびくんと上体を震わせた。

作られた椅子は七脚。今まで登場した王は六名。だから一脚は空いているはずだ。しかし、いまハルユキの視界に映る全ての椅子が埋まっている。登場を見落とした？ いや、有り得ない。累積しまくっていたハルユキだけならまだしも、レイカーや黒雪姫までもが気付かないなどということは考えられない。

なぜなら、空いていなければならぬ椅子は、黒のレギオンの三人の真正面に存在するから

だ、真横ならまだしも、正対する柱に誰かが近づき懸掛けたら、その動きは必ず見えたはずだ。だが現実には、ほんの十メートル少々しか離れていないその席上には、いつの間にか一人のパーソナリティが存在している。

ひょろりとした細身だ。落ち着いたシンプルなデザインの装甲に身を包み、武器らしいものは持っていない。唯一特徴的なのは、細長く尖った頭部だろうか。前面には曲線のパーティンダ・ラインが刻まれているだけで、顔も口も見当たらない。円柱の端に、両手両脚を揃えてまっすぐ座っているの、まるでデュエルアバターではなく装飾的オブジェクトのようだ。全身の色は、陶磁器を思わせる、艶の薄い象牙色。

とてつもなく存在感の希薄なアバターだった。他の王たちのような、その場にいるだけで放散される濃密なプレッシャーなど欠片も感じられない。いや、実際に置物なのだろうか？ まさか、最初からあそこにあつた映像を見落としていた……？

ハルユキがふとそんな迷いに囚われた、その瞬間。

象牙色のアバターが、両手を膝に置いたまま、かぐりとも腰を折り一礼した。上体が戻ると同時に、これも男声だということ以外に特徴のない声が流れる。

「レギオン（オシトリ・ユウヴァース）所属の（アイボリー・タワー）」と申します。白の王の全権代理としてこの会議に参加させていただきます。よろしく」

まるで、場が加速世界の対戦フィールドから、企業の本会議室に変わってしまったかのような

事務的極まる機嫌だった。

それを聞いた他の王やその側近たちは、抑制されてはいるが明らかな不快感を滲ませた。恐らくは、彼らもアイボリー・タワーの出現に気付かなかったのだ。ことに、すぐ隣に座る黄の王などは、尖ったつま先の片方をこつこつ床に打ち付けて如実な苛立ちを示している。

しかし、雰囲気が悪化したのはほんの数秒だった。

中央の椅子に掛ける青の王ブルー・ナイトががしやつと聲を鳴らして立ち上がり、強く響く声を発したのだ。

「よし、これで全員揃ったな。まずは、七レギオンが欠けずに参加してくれたことに礼を言うておくよ。お疲れさん」

「二年前前の七王会議とは、二人ほど面子が違いますがね」

などと余計な台詞を挟むのはもちろんイエロー・レディオだ。赤の王が二代目になっていることと、白の王が代理を寄越したことへの皮肉だろうが、反応する者はいなかった。青の王もかすかな苦笑いの気配を浮かべただけで進行を続けた。

「時間もないことだし、とっとと本題に入らせてもらう。——もう全員知ってることだろうかから掻いて話すけど、先週行われた（ヘルメス・コード縦走レース）イベントの真つ最中に、数百人のギャラリーの目の前で（心意シスナム）が発動されるという事件起きた。今日の第一の議題は、この状況に我々はどう対応すべきか、ということだ。と言っても、考えられ

る対応策は二つに一つしかない。今まで通りシステムの秘匿に全力を尽くすか、それを諦めて全パーストリンカーに公開するか、そのどちらかだ」

「公開など有り得ない、そうではよう？」

馬鹿馬鹿しい、と言わんがばかりに再びイエロー・レディオが声を上げた。細長い両手を広げ、大げさな動作で肩をすくめる。

「心意システムは、いわば核エネルギーみたいなものですよ？ 嚴重に管理されていなければ、加速世界に壊滅的な被害をもたらしかねない、それが我々の共通認識してたよね？」

ビエロが角つきの帽子をひょいと傾けると、左隣に座る紫の王が脚座に興を賜えた。

「その管理が破られちゃったって話でしょ、レディオ。核にたとえるなら、世界中に原料の核物質がばらまかれちゃったって状況だよ。今更どう回収しようっていうの」

「だからといって、親切にもミサイルの製造マニュアルまで配ろうっていうんですか？ 多数のパーストリンカーは、まだ心意システムの何たるかすら知らないんですよ？ イベントステージ設定の不具合で押し通せばいいじゃありませんか？」

紫の王の台詞に、紫の王が再反駁しようとしたその寸前、ひとつの声が割り込んだ。

「あの、発言いいですか」

律儀に手を挙げたのは、牛肉の左端に座る象牙色のアバター、白の王の代理だというアイボリー・タワーだった。全員視線が集まると、ぼたりと左腕を下ろして言う。

「対応を議論する前に、なぜこんなことが起きたのかを知るべきではないでしょうか。イベント中に心意を解放し、《空間侵蝕》にギヤラリーをも巻き込んだというそのバーストリンカーは、いったいこの場で、何が目的だったんでしようかね」

沈黙が、いつとき議場を支配する。

問題のバーストリンカーの名前と所属、それを、ハルユキはもう知っている。

だが、この場で口に出すことには巨大な躊躇いがある。なぜなら、あの謎の組織について聞けるということは、必然的に組織の《副会長》を名乗るバーストリンカーに触れるということでもある。しかしその者の冠する色は、誰よりも敬愛する剣の主と同じ——《緋色の黒》なのだ。そうと知れば、他の士たちは絶対に関連を疑うに決まってしまう……

「《加速研究会》なる組織に属する《ラスト・ジグソー》。それが、イベントで心意攻撃を行ったバーストリンカーの名だ」

「……………」

玲瓏たる声が続けた瞬間、ハルユキは息を呑んだ。

黒書姫だった。黒の王ブラッタ・ロータスは、自らに向けられるであろう疑念を怯れる気配もなく、滑らかに言葉を重ねていく。

「組織の全容は不明だが、レギオンではなく《サークル》と自称していたな。他に判明している構成員は、すでに加速世界から退場しているが《ダスタ・テイカー》と、もう一人……」

「ちよつと待ちな、ロータス」

その名前が明らかにされる寸前、ひとつの聲が鋭くインタラプトした。

ハルユキたちの右に席を占める赤の王、スカーレット・レインだ。両腕を胸で組み、この場でもっとも小柄なボディに不釣り合いな威圧感を発散している。

助け船を出してくれたのかニコ、そう思つてハルユキは肩の力を抜きかけた。しかし、

ちらりと向けられたつぶらなアイレンズから、炎熱の如きオーラが吹き寄せてきて、ハルユキの呼吸を止めた。

「……先に、もう一つの議題を片付けてもらふねーと、あたしはこれ以上この場にはいらねえよ。心意の脅威を云々するのに不適合な奴が、一人ここに紛れている。完全消滅したはずの『呪いの力』、究極的な心意の暗黒面をそのアバターに宿した奴かな」

「ほれ、とつとと席に戻れ。ロングホームルーム始めるぞ」

担任教師がばんばん手を叩くと、一部の生徒が不満げな声を上げた。

「えーつ、まだチャイム鳴ってないじゃない」

「なら、鳴った瞬間に椅子に座ってないやつには宿題増量な！ ほら鳴るぞ鳴るぞ、みんな、にー、いち……」

聴覚にっぱいに鳴り響く六時間目のチャイムと、生徒たちが慌ててガタガタと席につく音を、ハルユキは煩悩を突きながら聞いた。

窓の外では、相変わらずの小嫌雨が街を灰色に染めている。予備では梅雨明けは二週間後だが、その後にはすぐ期末考査が控えているので、持ちあびるという心境にもならない。

もちろん、テストをくぐり抜ければ輝かしい夏休みがやってくるのだが、そんなロングスパンを楽しみて前向きになれるほどには修行が成っていない。目の前の一週間に整い来る授業（とくに体育）と宿題（とくに作文）のことを考えるだけのために息をついてしまふ。

まあ、宿題に関してはぐずぐず先延ばししても、提出の寸前に1ペーストポイントを消費してやつつけるという荒技があるにはある。（加速）によって得た最後の三十分に分けるハルユキ

の消題處理能力は、成績優秀なタカムも「なんてその集中力を普段から発揮できないのか」と呆れるほどのものだ。

しかし、毎日朝から夕方までびっちり設定されている授業だけは加速で集中処理するというわけにもいかない。むしろ、体育の時間にへろへろとトラウタを走っている時などは、逆に減速機能が働いているのではないかという気すらする。いや、実際そうなのかもしれない。ブレイン・パーストの作動原理に基づけば、心拍が上昇することと思考のクロウタも加速され、体感時間は引き延ばされるのだから、つまり走っても心臓がばくばく言わないようトレーニングすれば、体育の授業が今より短く感じられるということだろうか。よし、今度中国拳法の修行アプリでも落として、チャクラ的なパワーの特訓でもしてみるか。

見るともなく窓を見ながら、そんな益体もない思考を巡らせるハルユキの耳を、担任教師の声が素通りしていく。

「……今のクラスになって二ヶ月が経つわけだけどな。ちやうど今ごろが、気のゆるみが出てくる時期なんだぞ。ほれ、このグラフが、四月からの遅刻と忘れ物の……」

いつもなら、終わりのホームルームは、放課後の〈対戦〉計画を練るための重要な時間だ。どこの戦域に行くか、どんな戦術を試すか、誰と戦うか、あるいは誰のバトルをギヤラリーするか。シミユレーション好きのハルユキにとっては、本書の対戦には及ばないまでも充分楽しいひとときと言える。気付けばあつという間にホームルームが終わっているのが常なのだが、

今日はやたらと時間の進みがのろい。

その理由は明らかだ。

ハルユキは今、対戦の計画を立てるところではない状況に追い込まれているのだ。ある意味では、二ヶ月前に《飛行アビリティ》を強奪された時よりもプレッシャーは大きいとすら言える。

つまり――バーストマシンカーでいられるかどうかの瀬戸際、という。

昨日の日曜日、《七王会議》が終わったあと、ハルユキは楓子のタルマで自宅近くまで送ってもらった。

黒書姫と楓子の励ましにはどうにか笑顔で帰ったものの、曜七の歩道をとぼとぼ自宅まで帰るあいだは、やはり下を向いて備装のタイルを数えてしまった。

歸いたままエレベータに乗り、二十三階まで上る。静まりかえった廊下を歩き、自宅のドアの手前で視界に表示された解錠ボタンに触れようと――

したそのす前、ハルユキはドアの脇にうずくまる小さな人影に気付き、びたりと立ち止まった。

深手なロゴ入りのTシャツと、タイトなカフツジーンズ。素足には色編めたスニーカー。そんなラブな格好でも、男の子でないことはすぐ判った。頭の両側で結わえられた黒えるような

赤毛が、薄暗い闇明の下でも艶やかに輝いていたからだ。

「……………に、ニコ？」

ハルユキが呆然としながら名前を呼ぶと、小柄な少女はゆっくりと顔を上げ、ニッと不敵な、それでいてどこか力のない笑みを浮かべた。

「…………おせまよ。同時に千代田エリアを出たはずなのに、十分も持ったじやねーか」

「こ、ごめん」

思わず謝ると、尖った肩を軽くすくめる。

「ま、あたしやバドのバイクで送ってもらったんだから、早くても当然だけとさ」

「そ……それは悪いっけるわけないよ。て、ていうか…………」

激しく瞬きしながら、ハルユキは訊いた。

「なんで…………ここに？」

するとニコは一瞬視線を外し、小さく鼻を鳴らしてから言った。

「話すに長くなるけど、廊下で最後まで聞くか？」

「あ、ああ、ごめん」

ハルユキは慌てて表示されたままの解錠ボタンに触れた。例によって無人の自宅のドアを開け、どうぞと声を掛けると、ニコはふうっと細長く息を吐き、両膝に手をつけて立ち上がった。

突然の訪問者をリビングに通し、キアチンでオレンジジュースのグラスを二つ用意して戻ると、ハルユキは改めて首を捻った。

ソファに座り、窓の外の曇天を見ている年下の少女は、やはり何處見てもニコこと上月由仁子——つまりレギオン（フロミネンス）を支配する赤の王、（スカール・レット・レイン）当人だ。しかし、なぜ、ニコとは匿名メールアドレスだけをなくコールナンバーも交換しているのか、連絡を取る手段はいくらでもある。それに何より、用がある相手の帰宅を玄関脇で膝を抱えて待つなど、ニコのイメージとは正反対の行動だ。ガラステーブルにジュースを置きながら、ハルユキはもういちど小さな横顔を盗み見た。

薄くそばかすの浮く頬には、普通の輝くような生氣は見当たらない。むしろどこか心細さうですらある。とても、会議の席上で苛烈な言葉を放った赤の王と同一人物とは思えない。ハルユキの脳裏に、鋭い声か聴える。

——心算の脅威を云々するのに不適合な奴が、一人ここに拘れている。

紅蓮の表にも似たその制服の、強烈な熱量を思い出した瞬間、まるでハルユキの心を読んだかのように目の前のニコが呟いた。

「……悪かったな、あんな言い方しちまって」

「えっ……いいや、そんな」

一度はソファに沈めた腰を浮かせ、慌ててぶんぶん首を振る。

「そ、そりや殿初は驚いたけど、あとで先輩やレイカーさんが教えてくれたから……。ニコが
あそこで僕の……いや、僕に寄生する（冥極の鎖）の話を持ち出したのは、その問題で僕の
王たち、とくに黄の王に主導権を取られないためだ、って」

早口にそう言うのと、ニコは二、三度瞬きしてから、光の加減で赤茶にも緑にも見える大きな
瞳に苦笑を浮かべた。

「ちっ、お見通しかよ。つたく、可愛げのねえ奴らだな……」

毒づきながら背中をどすんとソファに埋もれさせ、驚くほど細い脚を組むと、素足のつま先
でスリッパをぶらぶらさせる。

その様子に少しばかりほっとしながら、ハルユキは小さく首を傾けて訊ねた。

「あれ、ニコはレイカーさんに会ったことあったっけ？」

「いや、直接ツラを突き合わせたのはさっきが最初だけだな。バドから話だけは色々聞いてた
からな」

「は、話……って、どんな……？」

するとニコはにやりと意味深そうな笑みを浮かべ、逆に問い返してきた。

「あんだ、あいつの（ICBM）って二つ名の由来知ってっか？」

「え……単純に、あの人のブースターをミサイルにたとえたんじや……？」

「そうだがそれだけじゃねえよ。正確には、昔のネガ・ネビュラスが、大規模領土戦でたまに

使った戦法に由来してんだ。わがと敵チームの前後を押し上げさせて、戦力を分散させといてから、レイカーが単独で、支援型を一人背負ってブーストジャンプで敵の後方拠点に飛び込むふつう後方には装甲が紙の超遠距離型しかいねえからな、そりやもう戦略ミサイル並みの大被害が出たらしいぜ」

「……………な、ナルホド」

味方の話なのに思わず冷や汗をかきながらハルユキは頷いた。ニコは表情を和らげ、まるで自分の思いつきであるかのように言葉を続ける。

「……………あんたも知ってのとおり、バドは移動力の鬼だからな。そのミサイル戦法を喰らった時は真っ先に後方に戻って、レイカーと何度もばち戦り合ったんだと。ったくよう、停戦中つっても敵レジオンの主力の話なのに、レイカーが一線に戻ったのをあんなに喜びやがってよ……………。知ってつかクロウ、バドがかなりの古参ランカーなのにまだレベル6なのは……………」

そこでニコが口をつぐんでしまったので、ハルユキはつい身を乗り出した。その疑問は、かつて何度か感じたことだからだ。

「れ、レベル6なのは……………」

「——やっぱナイシヨだ。後で本人から聞きな」

にやりと笑い、頂きますと言ってテーブルからグラスを持ち上げる。

喉が潤いていたらしく、こくこくと勢いよくジュースを飲む少女の様子には、もう奇妙な無

氣力感は見つけられなかった。錯覚だったかな、と思いつつハルユキは言葉を返した。

「訊いても、教えてくれない気がすつごくするなあ……。まあ、その、それはともかく……じやあ、ニコは、会議でのことをわざわざ謝りに来てくれたの？」

「んだよそのメイワタそうな言い方」

グラスの縁越しにじろりと睨まれ、慌てて首を振る。

「い、いや迷惑なんてそんなぜんぜんーちよつとキヤラの意外だったっていうか、あ、や、そういう意味じゃなくてその、むしろ僕のほうこそ謝らなきゃいけないーってずっと思つて……」

一度動きだした口は回転を止めず、もつとちやんとした形で伝えようと思つていたことをささもなく音に変えていく。

「だ……だって、俺等であんな苦勞して破壊したのはずの（類）を使のうっかりミスで生き残らせちゃったわけだし、しかもその、前の持ち主の（チエリー・ルーク）はニコが（悪逆）したのに、僕はまだこうしてバーストリンカーにいるわけ……」

要領を得ないにもほどがあるハルユキの言葉を、ニコは思いがけず真顔で聞いた。

しかし、やがてそつと首を振り、言葉を返る。グラスを置き、再び脚を組んでソファに深く腰掛けると、年若い王は静かに呟いた。

「いや……、あたしは別に、その件であんたを恨んじやいねえよ。あたしがチエリーを断罪し

たのは、あいつが《鏡》の持ち主だったからじゃねえ。あいつが鏡の支配力に吞まれ、沢山のバーストリンカーを襲った、いや喰らっちゃったからだ。仮にデエリーが、鏡を自分の力でねじ伏せて制御できていれば、あたしは遠にあいつを守ったよ。他の王連中から何を言われても……な……」

ニコの声は、そこで不自然に減速した。ハルユキは瞬きし、俯けられた白い顔を見た。いまは深緑色に見える大きな瞳には、外の幽下で見たような暗い瞳が再び浮かんでいた。今度こそ、ハルユキはその表情が何であるのかを悟った。

怖れた。そして、怖れている自分への怒り。更に、ほんの少しだけの諦め。かつてハルユキ自身が、自分の力では何もできないと涙を抱えた時に浮かべていたはずの表情。

「に……、ニコ……」

押し殺した声で名を呼ぶと、少女は一瞬視線を持ち上げ、すぐに弱々しい笑みとともにもう一度俯いた。

「……あたしにはデエリーを守るという選択肢も、それを実行する力もあった。この半年間、ずっとそう信じていた、でもな……」

Tシャツの袖から出た両腕を、突然ぎゅっと抱え込む。六月の蒸し暑さの中で、まるで強烈な寒気に襲われたかのように。

「……………クロウ。きっきの会議で、お前は感じなかったか？」

「な、何を……………」

恐る恐るハルユキが問い返すと、ニコ——二代目赤の王、（不助要塞）スカーレット・レインは、ひび割れた声で叫んだ。

「あの場にいた（王）のなかに……本物の化け物が潜ってたのを。あの情報注……有り得ねえよ……。——あたしはな、本当は、あんただけは守るつもりでいたんだ。あんたには……チエリーを救ってもらった惜りがあるから……。今日の会議じゃ、どうにか折衷案には持ち込めた。でも……もし、奴らに本気で処刑を迫られていたら……。あたしは……………」

そこで口をつぐみ、ソファの上で両膝を引き寄せるニコに、ハルユキはしばらく何の言葉も返せなかった。

すぐには信じられない、というより理解できなかったのだ。ニコが他のバーストリンカーを化け物と呼び、畏怖の表情すら浮かべていることが。

ハルユキにとっては、赤の王スカーレット・レインは絶対的に格上の存在だ。同条件で対戦したら、百戦して百敗するという確信がある。彼女が全強化外装を展開した時の、超降級戦の如き遠距離火力は、間違いない加速世界最大の攻撃力のひとつだろう。何せ、主砲の一撃で新宿都庁ビルを十分吹っ飛ばしたのだ。

いや、たとえ準銃一丁だけを装備した小柄なアバター単体でも、ニコは底知れない強さを秘めている。事実七王会議の席上で、ハルユキは赤の王から、他の王たちとまったく遜色ない

巨大なブレンジャーを感じたはすだ、

小刻みに何度もかぶりを振り、ハルユキはようやく抑えた声で反論した。

「そ、そんな……。——そりや、僕にとつてはあの場の誰（だれ）もかれも雲の上だったけど、でもニコにそこまで言わせるほどの相手がいたとは思えないよ。だ、だって、ニコはあの人たちと同じレベル9（ナイン）じゃないか。（同レベル同ポテンシャル）は、加速世界の大原則だろ……。」

すると、赤毛の少女は小さな豚小僧（ぶたこぞう）の上からちらりとハルユキを見て、苦い笑みとともにゆつくり首を左右に動かした。

「……どんな原則にも例外はあるってことさ。いいか、レベル9（ナイン）ってのは事実上、ブレイン・バースト（ブレイン・バースト）の上限（上限）なんだよ。そこからはどんなにポイント（ポイント）を稼（かせ）いても次のレベルにはなれねえんだからな。レベル10になる道は、他のレベル9（ナイン）リンカー（リンカー）を五人狩る……。イコール五人をポイント全損させることだけだ。逆に言う……。――」

もう一度顔を伏せ、ニコは秘（ひそ）やかに呟（つぶや）いた。

「……レベル9（ナイン）になってから、加速世界でどれだけの時間を過ごし経験を重ねたかは、他人には判（わか）らねえってことだ。あたしは、その点では他の王連中（オウレンチュウ）にや負けねえと思つてた。現実世界で無くしたものを、加速世界では二度と奪（と）われねえだけの力を身につけたと思つてた。でも……甘（あま）かったよ。奴（やつ）らは……。――（ヘオリジネーター）は、あたしがしがみついているような傷なんぞとうに超越（こ）しちまつてるんだ。あれを……。化け物（ばけもの）以外に何て言えつつうんだよ……。――」

「……………お、オリジ……………」

ハルユキは呆然と、独白に紛れた聞き慣れない言葉を繰り返すことしかできなかった。しかしニコはそれについては何も答えず、ついには抱えた膝に顔を付けてしまった。

静まりかえったリビンダに、空調のかすかな唼りだけが響く。窓の外の曇り空は徐々に鉛色を濃くし、地上の瑞七を流れるEVの車列にもちらほらヘッドライトの灯りが交じり始める。全寮制の小学校に通うニコは、そろそろ門限が危なくなる時間のはずだが、丸めた体を動かそうとする様子はなかった。頭の間脳で固く結わえた髪すら、いつもの勢いを失って力なく垂れているようだ。

——僕は今、何かを言うべきなんだ。ハルユキはそう感じ、懸命に言葉を探した。

考えてみれば、あのニコが、会議中の発言を謝るために杉並まで生身を運んできたとは思いがたい。もしかしたら今、あの前髪の下で、赤のレギオンの仲間には……最隣近のバドさんにすら見せられない顔をしているのかもしれない。

「……………」

適切な言葉などまるで思いつけなかったが、それでも何かを言うべく、ハルユキは大きく息を吸った。

しかしそれよりも早く、ニコがひよいと顔を上げた。そこには、思いがけず輝くような満面の笑みがあった。唇が動き、それまでとトーンの激変した声が高く流れた。

「いきなりヘンなこと言ってゴメンね、おにーちゃんっ」

「……………う、い、いや、その」

これには腰を白黒するしかない。ニコのこの怪しげな（天使モード）は、ハルユキをからかったり壁に巻くためのワザだと解（わ）かっているけど、生まれついていたの一人っ子としては笑顔でお兄ちゃんと呼ばれた時点で不可避的にアタフタしてしまうのだ。

「今のぜんぶ忘れて！ あっ、あたしそろそろ帰らなきゃー、ジュースこちそうさまー」

あらゆる話尾に星屑のエフエクトが見えるような可憐（かわ）なボイスを連射し、ニコはひょいっとゾファから飛び降りた。そのまま、とてとてとリビンダを小走りに横断していく。

そこでようやくハルユキも動転を押しのけて立ち上がり、細い背中に声を掛けた。

「ま、待ってよニコ。何か…………もつと他に、話があつたんじやないの…………」

すると、小柄な少女は、ドアの手前てびたりと脚を停めた。一瞬の躊躇（ためらい）いを擦（す）り去（ぬ）ってから、不意にくるりと身を翻す。もう一度につこりと笑いながら述べた言葉は、思いがけないものだ。

「あのね、ハルユキおにーちゃん。あたしたちのどつちかが…………もしかして両方がブレイン・パーストを無くしたら、きつと相手のこと全部、何もかも忘れちゃうよね」

「えっ……………」

——（関連記憶全消去）。ハルユキがほんの二ヶ月前に知ったばかりの、ブレイン・パース

ト喪失者に適用される最終ルールだ。黒書姫ですら、その時まで嗜レベルの情報しか持っていないかったその事実を、ニコはいつから知っていたのだらうか。

息を呑むハルユキの顔を上目遣いに覗き込み、ニコはいきなり右手を突き出すと、驚くほど細い小指だけを伸ばした。

「だから、約束しよ。ニューロランカーのアドレスブックに、見覚えのない名額を見つけたら、データ消す前に一通だけメールを出すって。そしたら、もしかしたら、もう一度……」

「……………りた。有田！ おーい、聞いてるのかー」

太い声で突然苗字を呼ばれ、ハルユキは一日前の記憶から引き戻された。

胸に込み上げてかけていた痛みを懸命に呑み下す。何度か息を吸い、とうにか思考のギアを入れ替える。

「はっ、はい！」

慌てて応答しつつ、半ば反動的に立ち上がると、脚にぶつかった強化プラスチクタ製の机と椅子がガタガタンと鳴った。それでようやくここが自宅のリビングではなく二年C組の教室であることを思い出す。

恐る恐る視線を動かすと、教卓では担任教師の背野が淡い顔を作り、周囲の生徒たちはハルユキのオーバーアクションにくすくす忍び笑いを漏らしていた。



その笑い声には、一年生の時のような嘲弄の響きは——○パーセントとは言えないまでも——聞き取れない。このクラスでのハルユキは、ヒエラルキーでは相変わらず底辺に属するものの、《無害な丸っこいヤツ》的な立ち位置をどうにか確立しつつあるのだ。もちろんそのボジションに不満はない。それどころか理想的と言っている。

だから、現在のようにイージーミスで無用な注目を集めてしまうというのは、全力で避けねばならない状況だ。これをきつかけにクラスの隠れヤンキー君が、あいつ軽くイジメてストレス解消してみんべ、などと思いついたら堪ったものではない。

ゆえにハルユキは、やらかしちやったお調子者に相応しい風れ笑いを浮かべつつ席にっこうとした。

しかし、なぜか周囲から、ある種の期待めいた気配が向けられているのを感じてびたりと動きを止める。生徒たちが一様に浮かべている表情は、ハルユキが何かを言い出すのを今か今かと待っているかのようだ。

——な、なんなんだこの空気。僕はここで何をするべきなんだ。まさかボケろというのか？一発当て笑いを取るなどという超高難易度ミッションが発動しちやったのか？

と脳内で高速思考し、ぶわっと冷や汗をかきかけたところで——。

「おし、右田、立ったってことは、立候補してくれると考えていいのかあー？」

という、思いがけない蒼野の声が響いた。

——文假通？ 何に？

ここまで担任の話を完全に聞き流していたため、前後のつながりがさっぱり解らない。想定外の展開に硬直しつつ、視線を教師の背後にフォーカスする。しかし假想黒板には何の文字も書かれていない。

——慌てるな、考えるんだ。ロングホームルームで事られる役回りと言えば……そうだ、学校からのお知らせ的なテキストを読み上げる係だ。九分九厘それに間違いない。

そこまでを瞬時に考えたハルユキは、視線を假想デスクトップに戻した。すると新規受信エリアに、いつの間にかドキュメントファイルが一通着信しているのに気付く。

肉声による朗読は、決して得意ではない。しかし国語や英語の授業ではまああることだし、自分の考えを口述することに比べれば遥かにマシだ。この状況では、「読めます」と言って座って空気を冷やすよりも、オッチコチコイついでに朗読役を受け入れるほうがより穏便な選択というものだろう。

以上の思考展開により行動決定を完了したハルユキは、頭を上げて菅野の視線を受け止め、はつきりした声で「は、はい、やります！」と答えた。

すると——突然タラス中から、「おおっ！」という感嘆の声が沸き起こり、万雷の拍手がそれに続いた。

「……………はい。」

な、何この反応。たかが朗読係に立候補しただけでなぜこの拍手。

再度硬直するハルユキの視線の先で、菅野がうむうむと頷き、言った。

「先生、有田はやる時はやるヤツだと信じてたぞ！ A組とB組はどうせくじ引きになるだろうからな、C組が立候補で決まってくれたことは実に嬉しい！」

何か、とてつもなく嫌な予感に襲われつつ、ハルユキは新着ファイルをクリックしてみた、軽やかな効果音とともに展開したドキュメントには――。

【飼育委員会新設のお知らせ――二学年各クラスより一名ずつ、計三名の委員を選出します】と、素っ気ないフォントが並んでいた。

「……し、しいくいんん!？」

というハルユキの呻き声は、尚も続く拍手にかき消された。

――シイタイイン。てつまり、動物を飼う係という意味？

解りきったことをロースビードで考えつつクラスを見回すと、呆れ顔で首を振るチユリと、ヤレヤレと苦笑するタタムの顔が眼に入った。

「……あのねえハル、ぼーっとしてたのはいつもの事としてもさ……」

放課後、部活動が始まる前の短い時間。

自分の机でぐったりし横けているハルユキの前にやってきた幼馴染みの倉嶋千百合は、じ

つとりした視線を向けつつ言った。

「状況が判らなかつたなら、せめて配布ファイルを開くくらいすればいいじゃん！　どーしてそう予測だけで突っ走るかなー！」

「まあまあ、チーちゃん、ハルの思い込み暴走特急っよりは今に始まったことじゃないよ」

とは、チユリの隣に立つ篠拓政の弁だ。それフォローになってないぞと思いつつも反論はできない。椅子の上でするずる体を滑らせ、力なく言う。

「いいんすよ、もう。やるッスよ、飼育委員でも何でも」

「……無理矢理押しつけられたとかなら、あたしも何か言えたけどさー。ああも見事に立候補されちゃ、どうしようもなかったわよ」

チユリははーっとため息をつき、不意に表情を改めた。猫っばい瞳に真剣な光を浮かべ、大きな髪留めが光る頬をぐっと寄せてくる。

「でも、実際のところ、委員会活動なんかしてる余裕あるの？　だって、ハルはあと一週間以内に……」

その続きは、同じように腰を折ったタタムが、低い声で囁いた。

「……アレの寄生を（浄化）しなきゃならないんだよ、何かなんでも」

――そらッ。

今週、つまり六月十七日月曜日から二十三日日曜日までが、ハルユキに――シルバー・クロ

ウに与えられた（執行猶予期間）なのだ。

昨日の七王會議では、最終的に二つの決議が採択された。

まず、謎の組織・加速研究会の攻撃については、〈情報収集の継続〉。これにはハルユキも内心ヌルすぎると憤慨したが、何せ組織の全容すら不明な現状では反撃のしようもなく、致し方なしというところだ。

そして、その逆さを相殺するかのようになり盛しい決定が、シルバー・クロウのクロム・ディザスター化については下された。

今日を含めた七日間で、災禍の種クロム・ディザスターの寄生を完全解除できねば、ハルユキの首には五人の王によって高額のお金が懸けられる。しかも資金となる大量のバーストポイントとは、シルバー・クロウに勝利した回数に応じて分配されるというシステムだ。

そんなことになれば、一步でも移植エリアを出た瞬間に高レベルを含むバーストシンカーが出ほどもつてきて、ハルユキのポイントはあるとあるという間に枯渇するだろう。何せ、〈種の破壊〉という大義名分があるのだ。大勢で一人を狙うことを躊躇う必要はない。

もちろん、同じく資金源である黒雪姫に倣って移植に引きこもっていればグローバルネットワーク接続中も対戦を拒否できるが、それをするとな度はポイントを獲得できなくなる。レベルアップの停止は、バーストシンカーとしてのゆるやかな死と同義だ。

つまるところ、〈王命による抹殺指令〉は、それに正当性さえあれば死刑宣告に等しいと言

える。黒雪姫が二年間も生き延びることができたのは、ニューロリンカーのグローバル接続を
 ひたすら遮断する鉄の意思力はもちろんだが、《既にレペルリに到達していたこと》も大きい。
 ハルニキには、後者はもちろん、前者も著らく欠けている。

「……一週間、か……」

呟き、ハルニキは机の上に置かれた自分の両手を見下ろした。

意識せずとも、艶やかに輝く白銀の装甲が二重写しになる。シルバー・クロウは、いつでも
 変身できて当たり前の、もう一人の自分だ。あの姿になれなくなる——バーストリンカーでは
 なくなる、と言われてもまるで現実味が無い。

いや、そう感じるのは、ここが現実世界だからだろうか？ 僕にとっての現実とは、もうあの
 世界にだけ存在するんだろうか……？ そうだとすれば、ブレイシ・バーストを失った時、僕
 はいったいどこに行けばいいんだろう……？

そんな事を考えた瞬間、ハルニキはようやく、小さな事象めいたものに襲われて背筋を震わ
 せた。耳の奥に、高く澄んだ少女の声が続く。

——約束しよ。ニューロリンカーのアドレスブックに、見覚えのない名前を見つけたら、デ
 ータ消す前に一通だけメールを出すって……。

演技のはずの天使モードであんなことを言ったニコがどこまで本気だったのか、ハルニキに
 は解らない。あのあとニコは無理矢理にハルニキの右手と小指を締め、そのままバタバタと走

るように増殖してしまつた。

忘れぬはずがない。たとえ加減世界の記憶は消されても、現実世界で絆を育んだ人たちのことは絶対に忘れない。そう確信するいっぽうで、鋭い不安も胸に兆す。もし自分がいつの間にか現実世界のリアリティを見失っていたら……『現実』というタグが振られた記憶が、気付かないうちに空っぽになつていたら……。

いきなり込み上げてきた恐怖に両手をぎゅつと握り、いつそう深く俯こうとしたが、それより早く視界を小さな手が横切り、ハルユキの左拳を包み込んだ。

「大丈夫だよ、ハル」

優しい声に顔を上げると、そこにはチユリのいつもの微笑みがあつた。

「そうさ。きつとすぐに、何もかも解決するよ」

並んで立つタタムもきつぱりとそう言い、竹刀ダコのある手を伸ばしてハルユキの右拳をぼんぼんと叩いた。二人の幼馴染みはちらりと視線を見交わし、何かを確認したかのうように頷くと、もういちどハルユキを見た。

「それにね、ハル。あたしたち、相談して決めたの。もし一週間経つちやつてハルに資金が整けられても、あたしとタタくんが、同じペースでレベルアップできるだけのポイントをハルに供給しよう、って。だからハルは、何も心配しなくていいの」

そう囁いたチユリの顔を、ハルユキはまじまじと凝視した。すぐに椅子から腰を浮かせ、

激しく首を振る。

声のボリニームは限界まで抑えつつも、半ば叫ぶような勢いでハルユキは言った。

「だ……だめだ！ そんなことしたら、お前たちまで資金源になりかねないぞ！ 奴らは、オレたち全員を的にかける口実がでるのを待ち構えてるんだ！」

「おいおいハル、ぼくは一応君より先輩なんだから、秘密裏にポイント移動できる方法なんか、幾らでも知ってるさ」

眼鏡のブリタジに触れながらにやりと笑ったタタムは、すぐに視線を右下に走らせ、ハルユキの反論を封じるかのように体を起こした。

「おっと、そろそろ露店に行かないと、ハル、飼育委員の活動があんまり時間取られるような言ってくれ、代われる範囲で代わるから。ともかく今週は、マスターの立案した『浄化計画』に最優先で取り組んでくれよ」

「……………ああ、すまない、タタ」

色々な言葉を吞み込んで、ハルユキは頭を下げた。

笑顔の類、浄化計画。それは、七王会議でシルバー・クロウの処遇が決定したのも、黒雪姫が憤然としながらも組み上げた、タロム・ディザスター因子を消滅させるためのミツシヨンド、三つの段階から成っているらしいが、まだハルユキたちは全容を教えて貰っていない。顔を上げながら、半ば以上自分に向けて言う。

「詳しいことは解らないけど……ともかく今は全力を尽くすだけだよな……」

「うん、ぼくらは最大限協力するから。じゃあ、また後でね」

タタムはもう一度ハルユキの右肘のあたりを軽く叩いて身を翻し、剣道場へと小走りに去っていった。それを見送ってから、チユリももう一度口早に囁いた。

「あたしも部活行くけど、何かあったら遠慮しないで言うんだよ。あたしたちは……ええと……仲間、っていうか……同志、でもない……ええとお……」

——家族、そうだよな。

というハルユキの心の声が、まるで聞こえたかのようにチユリは口を止め、決して大きく笑った。そのまま右手を挙げ、ぱたぱたと出口に駆けていく。

一人残されたハルユキは、靴を肩に掛けながら、胸の奥で呟いた。

リアルとかバーチャルとか、そんなの本質的な問題じゃない。僕とタタ、僕とチユ、僕と先輩やレイカーさん、そしてニコ、バドさん、その他多くの人たちを結びつけるものはいっぱいで（ここ）——心の中にある。

僕はそれを守りたい。失いたくない。有田雪雪として——そしてシルバー・タロウとして。

ちらりと時計を見ると、ファイナルに指定された集合時間まであと五分しかなかった。一階の昇降口へと急ぐあいだも、ハルユキは決意を新たにしていた。

この一週間の猶予は、即時の断罪を主張する黄の王、紫の王に対して、黒雪姫やニコが懸命

に勝ち取ってくれた貴重な時間だ。絶対に無駄にはできない。うっかり立候補してしまった予定外の委員会活動だが、その中にすら何らかのヒントはあるはずだ。今はただ、万事に一生懸命取り組むだけだ。

「よし！」

と小声で睡び、外に出ると、いつの間にか雨は上がっていた。

私立梅郷中学校は、東京都杉並区（東京都杉並区）の東側、青梅街道（青梅街道）と五日市街道（五日市街道）にほど近い一角に存在する。一学年三クラスと規模は小さいが、敷地面積はそこそこ広い。三百メートルメートルラッタを備えたグラウンドの北側には三階建ての第一校舎棟が東西に伸び、その中央部から北に向けて運動棟が接続している。そしてその反対側には、再び東西方向に第二校舎棟が建つ。つまり、全体としてはカタカナのエの字型をしているわけだ。

各学年の教室と学生食堂は、新しい第一校舎に集中している。対してやや古い第二校舎は、一階部分に職員室と校長室、生徒指導室が並び、二階三階は倉庫と、今はほとんど使われない各種専門教室に占められる。ゆえに、立ち入る生徒はいないに等しい。一年生の頃、ハルユキが第二校舎三階の男子トイレを《避難所》（避難所）に使っていたのはそれが理由だ。

しかし、そこよりもいっそう生徒が近寄らない、というよりも意識すらしていない場所がある。第二校舎の更に北側、コンタリートの壁と高い塀（ひし）に挟まれた細長い空間。

ハルユキが、新設された飼育委員会のメンバーとして招集されたのは、その遠っぽい隙間を道り抜けた北西の角という、梅郷中の隔っこオブ隔っこだった。

「……こんな場所が、学校にあつたんだなあ……」

その建物を眺めながら、ハルユキは呟いた。

建築物と言うにはあまりに小さい。床はせいぜい縦横四メートル、高さは二メートル半。左右と奥の壁はいまどき天然木材の板張りて、屋根は恐らくスレート葺きだろう。

そして前面は全て、三センチほどの目で組まれた金網となつている。つまりこれは檻だ。もちろん、悪いことをした生徒を閉じ込めるためのものではあるまい。動物を飼うための飼育小屋なのだ。

しかし、とれだけ金網に顔を近づけて眼を覗こうと、小屋の中には何もいないようだった。代わりに、網の隙間から入り込んだ落ち葉が分厚く堆積している。あの下にはきっと微生物が山ほど生活しているに違いないが、まさかそれを飼っているわけでもあるまい。

「飼育委員がいて、飼育小屋があつても、肝心の動物がいないよな……」

首を傾げつつ、もう一度独りこちる。後から運び込まれるのだとしても、なぜこのタイミンがなのかが解らない。

その時、背後からざくざくと複数の足音が聞こえてきた。びくつと振り向くと、前庭方向から近づいてくる二人の生徒が眼に入つた。男子と女子一人ずつ。ネクタイとリボンの色はハルユキと同じ青だが、顔にあまり見覚えはないので違うクラスだろう。ということば、彼らがハルユキと同じく新たに飼育委員へと任せられた同僚たちに違いない。

とりあえず校移しよう」とハルユキは一歩踏み出しかけたが、それより早く、男子生徒のほうが大ボリニームで叫んだ。

「うええ、シだよこれ汚ったねー！ 棄っぱ相續もつてんじやんよ！」

続けて女子が、情態たっぷりに意見表明する。

「だつるうううー、こんなの掃除しろとか意味わかんない。マジだるうー」

口ぶりからして、二人は立候補ではなくクジ引きで選出されたようだった。とは言えハルユキも似たようなものではある。何せ勢いと勘違いで立てしまったのだから。

成り行きはどうあれ、事ここに至った以上はこの二人と友好的に委員会活動を行進するしかない。大きく息を吸い、そのわりには実に弱々しい声で、ハルユキは呼びかけた。

「あの……、とりあえず、役職だけでも決めちゃおう」

委員任命後に改めて配属されたドキュメントによると、本日の活動内容は二つ。一つは委員長の出で、もう一つがこの飼育小屋の清掃だ。その両方を完了し、委員全員が認識した日誌ファイルを学内システムサーバーに提出せねば、今日は帰宅できない。

掃除がかなり大変そうなのは小屋の惨状を見れば明らかなので、せめて役職決定だけでもサタッと終わらせたいところだ。ハルユキは、二人のどちらかが「やる」と言い出さないと決い期待をしつつ数秒待った。委員会活動は成績データの加重要素となり、高校受験に影響するので、生徒によっては積極的に○○委員長の風采を欲することがないわけではない。

——のだが、立候補しなかった時点で、この場の誰かがそんなポイントを狙っているのは明白だった。五秒経っても二人ともに口を開かないのを確認してから、ハルユキは弱々しく笑いながら言った。

「……………じやあ、僕がやらせてもらっていいかな、委員長」

ここで「やってあげてもいい」という言い方すらできない自分に内心うんざりしつつ反応を待つと、帰宅部だったあまりに相当色黒の男子も、髪に内巻きのパーマを当てた女子はあからさまにはっとした表情を作り、同時に頷いた。

「いいぜ」「よろしくうー」

三人同時に仮想デスクトップに指を走らせ、新たに出現した委員会活動タブを開くと、役職欄にハルユキの名前をセレクトして承認ボタンをタップ。これで学内ローカルネット上でも、ハルユキが飼育委員長として記録されたわけだ。

ついでに残り二人の名前を確認すると、男子が浪島、女子が井関となっていた。三人だけの委員なので、副委員長以下の役職は要求されていない。

——こんなことなら、学期の始めに図書委員あたりに志願しておくんだった。

としみじみ思いつつ、右手の一振りてウインドウをワイプ。ともあれこれで一仕事終了だ。しかし問題はもう一つの仕事、飼育小屋の掃除である。

改めて小屋を見ると、板壁の汚れもさることながら、やはり床に堆積した落ち葉が難物と思

えた。厚さ五センチ以上ありそうなそれは、道具なしではどうにもなるまい。ドキュメントによれば、中庭の掃除用具置き場内の備品ならばあらかじめ使用許可が出ているようだ。

「じゃあ、まずは竹箒とちり取りを………持ってくるから、待っていてね」

ばそはそと言ひ、第二校舎を鉄んで反対側にある中庭へと小走りて向かう。一年生の頃、パンを買いにバシラされた時のように、背後から「そこからダッシュダッシュ！」と言われただけマシだ、などと考えてしまふハルユキだった。

実際に取りかかってみると、飼育小屋の清掃任務は考えていたより遥かに大変だった。

積もった落ち葉が乾いていれば、掃てばつきと掃き出せたかもしれないが、折しも梅雨である。しかもとうやら長年にわたって少しづつ積もったものらしく、下のはうはほとんど腐葉土と化して床にがっちり貼り付いている。古めかしい竹箒——さすがに素材は天然ものではなく竹に似せた硬質のプラスチック繊維だが——では表面を刮るばかりで、固着層には歯が立たない。

それでも二十分ほど格闘したところで、ついに女子の井関が音を上げた。

「あ——まあ——、手と腰マジ痛った——い！」

「うへへ、ババくせよー」

男子の談笑が混ぜ返すと、じろりと威圧的に睨み付ける。ハルユキだったら石化しているで

あろう一瞥だ、

「マジむかつくんだけれど、つーかあんた、さっきから同じとこいい加減に掃いてるだけじゃん？」

井関に牛ギレ口調で問い詰められ、今度は浜島が舌打ちした。

「ちつ、るっせーな。おめーこそ、俺らが掃いた葉っぱチキトーに外に出してるだけじゃねーかよ。ラクしてんじやねーよ」

「は？ 意味わかんないんだけど？ その言い方ありえない？」

刻一刻と陰謀を増していく同僚委員たちのやり取りに、ハルユキは高遠で竹響を動かしながらだらだらと幽汗を流した。本格的なケンカが始まる前にインタラプトをかけ、丸く収めるべきだと解とらつてはいても、口を開くところか顔すらも上げられない。

——いや、過剰はどうあれ、僕は立候補して飼育委員になり、もいっちょ立候補して委員長にもなったのだ。ここはひとつ、二人にガツンと言ってやらねばならない。それが僕の責任というものではないか。

「……あ、あの……」

全身に決意をみなぎらせ、ハルユキは声を発した。一瞬即発だった井関と浜島が、揃そろってじろりと視線を向けてくる。

「……………あ、あの……」

大きく空気を吸い込み、下腹に力を入れて、ハルユキはガツンと言った。

「……………どうせこれ、下校時間までに終わらないからさ……。その、君たちは日誌に認識だけしてくれば、もう帰っていいよ……。僕が形だけ残っておくからさ……」

一分後。

同僚たちがビユアな笑顔と感謝を残して高速離脱していき、一人残された狭い表庭で、ハルユキははあーっと深いため息をついていた。

正直に告白すれば――。

他のメンバー二人が動物好きの心優しい女子で、思いがけずハートウオーミングな委員会活動が展開される、というような期待を一ミリグラムも抱いていなかったとは言えない。だが考えてみれば、そんな生徒が存在するならば、もっと早く剣育委員会が設立されていて然るべきであり、この状況は論理的な帰結なのだ。いや、最悪の場合は、ハルユキ以外の委員二人が、一年の頃さんざん虐めてくれたようなアウトロー生徒になっていたことも有り得る。そう考えれば、むしろ幸運に感謝すべきだ。

等々と自分を慰めながら、ハルユキは改めて剣育小屋を眺めた。

床に積もった落ち葉は、まだ半分も取り除かれていない。視界右下の時計は午後四時十五分を指している。強制下校時刻は六時なので時間はまだあると言えはあるが、ほとんど土と化した黒い層に、これ以上竹箒一本で洗っても無駄というものだろう。本気でこの小屋を綺麗に

するつもりがあるのなら、だが。」

「……………ま、一日でやんなくてもいいよな。どうせ動物もいないんだし…………」

呟き、ハルユキは右手の筆を地面に投げ出した。あとは適当なゲームアプリで下校時刻まで時間を潰して、頑張ったけど終わらなかったという体裁だけつけて明日また続きをすればいい。そう考えつつ、外廊の柱元の段差に座り込もうとした、その寸前。

——あの人も。

という思考がちかつと閃き、ハルユキは動きを止めた。

あの人、黒雪姫も、きつとまだ帰宅していないはずだ。遠く離れた生徒会室で、月末に迫った学園祭に関連するタスクを一心不乱に処理しているに違いない。いや、チユリも、タタムもそうだ。それぞれグラウンドと剣道場で、懸命に体を動かしているのだろう。

「……………みんな、毎日、授業終わってからこんなことしてたのか……………」

探れた喉声を漏らしながら、汚れた両手をじつと見る。ここで頑張ったところで、誰に褒められるわけでも、何が貰えるわけでもない。なら一体、何のために課外活動などするのか。

黒雪姫は以前、生徒会活動をしているのはバーストリンカーとして学内ローカルネットを掌握するため、と言っていたがそれだけではない気がする。そう、きつと、黒雪姫もタタムもチユリも、自分に対して何かを証明し続けようとしているのだ。なのにハルユキは、万事真剣に取り組むというほんの数十分前の決意すら、危うく放り捨ててしまうとこらだった。

「……………まったく、使つて奴は……」

深く息を吐き、ハルユキは身を屈めると、地面から竹箒を拾い上げた。

五分ほどの作業で、小屋から掃き出せる限りの落ち葉を取り除いたハルユキは、手を止めてしばし考えた。

効率のために工夫することは、サボリには当たらない。下校時刻までに腐葉土層を処理するためには、より適した道具と手段が必要だ。大量の水で洗い流すのが一番と思えるが、手近な水道は、動物の飲み水用とおぼしきちっぽけな蛇口が小屋の脇に用意されているだけだ。

試しに捻つてみたが、やはりちよろちよろと頼りない水流が零れる程度で、バケツに一杯溜めるだけでも相当な時間がかかりそうだった。懸命に頭を絞っているとうまく、委員会の長には、一般生徒よりも上位の学内ネットアクセス権が認められていることを思い出す。

仮想デスクトップから校内マップを呼び出したハルユキは、まずインフラ情報から水道ラインだけをオーバーレイ表示した。飼育小屋には極細の水色線が一本伸びているだけだが、すぐ近くの地面に、より太いパイプと元栓が埋められているらしい。その位置をタッチしながら周囲を見回すと、三メートルほど離れた校舎脇に下向きの矢印がA表示される。

「水道はある……で……」

呟いてマップをいったんリセットし、次に学校の備品リストから長さ五メートル以上のホースを選択して位置情報を重ね合わせる。すると、目の前の第二校舎一階の男子トイレ用具ロッ

カーに一本置かれているようだ。光点をタリタリし、ボツボツした窓から使用許可を申請する。ふつうは生徒がアクセス権限外の備品に触れることすら許されないのだが、一秒後、システムから認可のレスポンスがあり、ハルユキは思わず声を出した。

「おお……さすがは委員長、あとは……」

再び備品リストをスクロール。大型のシヤベルをビタアッすると、これは中庭の用具入れにあるようなので使用に問題はない。最後にダッキブラシを検索。前庭の用具入れにタイル清掃用のものを発見し、許可を取る。

「これでよし、と。さあーて、もうひとガンバリタシユ！」

どこかの誰かが聞いているなら、俺様の真似（まね）すんじやナッシン！ と怒りそうなかげ声を出し、ハルユキはまず前庭目指して駆け出した。

元校のアタッチメントに繋いだホースから放たれる高圧水流で、剣育小屋の床に堆積した落ち葉を攻撃する作業は意外に楽しく、ハルユキはつい「ホースの流離技（りゅうりぎ）ってこんな感じかなー」と考えてしまった。

しかし、さすがに厳格な学内システムからは無制限の水道使用許可は与えられず、許された使用水量のバーが視界端（みぞはし）でみるみる減少していく。真剣に標準を合わせ、固着部分を次々に剝（は）離させる。最後にブラシで洗い流すことを考えると水量を使い切らなければいけないので、二

割はと残してハルユキは水栓を止めた。

飼育小屋の床面は、大量の水でとろとろに溶けかけた古い落ち葉に覆われ、作業開始前より状況が悪化してしまつたようにも思える。一瞬後悔しかけるが、意を決してホースをシヤベルに持ち替へ、小屋の中に踏み込む。

対策用装備として防水素材のハイカトスニーカーを履いていたのが幸いし、泥水は靴の中にまでは浸入してこなかった。もちろん帰宅してからしつかり洗わなければならないだろうが、後のことは後で考えればいい。

「よっ……せー！」

声を出しながら、シヤベルを泥の塊に突っ込むと、ほとんど抵抗なく床まで刃先が通つた。そのままずりずりと床を擦りながら、黒いどろどろをこつそりすくい取る。重みにふらつきつつも、それを出入り口から外に放り捨てる。

ほんの、二十センチ掛ける四十センチ足らずの面積ではあるが、ついに姿を現した本来の床面をハルユキはじつと眺めた。

何だか不思議な感覚が体を包んでいた。やつかいな増悪を片付けた時とも、何度も殺されたボスキヤヲを倒した時とも違う、ずっしりとした手応えを感じた。思わず深く涙ぐみそうになつてから、慌ててぶんぶん首を振る。まだ達成感を味わうのは幾らなんでも早すぎる。

シヤベルを握り直し、泥をもうひとすくい捨てる。もう一度、一步進んで、もう一度、

それだけで肩と腰が痛くなってきたが、何かに突き動かされるようにハルユキは作業を続けた。一山拾てるたびに体力を消耗していく実態はあるが、同時にシヤベルの使い方や腰の入れ方も学習され、効率は徐々に上がっていく。

地道な作業をひたすらに繰り返しているうち、ふと記憶の片隅がちくちく刺激される気がした。前にも、いつか、どこかでこんな事をしなかっただろうか？　だが、子供の頃から本物の土に触れたことすらほとんどないし、家の増除は母親が週一で契約しているハウスキーピングサービス任せだ。

昔中の痛みも忘れて懸命に記憶を掘り返していると、五分ほどかかってようやく気付いた。現実世界の思い出ではない。加速世界――それも上位の《無制限中点ファイルド》だ。

二ヶ月前、初めて出会ったスカイ・レイカーに旧東京タワーの天辺から突き落とされ、高さ三百メートルの絶壁を素手で登るためにハルユキはひたすら地道な修行を行った。両手に剣のイメージを宿し、鋼のように硬い壁を何千、何万回と突いたのだ。あれこそが、《心意システム》――ブレイン・バーストに秘された変換の力のとば口に立った瞬間だった……。

「……………」
不意に――。

自分の思考が、何か、とても大切なことにはんの一瞬近づいたように思えて、ハルユキは眉を寄せた。

がつしがつしとシヤベルを動かしつつも、その思考のしつぱを溜（ため）もうとする。

心意シスナム、強固なイマジネーションの力で加速世界の理（ことわり）に働きかけ、事象を上書きするロジック。

その威力は凄まじい（すさまじい）のひと言だ。達人の心意はゲームルールの制約を超え、大地を割り穴を鑿（う）く。当然のことながら、現実世界には存在するはずのない超常のパワーだ。

——でも、

でも、その本當に根つこのところは。原因が結果を導く、その単純な仕組みは、もしかしたら……。

がもつ、と突然シヤベルの先が壁にぶつかり、ハルユキの手を痺（しび）れさせた。

「いつ……」

慌（あわ）てて拳（こぶし）をふうふう吹き、痛みが去ったところで顔を上げる。

いつの間にか、あれほど溜（ため）まっていた古い落ち葉の塊（かたまり）は、ほぼ完全に小屋の中から消滅していた。代わりに、金網（きんもう）の向こうにはちよつとした小山が出現（あらわ）されていて、ハルユキにもそれを自分（自分）がシヤベル一本で作ったのだとはなかなか信じられない気分だった。

「……………やれば、できるもんだなあ！」

直前の思考はどこかに吹き飛び、ハルユキはそう声に出しながら大きく伸びをした。健張（けんちやう）った背中（せなか）がみしみし軋（軋）んだが、その痛みすらどこか爽快（きうたい）に思えた。このままだすんと寝転（ねころも）がった

らきぞ気持ちいいだろうが、そうするためには作業にもう一仕上げが必要だ。床にはまだすくい切れなかった落ち葉と泥が残っている。

小屋から出たハルユキは、右手のウエポンをシヤベルからデッキブラシに持ち替えた。更に左手にはホースを構える。あとは、少しずつ水を掛けながらブラシで落ればかなり綺麗になるはずだ。時期は午後五時を回っているが、夏草が近いのでまだ充分に明るい。強制下校時刻の六時までには作業を終えることは充分可能だろう。

意気揚々と小屋に戻りかけてから——ハルユキははたと気付いた。

ホースからの水流をオンオフするには、根元のバルブを操作せねばならない。しかしそのたぎに離れた水道栓まで戻っているのでは非効率極まりない。と言つて、水を出しっぱなしにすれば、システムから許可された水量をすぐに使い尽くしてしまう。

「……うーん……」

小屋と元栓を交互に見ながら懸命に考える。しかし、今度はかりはスマートな解決法は浮かんでこない。どうせ水流量の監視までするならばバルブの開け閉めも遠隔でできるようにしとけよ！——と思つてももう後の祭りだ。

こうなつたら、時間がかかっても小屋と元栓を行ったり来たりするしかないか……と覚悟を決め、ハルユキはとぼとぼと戸口に向かおうとした。

腐葉土の山を回り込み、数歩進んだ——その時、

視界中央に、黄色い電波マークのアイコンが点滅した。続いて下部に「AD HOC CO
NNECTION REQUEST」の表示。

アドホック・コネクションとは、複数のニューロランカと同士を、サーバーを介さずに無線相互接続する機能だ。しかし学校内で利用されることはほとんどない。有線直結ワイヤードirectよりも通信速度と秘匿性ひそかせいに劣るし、何より学内ロケカルネットにログインしていれば無用な機能だからだ。

いったい誰がこんな要求を、とハルユキはきよきよ左右を眺め、最後に振り向いて真後ろを見た。

しばし、理解不能だった。

一人の子供が、ハルユキを見ていた。そこまでは問題ない。女の子だ。それもまあ有り得ないことではない。

しかし、まったく初めて見る顔で、明らかにこの学校の生徒ではなく、それ以前にどう考えても中学生ですらなく、極めつけに服従の上下ともに純白の運動着——と来れば、ハルユキが自分の眼もしくは脳の機能不全を疑っても仕方ない状況だった。

ばちばち高速で瞬きしつづるぶると小刻みに頭を振ったが、それでも目の前の女の子は消えないので、ハルユキはやむなくブラシを握る右手を持ち上げ、伸ばした指でアドホック接続のアイコンに触れた。

途端に電波マークと文字列は消え、代わりに少し大きめのウインドウと点滅するカーソルが現れる。声ではなくテキストでやり取りするためのチャット窓だ。

明らかにニコより年下の、十歳になるやならずと思われる少女は、ハルユキのニューロリンカーとの接続が確立されるやスッと両手を持ち上げた。余りにも細く小さい十本の指が、緩く開かれて宙に止まる。ホロキーボードのホームポジションだ、とハルユキが気付いた。次の瞬間――

輝くような速度で全ての指が閃き、直後ハルユキの視界のチャット窓に、桜色に発光する文字列がだーっと流れた。

【U1V 初めまして、こんにちは。梅郷中学校の飼育委員会の方ですね？ 私は松乃木学園初等部四年の、四壁宮崎と申します。このたびは、当方からの急なお願いをお引き受けくださり有り難うございました。大変なご迷惑をおかけして申し訳ありません。遅くなりましたが、私もお掃除をお手伝いいたします】

「……………」

ハルユキは、巨大な衝撃を受けて立ち尽くした。テキストの内容にてはない。

——遅い!!

凄まじいタイピング技術だ、これだけの文字数を入力するのに、わずか四秒しかかかっていない。目の前で入力される所を見ていなければ、事前には作成した文章をコピー＆ペーストした

としか思わなかつたであらう。

ハルユキはひそかに、自分のタイピングスピードは梅軒中一、いや黒宮源にギリギリ届かずの二番だと自負していた。少なくとも、情報処理の授業でタイピングの模擬検定を受けた時には、クラスでぶっちぎりのトップだったのだ。——それで別に尊敬されたりということにはまるでないのがハルユキの人徳というものだ。

しかし、眼前の小さな女の子の運指は、明らかにハルユキの倍以上も速かつた。いったいどんな練習をすればこんなテクが身につくのかと、まじまじと相手を凝視してしまふ。

四葉宮と名乗った少女は、どこをどう見ても、リンカースキルの達人とは思えなかつた。

小学四年生としても小柄なほうだろう。半袖の運動シャツと、膝上丈のハーフパンツから伸びる手足は心配になるほど細い。顔立ちも純和風で、一重の眼と鼻、口は木彫りの達人が一息に鑿うを入れたかのように涼しげな造作。漆黒の前髪を眉の少し下ですばっと切り揃え、後ろは高い位置で結わえている。背中にはシタタな茶卓のラインドセルと、左手にはやや大きめのスポーツバッグ。

眺めているだけで梅軒の華しさを忘れるほどに清潔感のあるその姿に、しばしばんやりと見入ってしまったから、ハルユキはようやく相手の間いかけられるような眼差しに気付いた。そういえば、転移されたときりて何のレスポンスもしていない。

とりあえず、こんにちとはと口で言おうとしてから、ここは自分もチャットで返答するべきか



と考える。急いでホロキーボードを呼び出して返事を打ち込もうとしたが、まだブラシとホロキーボードを握ったままだったので、慌ててそれを地面に置く。改めて両腕を持ち上げかけたその途端、再度ウインドウに文字が流れた。

【UIV そちらからは肉声で話して頂いて大丈夫なのです】

「あ……、そ、そう……」

腕を激妙に掲げたまま、間の抜けた第一声を漏らしてしまう。

何だが、あまりにも解らないことだらけだ。なぜこの少女はチャットで話すのか。先の発言にあった「急なお願い」とは何なのか。そもそもなぜ他の学校の、しかも小学生がこんな場所に登場するのか。どうにか推測できるのは、チャット窓の発言の先頭に付される【UIV】という文字列が、名前のウタイを省略したUIというニックネームだろうということくらいだ。

行き場のない右手でぼりぼりと頭を掻きながら、ハルユキは混乱した思考をそのまま音声出力した。

「あー、えーつと……は、初めまして。僕は有田春雪……梅郷中二年で、いちおう飼育委員長です……と言っても、今日からだけど……」

すると即座に、

【UIV ええ、こちらの飼育委員会が今日新設されたことは知っています】

という文章が高速タイプされた。

「えっ、そ、そうなの？　なんて知ってるの？　それに……何てまたよその学校から、わざわざ手伝いに来てくれたの……」

【UI】それは、そもそも松乃木学園初等部からの協力依頼によって、こちらの委員会が満足したはずだからです】

「ええっ、そ、そうだったの？」

仰天するハルユキに対して、あくまで冷静な女子小学生は、ますます湧き渡るキーボードさばきで事の成り行きを解りやすく説明してくれた。

梅郷中学校は、東京都杉並区に存在する私立の、いちおう進学校だ。しかし経営しているのは学校法人ではなく、新宿に本社を構える教育系企業である。その会社は、梅郷中以外にも、小中高一貫の女子校を杉並区内に持っている。それが、四葉学園の通う松乃木学園である。

梅郷中も三十年近い歴史を持つが、松乃木はその比ではなく、今年で開校九十五年になるのだという。つまり、ひと言で表現すれば（お嬢様学校）だ。しかしながら全国的な少子化の波は避けられず、経営難により現オリーナー企業に買収されたのが十年前。以来様々な合理化が行われたものの抜本的な対策とはならず、ついに今夏、敷地の一部を売却してその利益で初等部・中等部の合同校舎を新築するという決定がなされたのだそうだ。

伝統校であるがゆえに当然保護者からは反対の声も上がったが、何せ経営母体は株式会社で

ある。決定は覆されず、初等部の現校舎は一学期の終了直後に取り壊されることとなった。

とは言え、生徒の大部分は建て替えを歓迎した。新しい校舎にはハイスベックのVRローカルネットを始めとする、同系列の機器中で暗われた最先端の電子化教育環境が導入されるからだ。しかし、何せ学校の絶対的な面積は縮小されるわけで、新校舎には移行されない設備も幾つか存在した。その一つが――松乃木学園初等部の片隅にひっそり建っていた古い飼育小屋だった、というわけだ。

『U・V』もちろん私は、先生や経営もとの会社にも抗議しました。飼育委員会には、生徒だけでなく飼育されている動物も所属しているのです。生徒は他の委員会に移ればいいかもしれませんが、動物たちはそうは行きませんから。しかし会社は、「飼育動物に関しては法令に基づいて適切に対応する」という返事を繰り返し返すだけでした。それはつまり、殺処分することです」

漢々と語られるテキストをそこまで読んだ途端、ハルユキは反射的に「そんな！」と叫んでいた。

いかに利益追求が株式会社企業家の使命とはいえ、飼育場所がなくなるから動物を殺すというのはあんまりだ。長い間世話をしてきた子供たちの受けるであろうシロフタの大きさはいかばかりだろうか。そんなことをするくらいなら――する、くらいなら……。

ハルユキの憤りに満ちた思考は、そこで分厚い壁にぶつかって空転した。

コストカットのために学校の敷地が縮小される時点で、飼育小屋の新設が難しいという経営側の事情も想像できてしまう。ならば生徒の家で引き取ってもらえばよかろうという気もするが、動物を飼うことは相当の情熱と適正な環境がなければ不可能だ。さりとて、郊外の野山に放すなど論外だし、それ以前に犯罪でもある。

唇を噛んで黙り込むハルユキを見て、諭という古風な名前の少女は少しだけ困ったような顔をした。再び指が動き、テキストが高速で流れる。

【U】V ご心配には及びません。まだ、実際に処分された動物はいませんから】

「えっ、そ……そうなの？ よかった……」

思わずはつと息を吐いてしまう。諭の指は、踊るように解説を続ける。

【U】V 飼育されていたチヤポ七羽は、狭山のはうの、鷹で鷹を放し飼いにしている農家に引き取って頂けました。ウサギ二匹は、区内で信頼できる飼い主さんが見つかりました。ただ……事情があつて引き取り手を探せない子が、数隻に残ってしまつて】

「引き取り手が……見つからない、じゃなくて、探せない……の？」

こくき、と諭は頷いた。白いリボンで結わえられた髪が、肩の上あたりで揺れる。すそが綺麗に揃っているのて、ポニーテールというよりも、時代劇に出てくる武家の娘のような印象がある。

同様に純和風な顔に一瞬思案の色を浮かべてから、小学生はホロキーボードに指を走らせ、この不思議な会話を始めてからずいぶん経つが、ここまでミスタイプは一つもないし、言葉の運び方もやたらと大人びている。

「U—V その子は、少々複雑な事情があつて、私の手からでないと餌を食べなくなつてしまつたのです。一度、他の飼育委員にも頼らそうと餌やりを任せましたがあるのですが、まるで食べずに体重が激減してしまつて……。詳しい説明は、明日こちらに連れてきた時にもういちどしますが、そのような事情があるせいで、私が毎日通える距離内にどうしても新しい飼育場所を探す必要が生じたのです」

「な……なるほど……」

ようやく事情が呑み込めてきたハルユキは、顔のタイピングの三倍はたどたどしい肉声で言つた。

「それで、系列の梅鉢中に使われてない飼育小屋があるから提供するつてことになって、こっちでも飼育委員会が発足して、でもメインの仕事は飼育じゃなくて小屋の掃除だから募集人数がたつた三人だつた……と、そういうわけなのか……」

「U—V その通りです。ご面倒おかけしてすみません」

「や、別に、そんな……。でも、よくうちの学校が素直に協力したなあ、こう言っちゃなんだけど、うちの管理部も相当そつけないっていうか……。余分な仕事はまったくしない感じだと思

うけど……」

系列とはいえ他校の飼育動物にここまで親身になれるなら、一年の時に手ひどく歯められていた僕をもうちよつとケアしてくれてもよかったじゃないか、と口には出せない繰り言を脳内で展開していると、まるでそれをも読んだかのように誰か言——いや書いた。

「U—V すみません、実はそれに関しても事情があって……。私、こちらの生徒会に知っている人がいまして、少々便宜を図ってもらったのです」

「あ、そうなんだ」

なるほど、と納得する。松乃本学園初等部の生徒はその大部分がエスカレーター式に中等部、高等部へと進むが、受験に熱心な家の子は梅林中に入る場合もあると以前聞いた。ならば、こちらの学校に話の知り合いが在籍していることに不思議はない。

ここまでの説明を聞——いや読んで、ハルユキはやつと、なぜ自分が突然飼育委員になったりしているのかを理解した。大本の理由は、同系列の松乃本学園の飼育委員会が廃止されることであり、その理由は経営の合理化であり、さらにその理由は留まることを知らない少子化であって、つまりとところ（社会のせい）なのだ。もちろん、飼育委員長になったり一人で掃除したりしているのはハルユキ自身のせいだが。

「そっか……。凄いなあ、四葉宮さんは、家がなくなる動物のために、企業に抗議したり里親を探したり、こうして他の学校にまで来ちゃうなんて。僕が小四の頃なんて、毎日ゲームとマ

ンガとアニメとおやつの事しか考えてなかったよ……」

ハルユキがしみじみとそう呟くと、誠は真顔でふるふる首を振り、背中からランドセルを下ろしながら器用にキーボードを叩いた。

『U—V 私もゲームくらいしますよ。……それでは、有田さんに事情をご理解頂けたところで、小屋の掃除をお手伝いしたいのですが……』

「あつ、そ、そうか」

委員会活動中だったことをようやく思い出し、慌てて足元からホースとダクキブラシを拾い上げる。

一人で掃除していた時は目的が見えなかったが、こうして色々な事情が説明され、何よりちやんと引越してくる動物がいるのだと解ったからには作業にも気合いを入れなくてはならない。よし、やるぞ！ と内心で決意を新たにしながら、少し離れた小屋に腰を向ける。

掃除は、あとは床にこびりついた落ち葉と泥の残り滓を洗い流せば終わりだが、ちょうど水道の元栓の開け閉めをどうしようか悩んでいたところだった。このタイミングで助っ人が現れてくれたのは実に有り難い。

「なら、そのバルブの開閉をお願いしてもいいかな」

ハルユキがホースの根元を指さすと、誠は途惑ったように首を傾げた。

『U—V そんな仕事でいいんですか？ 一応、汚れてもいいように体操服で来たのですが』

——という文章を読んだ直後、ハルユキはまたしても讀の格好——胸に校章の入った真っ白な半袖シャツと、細い脚をびったりと包む同じく白のハーフパンツ——を凝視してしまい、慌てて眼を逸らした。

校中の体操服もパンツが紺色な以外はほぼ同じ作りで、それを着た女子生徒など毎日学校で見慣れているはずなのに、相手が松乃本のお嬢様だと思ふとなぜか見てはいけないうる。——などという思考をチユリに知られてもしたら、両眼から超火力ビームが連射されるに違いないが。

「う、うん、あとは床をブラシで擦るだけだから！ それじゃ、僕が合図したらそこのバルブを四分の三回転くらい捻ってください！」

やや上ずった声でそう伝えると、ハルユキはどたどた走って飼育小屋に飛び込んだ。奥のほうから流し流すべく、ホースとブラシを構えてからもう一度叫ぶ。

「どっ、どうぞ！」

「U-V 開きます」

同時にテキストによる応答があり、直後、ホースの先端からやや控えめな水流が放たれた。視界端の残水量メーターをチエツクしながら一メートル四方ほどをしつかりと濡らし、「閉めて！」と指示する。返事の代わりに、背後できゅつとバルブが鳴く。

ダッキブラシでざっしざっしと力を込めて擦ると、こびりついていた落ち葉や泥は容易く剥

がれ、床材のセラミックスタイルが顔を出した。幸いすっかりと対候防汚コーティングしてあるように、長年溜った落ち葉に覆われていたわりに凹みやひび割れはない。これなら、一日乾かせば本来の姿を取り戻すだろう。

ハルニキは、水をかけてはブラシで磨く作業を手際よく繰り返していった。自分でバルブを開け閉めしていたら作業効率は大いに下がったであろうし、それ以前に、同じくらい真剣な顔が一緒に働いてくれていると思うだけで不思議にやる気が湧いてくる。全身で面倒くささを表現していた洪島くん＆井関さんと作業していた時には、ハルニキもだるくて仕方なかったというのに。

「……よし！ これで、あとは仕上げだけだ……」

二十分後、床全面を磨き終えたハルニキは、大きく伸びをしながら言った。ぐらっと振り向き、元栓のところにしやがみ込む四葉宮論に声をかける。

「それじゃあ、最後に床を洗い流すんで、バルブ全開にしちやって！」

すると、論は銀く代わりに両手でばばっと宙を叩いた。視界にピンク色の文字が、心なしか流塵がもに廻られる。

【UV あの、もし邪魔でなかったら、私にも手伝わせて頂けませんか？ 流すと同時にブラシを使ったほうが効率的でしょうし、私も、少しは働いた気になりたいですし……】

「や、そんな、もう充分働いてもらったけど……でも、四葉宮さんがそう言うなら……」

ハルユキは口ごもりながら応じると、右手のデッキブラシを掲げてみせた。顔はほんの少しだけ嬉しそうな表情を作ると、こっくりと頷き、右手をバンプに添えてから左手だけで器用にタイプした。

「U—V それでは、行きます」

「どうぞ」

きゅきゅきゅつ、と元栓が全開され、根元からホースが大きく張れた。その内部を走る水を追いかけるように、顔が懸命に駆けてくる。

高圧の水流が勢いよく進むのに数秒遅れて小屋に飛び込んだ少女は、ハルユキの手からブラシを受け取ると、床に溢れる水を一心に金網の外へと押し出し始めた。その動きを呼吸を合わせ、ハルユキは暴れようとするホースを両手で押さえながら、小屋の奥から手前へと水流を溶びせていく。残り二割ほどだった水量メーターはみるみるゼロに近づくが、じやっ、じやっ、と勢いよくデッキブラシが動いた際に、床のセラミックタイルも綺麗なライトブラウンを取り戻す。

顔のブラシはきは、腰が入った実に見事なものだった。恐らくこの手の大がかりな掃除に慣れているのだらう。さすがは名門機学校、と妙な感心をしつつも、ハルユキも負けじとホースを操り床に浮くゴミを押し流していった。

ほんの数分で床面は見違えたようにぴかぴかになり、同時にシステムに許可された使用水量

もほぼ使い切った。我ながら見事な配分だ！　と内心で満足しながら、ハルユキは笑顔で證を見て、「それじゃバルブを……」と言いかけた口をびたりと停止させた。

これまで開閉係をしていた相棒は、今は同じ小屋の中にいるので元栓に手は届かない。そして仮にメーターぶんを使い切っても、元栓が自動制御されているわけではないので水は停まらない。ということとは、このままではあと数十秒で許可水量をオーバーしてしまう。

無論、そうなったところで別に逮捕連行のうえ強制収容所送りにされたりはしないが、ローカルネット上のハルユキの学籍データに《軽微な違反》が記録され、あとで先生に小言を頂戴する程度の面倒ごとは発生する。

「やべっ……」

ハルユキは咄嗟にホースを思い切り握り込んだ。せき止められた水流は不服そうに身震いしたが、どうにかメーターもほぼ停止する。その様子から状況を敏感に察したらしい諭が、タイピングを省略してブラシを放り出すと、身を曲しぎま元栓目指して走りかけた。

とてつもない大惨事が発生したのは、その瞬間だった。

ホースをぐにっと圧迫するハルユキの右手の親指が滑り、チャージされていた水は遠隔系の溜め攻撃の如く圧力的なパワーを伴って噴出し――

体操服姿の諭の右肩口からお腹にかけてを、とばさるっしやー！　と直撃した。

己の引き起こしたカタストロフの巨大さに諭がオーバーフローし、全身を完全停止させるハ

ルユキに対して、ずっと年下の小学生は、一瞬驚きの表情とともに立ち尽くしたもののすぐにまた駆け出した。三メートル離れた校舎脇の元栓にかがみ込み、手早くバルブを開める。

視界右端の水量メーターは、残り〇・二パーセントでからも超過使用を免れたが、それを意識することもなくハルユキは右手にホースを掲げたままフリーズし続けた。

その正面に、とてとてと小走りに戻ってきた諭は、上半身から無数の水滴をしたたらせながらタイプした。

「U・V 気にしないでください。こういう事態に備えて体操服に着替えてきたわけですから」

そして表情を変えることもなく、たつぷり水を吸い込んで肌に貼り付くシヤツの裾を大きくたくし上げ、両手で絞る。

その無防備な仕草によって舌先なく見えてしまった素肌の白さが、ハルユキの空転する思考トランスミタシオンに衝撃を与えて正位置に戻した。回撃計が一気にレッドゾーンに突入し、ようやく発汗増大・顔面発赤・心拍亢進という正常な反応を回復したハルユキは、びくーんと直立姿勢になりつつ裏返った声で叫んだ。

「ごっ、ごめ、ごめ、ごめんなさい!! ほは本当にすすみません!! ぜぜ絶対わざとじゃないんですてて手が滑ってそしたら水が、水がばしやーって」

すると諭は数度瞬きしながら小首を傾げ、もう一度指を肉かせた。

「U・V 大丈夫ですよ？ 着替えも持ってきていますから、問題ありません」

「でても、あんな勢いで水が直撃したなら、に……に……」

ニューロリンカーに浸水が。

と言おうとしながら、ハルユキは詮の細い首筋を見た。

常時装着型デバイスであるニューロリンカーは、どんな機種でも丸洗いや入浴くらいなら可能なレベルの生活防水機能を備えている。しかし直結用端子やカメラレンズ回りはどうしても弱く、深い水に洗んだり高圧水流を受けたりすると浸水事故が起こりかねない。ハルユキはそれを心配した——のだが。

裾広がりのボニータールに覆われた謎のうなじ部分には、何度見返しても、何もなかった。極細の後れ毛が先端に小さな水滴を焼めかせるのみで、どのようなデバイスもまったく、完全に存在しない。

「え……………」

先刻とは別種の髪きに打たれ、ハルユキは小さく声を漏らした。

四葉宮跡は、ニューロリンカーを装着していない。だがそんなことは有り得ない。数十分前に彼女はハルユキのニューロリンカーとアドホック接続し、チャットツールを介して会話を続けてきたではないか。

そう考えたところで、ハルユキはようやく、もつと早く感じるべきだった疑問に思い至った。

なぜチャットなのか？ 恐るべきタイピング速度がラダのない会話を実現していたために、いそのまま受け入れてしまったが、考えてみれば話は案を現してから、一度も肉声を発していない。そこには当然、何らかの理由や事情があるはずなのだ……。

ハルユキの視線の意味を、誠は鋭敏に察しようだった。

正面から見ると虹彩にわずかな赤みが混じっているように見える瞳をまっすぐハルユキに向け、少女は右手の指先をつつと指らせた。途端、視界に縦長の矩形が浮き上がる。

ネームタグだ。上部中央に【四禁言語】の姓名と、少し小さな【松乃木学園初等部四年重組】、【二〇三七年九月十五日生】の表示。しかし、本来ならば縦長のはずの姓ネームタグが縦長なものには意外な理由があった。

氏名表示フィールドの下部に、見慣れた証明書が付属しているのだ。いかめしい明朝フォントで記された文字は――【医療用硬膜内留置型通信機器使用許可証】。更に右下に、厚生労働省の認証印。

ぱっと見では意味の掴みにくい漢字の羅列を、ハルユキはしつぱ情からさかのぼって理解しようとした。と眼を凝らした。

留置型通信機器、とは体に埋め込むタイプのマイクロチップのことだ。そして硬膜というのは、頭蓋骨の内側、つまり脳を包む膜のことだろう。脳に埋め込むタイプの通信チップ……それは、つまり――。

ブレイン・インプラント・チップ、略称（BIC）だ。

「う……………」

ハルユキは、全身をびくんと仰け反らせてしまいそうになるのを懸命に堪えた。

ほんの二ヶ月前、新学期が始まって早々にハルユキの前に現れ、恐るべき策謀を巡らしてハルユキから多くのものを奪おうとした一人の新入生。彼もまた、脳にBICを所持していた。長く苦しい戦いのすえに彼——（ダスタ・タイカー）は加速世界から永久に去ったが、その所属組織は今もまだ健在である。それどころか、先達のヘルメス・コード継走レースに、第二の刺客たる（ラスト・ジグソー）が突如乱入し、BICによって強制ブリストされた範囲型心意

攻撃を解き放ちレースそのものを破壊したのだ。

ジグソーの所属組織たる（加速研究会）が、今後ますます加速世界への攻勢を強めることは想像に難くない。ゆえにハルユキは、特対面のBIC装着者たる四葉宮謎に対して反射的に警戒心を抱かざるを得なかった。だが、それを表情に出す直前に、ようやく許可証に記された文字列の頭部分が眼に留まった。

（医療用）、そこにはそう記されている。

ダスタ・タイカーやラスト・ジグソー、そしてブラック・バイスといった加速研究会のメンバーたちは、間手術によってBICを違法にインプラントしている。当然、彼らは厚生労働省発行の許可証など持っていないはずだ。偽造しようにも、タダ表面に細く複雑な認証印だけはどう

なクラッカーにも再現できない。かつて黒雪姫が、名前を改変したネームタグを披露してくれたが、あれとてタグそのものをゼロから生成したのではなく、暗号化された姓名データを置き換えたに過ぎないのだ。それとて、とんでもなく高度な技術であるのは間違いないが。

つまり、謎の示した許可証によれば、彼女は医療目的で合法的にBICを所持しているのだということになる。

ならば、その《医療》とはいったい何なのか――。

という思考を、ハルユキの眼から鋭敏に読み取ったらしい謎は、穏やかな表情のままホロキーボードを一掃してした。

【UV】 説明が遅れてすみません。有田さんが、あんまり自然に私のチャットと会話なさるので、ついタイミックスを逃してしまって……。私は、運動性の失語症によって、肉声での会話ができないのです。それでこうして、BICを使ったチャットでお話しさせて頂いています」

「運……動性？」

《失語症》は大まかに理解できるが、その前に付された単語の意味を深く取れず、ハルユキは眩いた。すかさず謎の、タイプし慣れているものであろう解説が流れる。

【UV】 失語症は、大まかに言うに運動性と感覚性のものに分類されます。感覚性失語症は言語そのものの理解が困難となる症状で、その場合はチャットによる意思疎通も行えません。

対して運動性失語症は、発声器官を動かして言葉を話す機能が障害される症状です。言語は理

解できるので、文字の読み書きは可能です」

表示されたテキストを何度か読み返し、ようやく二つの症状の違いを呑み込んだハルニキは、ふと思いついた疑問をおずおずと口にした。

「ええと……、なら、BICじゃなくて、ニューロリンカーを直結しての思考発声はどう……なのかな？」

すると、隣は、まるでその問いをも予期していたかのように即座に答えを人力した。

『U-V ニューロリンカーによる思考発声は、実際には思考そのものではなく、口や舌、頬を動かそうとする運動信号を読み取って音声として再構成しています。運動性失語症でも症状の軽い人ならそれが可能な場合もありますが、私の脳は、声を出すための信号をニューロンのどこかで完全に遮断してしまっているのです。このように』

そこで、隣はタイピングを停めると、右手の人差し指を自分の口に向けた。

ハルニキがまじまじと凝視するなか、桜色の小さな唇がそつと開かれた。真珠のように光る小粒な歯の間から、舌先がほんのわずかに覗く。大きく息が吸い込まれ、それが音として放たれようとした、その寸前。

「ちん！」と硬く鋭い音を立て、上下の歯が勢いよく噛み合わされた。喉もとの腫が細く浮き上がり、小刻みに震えて、顎に途轍もない力が込められていることを示す。意思に反して食い縛られた奥歯がきりきりと軋み、顔の清楚な顔に苦痛の色が浮かぶ。

「ご……ごめん、いいよ、もういいよ!!」

ハルユキは無意識のうちに叫び、一歩前に出た。硬く強張る細い肩に手を伸ばしかけるが、触れることは躊躇われ、中途半端な姿勢で固まる。

だが幸い、ほんの数秒で論の緊張症状は解けた。一瞬ふらついてから、はあっと大きく息を吐き、少女は顔を上げるとほんの少しだけたどたどしくタイブした。

「UーV すみません、ご心配おかけしました。本気で声を出そうとするつもりはなかったのですが、もしかしたら、しゃべれるかもって気がして、つい……。そんなわけはないのに、馬鹿なことをしました。申し訳ありません」

「そんな、謝らなくていいよ」

ハルユキは激しく首を振った。ほんの一分前、論の持つB-I-Cに警戒心を抱いてしまったことを強く後悔しながら、必死に言葉を掛ける。

「ぼ……僕こそ、興味本位で質問して本当にごめん。思考発声の仕組みなんか知ってたはずなのに……よく考えれば解ったことなのに、馬鹿なのは僕のほうだ……」

それ以上相手の顔を見ていられずに深く俯くと、覆れて夕日に光る飼育小屋の床タイルを背景に、桜色の文字がゆっくりと流れた。

「UーV ありがとうございます。私は何も気にしていませんので、有田さんも気にしないでください。さあ、道具を片付けましょう。これだけ納期になれば、飼育小屋の掃除は充分です。

あの子もきつと喜びます」

ハルユキは恐る恐る顔を上げ、顔の小さな顔を見た。そこには、言葉——いや文字どおりに少なくとも不機嫌の色は存在せず、ハルユキはようやく肩の力を抜くと頷いた。

「……………うん。でも、片付けは僕がするから、君は早く着替えたほうがいいよ。校舎のそっち側に非常口があつて、そこから廊下に入ると少し先の左側にトイレがあるから……」

早口にそう言い、ブラシを拾い上げると、視界にやや勢いよく反論。

『UV 平気です。最後までお手伝いさせていただきます。私はホースを』

そこで文字列を途切れさせ、論は突然鋭く息を吸い込むと——。
へくちつ、と可愛らしいくしやみをした。

それが、ハルユキが初めて聞いた、四壁百端の肉声だった。

午後五時四十五分、飼育小屋の清掃及び掃除用具の返却というミッションの全てを完了させたハルユキは、飼育委員会の活動日誌ファイルを開き、すでに二人分の認識印がセーブされているその末尾に自分の名前を加えると、学内システムに送信した。

「ふう……………」

大きく息を吐き、改めてもう一度、掃除の終わった小屋を眺める。

あちこちに小さな水たまりが残るものの、ライトブラウンの色合いを取り戻したセラミックタ

タイルの床は、腐葉土に覆われていた作業開始前と比べれば見違えるようだ。ステンレスの金網と板張りの壁はまだ埃っぽいが、これは明日ブラシて磨けばすぐ綺麗になるだろう。

もちろ内部が空っぽになったぶん、落ち葉と泥が小屋の前にもよつとした山を作っているが、これは乾燥してからゴミ袋に詰めて捨てるはずだ。幸い今夜から数日間はまだまとまった雨が降らない予報なので、乾くのにきして時間はかかるまい。

「やれば、できるもんだなあ……」

ハルユキが呟くと、着替えを終えた四葉百論が素早くタイブした。

【U】V 実は私、昨日この小屋を下見させてもらったのです。その時は、使えるようになるまでに三、四日はかかるだろうと予想したのですが、この分なら明日にはもう、ここで飼う予定の子を連れて来られそうです。管理部にかなりせっつかれていたのが本当に助かりました。

「いや、そんな……僕がもっとしっかりしてれば……」

——同僚委員一人を先に帰したりしなければ、という言葉を省略し、ハルユキはもうこゝと続けた。

「……もうちょっと早く終わっただけだね。それはそうと……ここで飼う動物がなんなのか、かなり気になるんだけど……」

ちらりと顔を見ると、並んで立つ論は、虹彩に仄かな赤が混じる大きな瞳をくりと閃かせ、

右手の人差し指だけをばんばんとリズムカルに動かした。

【U—V ナ、イ、シヨ、です】

「そ、そう……じやあ、明日の楽しみにしておくよ……」

むぐむぐ答え、もう一度視線を真横に動かす。

松乃木学園初等部の夏服は、白いセーラーカラーの、すんとしたラインのワンピースだ。ウエストのかなり高い位置から広めのタックが二本走っていて、どこか古風な格好なシルエツトにも見える。これまで間近に見たことなど一度もないその制服に、思わず数秒間暇を留めてしまつてから、ハルユキは慌てて前に向き直り言つた。

「あ、あと十分くらいで強制下校時刻だから、そろそろ学校から出ないと……。今日は、千伝つてくれてありがとう」

【U—V こちらこそ、明日もよろしくお願いします】

という返事に続けて、しかし話は、予想外の文字列をタイプした。

【私はちよつと生徒会室に挨拶していきますので、有田さんは先に下校なさってください】

「えっ……」

囁きに休ごと右に向き直り、ハルユキは顔をまじまじと見た。

確かに先ほど、この生徒会に知り合いがいると言つてはいたが、それにしても余所の中学校の生徒会室に単身乗り込もうとは、小学四年生としては驚くべき度胸だ。眼を丸くするハル

ユキを、むしろ不思議そうに見返した諭は、平然とタイプしてから軽く頭を下げた。

「U・V それでは失礼いたします。さきげんよう、有田さん」

そしてくるりと体を回し、正門方向にすたすた歩いていくので、ハルユキはその背中に半ば反射的に呼びかけていた。

「あ、あの、僕も行くよ！ 僕もその、生徒会に知り合いの人がいるから……」

第一校舎一階奥の生徒会室に何人の役員が残っているかは解らないが、その中にはかなりの確率で黒雪姫もいるはずだ。万が一、諭の所持するB・Cに対して、黒雪姫もハルユキと同様の警戒を抱かないとも限らない。ニューロリンカーを装着すらしていない諭が（加速研究会の刺客など）ということには有り得ない、とどうにかして早めに伝える必要がある。

小走りて横に並んだハルユキを見て、諭はちらりと奇妙な表情を浮かべたが、何を言う、いや書くでもなく黙っていた。

正面昇降口から校舎に入り、奥まみれのスニーカーを履き替えたところまで、視覚と聴覚に校内システムからの警告アナウンスが流れた。あと五分以内に下校しないと第三級の校則違反が個人ファイルに記録され云々、という合成音声に顔をしかめる。いかな委員長権限でも、この規則には対抗できない。下校時刻の延長申請が可能なのは、唯一生徒会の役員だけだ。

何とか黒雪姫に頼み込んで延ばしてもらうしかないが、そんな公私混同を認めてくれるだろうか、とハラハラしつつ第一校舎の閣下を歩くハルユキの隣で、四壁窓は相も変わらず涼し

い顔をしている。

——僕が小西の頃なんて、知らない中学校の敷地に一歩踏み込んだだけで気絶しかねなかったけどなあ。

なととやや情けない思考を巡らしているうちに、西側の突き当たりが見えてきた。右の壁に設けられたドアが生徒会室だ。考えてみれば、入学してからの一年と三ヶ月間、中に入ったことは一度もない。

開じられた白いスライドドアの前まで通り着いたもののハルユキが遠退していると、誰か何のためらいもなく右手を持ち上げ、宙の一点を叩いた。ホロウインドウを表示させ、入室ボタンを押したのだ。

二秒後、かちんとドアロックが解除される音が響いた。誰は表情一つ変えずにドアを引き開け、軽く一礼してから中に踏み込んだ。

——え、ええと、僕はどうすれば……。

この期に及んでもまだ夕コタロそんなことを考えつつ廊下に立ち止まっているハルユキの耳に、聞き慣れたあの人の声が届いた。

「すまない、誰。ちよっとこっちの仕事に手間取ってな。小屋の掃除はまだ終わってないんだろう？　今すぐ手伝いに行くから……」

——え？

今の声は、間違ひなく黒雪姫のものだ。そして言葉の中で、ごく自然に《話》と呼び捨てにしていた、ということは一―四禁言論の言っていた《禁言中生徒会の知り合い》というのは、つまり副会長の黒雪姫その人……だったのだらうか？ しかし、一体この二人に、どんな接点があるか？

混乱のあまり頭をよらふらせながら立ち尽くしていると、視界に表示されたままだったチャットツールに、新たな文字列が流れた。どうやら議は黒雪姫ともアドホック接続したらしい。

「UIV 排除は終わったのです。この方が一人てがんばって終わらせてくれました」

「……この方？ どこにいるんだ？」

黒雪姫の怪訝な声に、これ以上廊下に潜伏しているわけにも行かないと思い、ハルユキはさぞこない足取りで壁の隙から出ると敷居をまたいだ。顔を伏せたまま後ろ手にドアを閉めると、恐る恐る視線を持ち上げていく。

初めて見る梅郷中の生徒会室は、予想よりもずいぶん広々としていた。中央には楕円形の会議用テーブル、奥の窓際には細長い事務机が置かれ、左右の壁は全面に格子状のウツドラックが設けられている。

あらゆる調度品が落ち着いたダークブラウンの天然木で、床には濃いベージュのカーペットが敷かれ、入り口のすぐ左側には大型のソファセットまであるのとても中学校の一室とは思えない。ことによると、かつて一度だけ覗き見たことのある校長室よりも上等な空間ではあるま

いか。

「論は正面の会議テーブルの脇に立ち、黒雪姫はソファセクトの傍らにいた。それ以外に人の姿はない。どうやら黒雪姫は一人で残業していたようなのだが、予想外なのはその出て立ちだつた。」

「せ……、先輩、なんてそんな格好を」

論との関係についての疑問も一瞬忘れ、ハルユキがその声を受けると、黒雪姫はさつと胸を体の前に回し、びったりした黒い半袖Tシャツと紺色のハーフパンツ——つまり体操服姿を隠した。ほんの少し頬を赤らめながら唇を尖らせ、上ずった声を出す。

「い、いや、これはだ……あの小屋を掃除するなら汚れてもいい格好だと思つて……というか、それ以前に、なぜキミがここにいるんだハルユキ君」

「なぜって……それは……ええと……何ででしたっけ」

一瞬本気で解らなくなり、ハルユキが口ごもると、チャット窓にどこか呆れたような議の言葉が並んだ。

「U—V 有田さんは飼育委員長さんなのです。小屋の掃除をしてくださいました。私が生徒会室に挨拶に行くと言ったら同行なさったのですが、理由は知りません」

——ほんと、理由はなんだったんだっけ……。

なとと今更のように考え込んだのとはば同時に、黒雪姫の驚きと呆れが等量ずつ含まれた声

が聞こえた。

「き、キミ、飼育委員になったのか!? 何でまた……いや、そうか、くじ引きの結果が……。まったく、この大変な時によくよく引きの強い奴だなあ、ハルユキ君……」

ここで、勘違いによる立候補です。などと言うとまた状況が複雑になりそうだったので、とりあえず「いやあそれはとても」と照れ笑いを浮かべておく。

改めて眼を向けると、体操服を着た黒雪姫は、普段の荒々とした制服姿とはまた別種の魅力に溢れていた。髪を顔と似たポニーテールにまとめているからだろうか、弾けるような活力を感じさせるその姿にしばしばヤーンと見とれてしまっただけから、ハルユキもとりあえず目先の質問を口にした。

「……そ、それにしても、なぜ先輩が飼育小屋の掃除を? 生徒会と飼育委員を兼任……したわけじゃないですよわ?」

「ああ、それはだな……」

そこで黒雪姫は何か気付いたように言葉を切ると、ぱぱつと素早く飯糰がスタックアップを操作した。ハルユキの視界に、下校時刻が延長されたもののメッサージが流れる。時計を見れば六時のわずかに七秒前だ。お礼を言おうとしたが、黒雪姫は手の一振りも押しとどめ、言葉を続けた。

「……それはつまり、たった二人の、しかも恐らくくじ引きで決定されるであろう飼育委員で

は、あの小屋を短期間で掃除するのは不可能だろうと推測したからだ。私は諦め、可及的速やかに小屋を使用可能にするため約束したからな。下校時刻の延長限界まで掃除を手伝おうと思つたのだが……まさかキミが飼育委員になり、しかもわずか二時間足らずで、あの惨憺たる小屋を綺麗にしてのけるとは思わなかつたよ。頑張つたな、ハルユキ君……」

優しい微笑みとともに深く頷きかけられ、ハルユキは胸の奥をぎゅつと握られたような感覚に襲われた。どう反駁していいのかわからず、黒雪姫の瞳を見つめたまま立ち尽くす。

――本当は、サボろうとしたんです。でも、きつとあなたも自分の仕事を頑張つてゐるって思つて、それで僕も頑張れたんです。なのにあなたは……本来の仕事を終えたあと、あの小屋の掃除までしようと思つてたんですね……」

という心の声が、どこまで届いたのかは解らなかつたが、黒雪姫はもう一度ゆっくりと頷いた。

魔法の手離りに満ちた瞬間をインタラプトしたのは、チャット窓に超高速で流れた桜色のフォントだった。

【UIV 見つめ合っているところすみませんが、そろそろ教えてもらいたいです。有田さんとサッチくんはお友達同士だったのでですか？】

ぱちぱちと瞬きした黒雪姫は、ハルユキの右側に立つ顔を見て、「ああ、そうか」と声を出した。

「いや、すまない。そうか、ういいういはまだ知らなかったんだな。うっかりしていた」

——サウちゃん？ ういいうい？

囁きとして二人を交互に眺めるハルユキの耳に、黒雪姫の簡潔なる説明が響いた。

「被——有田春雪君は、我がレギオンの先鋒にして私の（今）だよ、ういいうい」

「う……………!? ……!?」

——な、な、何ゆってるんですかアアアア！

と内心で絶叫するハルユキの視界に、謎の明瞭なる応答が流れた。

「U—V ああ、そうだったんですね。有田さんが、あの（シルバー・クロウ）なのですか」

「……………!? ……!?」

——ま、ま、また知らないうちにリアル割れしてるウウウウウ！

反射的にダッシュで逃げようとしたが、ドアはロククされていてどんなにがちやがちや引つ張っても開かなかった。そんなハルユキの背中に、黒雪姫が呆れ返ったような声を投げ掛けた。

「…………あのな、ハルユキ君、キミのほうは、ここまでの流れて整備できていてもいいと思うぞ。

彼女——四壁宮殿も我々と同じペーストリンカーで、しかも第一期ネガ・ネビュラスのメンバ——であることを、な」

——もう、誰も信じてない。

と、一昔前のコミックのダークヒーローが右手に銃を下げ左手で傷口を押さえつつ言いそうなことを、ハルユキは脳内でしょぼしょぼと呟いた。

生徒会室のソファセットの片隅にうずくまり、両手で紅茶のカップを抱えている。黒雪姫が手ずから淹れてくれたいかにも上等そうなダージリンだが、その芳しい香りを楽しめるほどにはまだ衝撃から回復していない。

誰も信じてないと言いつつ、少なくとも疑うぞ。突然現れて、なんかやけに落ち着いてて、僕を人間扱いしてくれる人は全員もれなくバーストリンカー。しかも古参のハイレベル。間違いない。

その決意とともに向かいのソファをちらりと見ると、四葉宮様が真剣な顔でティールカップにミルクを垂らしているところだった。きつちり適量を投下できたのか、ひとつ傾いてピタチヤーを置くと、スプーンで慎重にかき混ぜる。

その特仕車を眺めていると、今でもまだ理解しがたいものがある。誰は国系列の松乃木学園初等部四年生で、二七年の九月生まれだというから、現在わずかに九歳九ヶ月。赤の王ニ

コよりも更に二歳も若い。

第一期ネガ・ネビュラスが、頭首ブラック・ロータスの無差別戦を経て消滅したのが二年半前だから、その頃論は実に七歳でしかなかったはずだ。となると、パーストリンカーになったのはいったい何歳の時なのか。

数々の疑問に翻弄されつつハルニキが紅茶をすすっている、左隣に腰掛ける黒雪姫がカブをソーサーに戻し、やや予想外のひと言で会話の口火を切った。

「……確か昨日もニューロリンカーを着けていなかったが、普段から外しっぱなしなのか、誰？」

その問いに、論は右手でミルクティーを飲みながら、左手だけで器用にタイプした、恐ろしいことに速度は大して落ちていない。

「U—V ええ。装着していると、どうしてもあの世界に行きたくなってしまうので」

「付けばいいじゃないか。お前は私と違って資金面というわけじゃない。マッチングリストに名前があっても、面倒な奴らが次々襲ってきたりはしないはずだ」

「U—V 月に一、二度くらいは世田谷の中立エリアでソロ対戦しているのです。それで充分です。それ以上を望むことは、私には許されません。実質的に昔のネガ・ネビュラスを燃滅させてしまった責任の一端は、この私にあるのですから」

「えっ……………」

と、驚愕の声を漏らしたのはハルユキだった。

視界に浮かぶチャット窓をまじまじと見返すが、話のタイプした文字列は、何度読んでも他の意味には取りようがない。

——ネガ・ネビュラスを壊滅させた。

その言葉は、これまで黒雪姫が何度か繰り返してきたものだ。

黒の王ブラック・ロータスは、二年半前の七王会議の席上で、レベル9同士の不戦を唱える赤の王レッド・ライダーの首を吊として永久に追われる身となった。結果、彼女の率いていた第一期ネガ・ネビュラスもなし崩し的に消滅してしまったのだ、とこれまでハルユキは理解していた——のだが。

説明を求めて隣に視線を向けたが、まだ体操着姿のままの黒雪姫は、髪いを濡えた瞳をティークアップに落としたまま口を開こうとしない。そして話もまた、左手をホロキーパードに乗せたまま黙り続けている。

重い静寂のなか、北側の窓から入り込む光だけが徐々にその色を濃くしていく。もうすぐ夏至ではあるが、午後六時半を回ると、さすがに空も薄暗い。

生徒会役員権限による下校時刻の延長は、確か七時が限界だったはずだ。時間も心配だが、それ以上に二人のやり取りの来し方と行く先が気になって、ハルユキは唇を噛んだ。何もかもを解りやすく説明して欲しくてたまらないが、ハルユキは本来、この場では招かれざる客だ。

あまり前のめりな態度を見せるのも躊躇^{ちゅうちゆ}われる。

しかし幸い、二人の古参バーストリンカーたちは無言のうちにある種の同意に達してくれたようだった。まず隣の黒雪姫が小さな吐息^{とそ}に乗せて呟^{つぶや}く。

「……私は今まで、かつての第一期ネガ・ネビュラスについて語ることを、意識的に……あるいは無意識のうちに避けてきた。失われたものにすぎるとするような真似^{まね}をしては、現メンバーとして頑張ってくれているハルユキ君たちに頷^{うなづ}向けできないと思つたし……何より、私の罪を直視する勇氣もなかったしな……。——だが、レイカーが戻り、こうして二年半ぶりにういいに会うこともできた。今こそ、過去と向き合う時が来た……ということなのだろうか……」

息を殺して言葉に聞き入るハルユキの向かいで、今度は論が両手を閃^{ひらめ}かせる。

「U—V 罪と言うならば、それは私にもあるのです。それぞれの過去から眼を逸^はらしたまま、長い間加速世界の片隅に隠れ続けてきた私やサツちん、フリーねえが、もう一度自分と向き合うことができたのは、間違いないネガ・ネビュラスのメンバーたちの頑張りがあったからです。有田^{ありだ}さんには、かつて私たちがどのような過ち^{あやまち}を犯し、なぜ第一線から要を消さねばならなかったのかを知る権利があります」

「ああ……、そうだな。その通りだ」

桜色に光る文字を読んだ黒雪姫は、そう言つて頷くと、体ごとハルユキに向き直った。

漆黒^{しつこく}の瞳の奥には、かつて何度か自分の過去について語ろうとした時と同じように燃えや光

があるが、今はそれだけではない。虹彩のいちばん真ん中に、小さな星が儼然と輝いている。わずかな闇を置いて放たれた声もまた、痛みに耐え、乗り越えようとする魂とした響きを帯びていた。

「……ハルニキ君。キミももう知っているとおり、私はかつて、初代赤の王レッド・ライダーが主張した休戦協定を受け入れると見せかけて、彼の首を落とした。そのまま彼の五人の王との戦闘になだれ込み、生き延びてバーストアウトしてから彼は、二年間にわたってダローバルネットを遮断し続けた……と言ったが、正確にはたった一度だけ、王たちとの戦闘があった翌日に、私は無制限中立フィールドにダイブしているのだ。第一期ネガ・ネビュラスのメンバーたちに謝罪し、私の蓄積していたバーストポイントの大部分を彼らに譲渡するためにな」

「UIV そんなの、受け取るわけがないのです」

話が文字を挟むと、黒雪姫は小さく苦笑する。

「だが、私にはそれ以外に差し出すものなどなかった。せつかく危険を冒して『シヨップ』でポイントアイテムに変えてきたのに、お前たちときたら怒るんだからな……」

「UIV 当然です。今思い出してもちよつとムカッと来ます」

「悪かったよ」

もう一度笑い、黒雪姫は肩をすくめると続けた。

「……だが、話はそれで終わらなかつたのだ。私が、己のしたことを告白し、次期頭首を指名

して加速世界から隠遁する意思を表明したら、諸たち（四元素）が逆にとんでもない提案をしてきたんだよ」

「え……えれめんつ……？」

ハルユキが驚愕返しに呟くと、諺がはんのわずかに頬を赤らめながらタイブした。

「UIV 当時、ネガ・ネビュラスのサブリーダーを務めていた四人のバーストリンカーに、いつの間にかそんな大柄なあだ名が付けられたのです。理由は、それぞれのアバターの属性が、地、水、火、風に分類されたからです」

「（風）はもちろんスカイ・レイカーだ。ういういの属性が何なのかは、のちの楽しみとしておこう」

微笑みながらそう付け加える黒雪姫と、仄かにはにかんでいる諺の顔を、ハルユキは交互に見やった。

（四元素）なる異名を取る四人のサブリーダー。それはつまり、太古の戦国大名が従えていたような（四天王）的存在であると理解していいのだろう。ある程度予想はしていたが、この小柄な少女は、かつてあのスカイ・レイカーと並び立っていたほどの強者なのだ。そんなにも強く、しかも同じ杉並に住んでいるのなら、なぜ黒雪姫はもっと早く連絡を取り、レキオン復讐を要請しなかったのだろうか。何か事情はあるのだろうか、せめて領土戦だけでも手伝ってもらえれば、ずっとラクに防衛できただろうに。

「——などと少々ウツワの小さいことをハルユキはつい考えてしまったが、黒雪姫が戦犯（せんぱく）いとも表情を改めたので、自分も急いで姿勢を正した。静かな声が、夕闇（ゆふぐら）の深まる生徒会室に流れた。

「——私の引退表明に対して（四元素）たちが行った提議案は、私にもまったく予意外のものであった。彼らは……（フレイン・バースト）のクリア手段が、レベル10への到達の他にも、もう一つあるのではないかと、そう言ったのだ……」

「えっ………!?」

その言葉は、ハルユキにも巨大な衝撃（しやうげき）をもたらした。

オンライン対戦格闘ゲーム（フレイン・バースト）の終着点。それは、課せられた条件の過酷（こく）さから考えても（レベル10達成）以外にあるまいと、これまで信じて疑わなかったのだ。

他に、同じくらい困難な目標が存在し得るだろうか？ たとえば全領土の統一とか？ いやそれは非現実的すぎる。バーストランカーの大部分は東京都心に集中しているが、戦域（せんぎ）そのものは日本中に広がっているからだ。

それ以上基調を上げることができず、ハルユキは身を乗り出して急き込むように訊ねた。

「な……何なんです？ その、もう一つのクリア手段って!?」

「キミも一度ならず見たことがあるはずだが、ハルユキ君」

黒雪姫に、ミステリアスな声（こゑ）でそう切り替えられ、きょとんと眼を見開く。

「見た……って、何をですか？」

「加速世界の中心に常に存在し、しかし何びとたりとも立ち入ることの叶わぬ魔域……その峻厳なる威容を、だ」

途端――。

瞬時に、昨日眠にしたばかりの光景が、さやかに浮かび上がった。

深い霧立ち込める《魔域》ステージ。鋭く切り立つ街並みの彼方に、暗黒を貫いてそびえる黒々とした尖塔群。万人を拒否しつつも、どこか誘うようなあの重厚かつ醜麗なシルエクト。

「……………、皇居……………」

震える声で囁いたハルユキに、黒書姫と語は無言でそつと頷いた。何度かせわしなく躊躇してから、慌てて反論する。

「て、でも！ 昨日先輩が言ってたじゃないですか！ 皇居は、《加速世界》でも、唯一いかなる手段を用いようとも立ち入れない場所」だって！」

「だが、こうも言ったはずだぞ。不可侵であると確定しているのは、あくまで《一般対戦フィールド》に限ってのことだとな」

「そ、それって……つまり、ええと……一般フィールドじゃない場所なら……」
こくり、と喉を鳴らしてからおそるおそる続ける。

「……上位の《無制限中立フィールド》でなら、入る手段はある、ってことですか」

回答は、数秒間思ひなかつた。

黒雪姫と譲はちろりと眼を見交わし、なぜか二人とも「咽喉毛を伏せた。しかしすぐに顔を上げ、先ほどと同じように頷く。今度は、譲がチャットツール経由で答えた。

「UIV 少なくとも、経路らしきものは確認されています。無制限フィールドの皇居……私たちは《審城》と呼んでいます、そこには一般フィールド千代田エリアの皇居にはない、四つの城門が存在するのです」

「……それが……審城の、入り口……？」

「うむ。城の東西南北に一つずつ、高さ三十メートルはあるかという巨大な城門がそびえているのさ。それ以外の城壁の上下方向には、やはり不可視障壁が設定されている」

黒雪姫の言葉に、ハルユキは現実世界の皇居の平面図を思い描いた。たしかこちら側の本物も、東西南北に門を備えていたはずだ。うち幾つかは地下鉄の駅名にもなっている。南側のが《桜田門》、西のが《牛嶋門》。北と東のは思い出せないが、加速世界の地形は基本的に現実と機なので、むしろ《審城》にも門があるほうが自然と思える。

「……その門は……聞くんですか……？」

内心わくわくしながらそう訊ねると、黒雪姫は腕組みをして頷いた。

「聞かない門なぞ壁と一緒だからな。ゲートである以上、聞くと考えるほうが合理的だ。——迫り着き、扉を押すことができる、だから……」

「UIV そう、門はあっても通り着けないのです。なぜなら、四つの門はその全てが絶対的に守護されているからです。無制限フィールドでも最速中の最速と目される、四匹の超級エネミーに」

「……………」

ようやく話の向かう先が見えた気がして、ハルユキは鋭く息を吸い込んだ。

（エネミー）とは、無制限中立フィールドに棲息するモンスター群の総称だ。一般のMMORPGと同様にシステムに自動制御され、ほとんどの個体はその反応範囲に入ったパーストリンカーを猛烈と襲ってくる。例せば経路値代わりにパーストポイントを得られるが、最下級のエネミーでも恐ろしいほど強いうえに、もらえるポイントも微々たるものだ。本腰を入れてエネミー狩りをしようと思ったら、多数派のパーティーを組んだうえに無制限フィールドに数日から一週間以上もキャンプしなければならず、その苦勞は並大抵のものではない。（地味な経路値稼ぎ）は決して嫌いではないハルユキとて、ちよつと積極的に参加しようという気にはならないほどだ。

掲げた喉を冷めかけた紅茶で遣らせ――。

「最強……って、どれくらい強いんです……？」

訊ねると、黒雪姫はううむと考え込んだ。

「ン……正直、説明のしようもない感じだが……。――そうだな、ハルユキ君、キミは確かい

ちど……あれは赤の王と雄装に赴いた時だったかな、二十人程度のパーティイーがエネミーを降るのを見たことがあったな？」

「え……ええ、ちよっとしたビルくらいありそうな、すっごい奴でした。あれが、四壁哥さんの言った《超級エネミー》ってやつですか？」

ハルユキがこわこわそう言うと、二人の古参リンカーたちは揃って激舌笑した。話の指が閃き、桜色のフォントが軽やかな効果音とともに流れる。

【UV】二十人程度で持れるエネミーは、《巨獣級》と呼ばれるランタのやつです。それの十倍くらい強い個体が《神獣級》で、めったに遭遇できないし、準備なしに遭遇したらほぼ死ののです】

「じゅ、十倍……あれの……!?」

ぶるっと背中を震わせながらハルユキは叫んだ。危装に行く途中の山手通りで見たエネミーですら、一対一で出くわしたら即死決定と確信できるほどのシロモノだったのだ。正直、ハルユキの感覚では神獣級とやらの強さはもう想像もできない。

——しかし、

続けて風雪姫が滑らかに発した言葉には、ハルユキは震えるどころか一切の反応もできなかった。

「そして、帝城の四方門を守護するエネミーたちは、その神獣級がチワワに思えるほど強い。

《超級》と呼ばれるのは、ステータスを推測することもできないからだ。別名を《四神》という彼らは、その名の通りもはや眼ではなく、加速世界に君臨する本物の神と認識するべき存在なんだよ……」

加速世界の――神。

これまでハルニキは、ブレイン・パーストの作り出すゲーム空間に於ける最強者は《純色の七王》であると信じて疑わなかった。いかに大型エネミーが強いと言っても、黒雪姫やニコを含む王たちなら、たとえ一対一でも倒せるのだろうと思いついていたのだ。

いや、恐らく《巨眼級》や、ことによれば《神威級》までなら、条件さえ整えば勝てるのかもしれない。たしか青の王の二つ名に、《神威殺し》というのがあったはずだ。あれはつまり、一度は神威級をソロで倒したという証明に違いない。それがそのまま尊称になってしまふほどの偉業ではあるにせよ。

しかし、いまの黒雪姫の声には、かすかな畏怖の念すら滲んでいたように思えた。ハルニキは声を潜め、恐る恐る訊ねた。

「あの……《王》と《神》は、どちらが強いんですか……?」

「《王》は所詮ヒトさ。対して《神》は、ヒトの域を遥かに超える存在だ。正面からまともに戦えば、たとえ七人の王が持てる全ての力を振り絞っても、《四神》のたった一頭ですら及ばないだろう」

「……………マジ、っすか。じゃあ、その、そんな化け物……じゃない神様級のエネミーが守ってる門なんて、突破しようがないじゃないですか……」

呆然と呟くと、誰か肩口までのポニーテールを揺らして頷き、タイプした。

「UIV そう、とてつもなく困難です。その困難さゆえに、かつて私たちは考えたのです。

《四神》の護りを抜け、門を聞いて《都城》の中心へと至ることこそ、ブレイン・パーストの二つ目のクリア条件なのではないか、と」

「あつ……………そうか……………」

ハルユキは思わず声を上げた。

すでに知らされている、《自分以外のレベル9パーストリンカー五人のポイントを含め奪い、レベル10になる》という条件も余りに困難だが、しかしある意味では、今すぐ達成可能だとも言える。現在七人いる王のうち五人が、自分を犠牲にすると決意し、誰か一人の王に己の首を差し出せばいいのだ。その瞬間に初のレベル10パーストリンカーが誕生し、加速世界に何かが起きる。

しかしもちろん、現実的にはそんなことは有り得ない。あらゆるパーストリンカーは、自身が強くなるために戦っているのだ。膨大な時間と熱意をつぎ込んでレベル9に到達したあげくに、あつさり全てを捨ててするような真似ができてきようはずもない。

対して、《四神の守護を破って都城の中へと至る》ことの困難さは、あくまで戦力的な問題

た。仮にひとつの大レギオンのメンバーが全員（王）クラスの手段なら、突破は可能なかもしれない。こちらも非現実的だが、自己犠牲の精神は必要ない。

つまり、（レベル10）と（密城攻略）の二つの条件は、困難さのベクトルが違ふのだ。前者は心の強さを、後者は拳の強さを求めている。この対照性を考えれば、密城の中心への到達に成功した時、やはり世界に何かが起きる——ことによるとブレイン・バーストそのものがタリアされる、ということはある。充分に、だいたい、（ワールドマップの中央に存在する「豊攻不落の城」）は、古来どんなゲームでも最終章のステージと決まっているではないか。

ヘビーゲーマーとしての直感がびりびり刺激される感覚を味わいながら、ハルユキは身を乗り出して小刻みに動いた。

「ええ……、有り得る、有り得ますよそれ！ そこまでとんでもないモンスターに守られてるなら、皇居……じゃない帝城が、いわゆる（ラストダンジョン）なんですよ！ 中に入ればさっさと強い……スゴイ何かが……」

【UIV】 ことによると、四神以上に強いラスボスがいるかもしれないのです。ともあれ、二年半前、私たちネガ・ネビュラスのメンバーは、引退を表明したサッちゃんに今説明したのと同じことを主張しました。一つ目のタリア条件が断られたのなら、二つ目に挑戦しましょう、と、それに対して、分かんず屋のサッちゃんは……—

「止めたさ。もちろんだ止めた。全力で駄目だ許さん諦めろと叫んだ」

微苦笑しながら、黒雪姫はそう応じた。

その表情は穏やかで、口調も軽妙だった。しかし黒い瞳にはごくかすかに痛みの色が浮かんでいて、それを見た瞬間、ハルユキはこのエピソードの結末を仄かに手感した。

直前の興奮が遠ざかり、代わりに冷たい緊張感を胸に溜めながら、ハルユキはじつと続く言葉を持った。

「……だが、『四元素』のみならず、第一期ネガ・ネビュラスの連中こそ、『いつもこいつも分からず殿様いて……マスターの命令に反抗するところか、止めたいなら全員を（断罪）しろ』とまで言い出してな。しまいには、私が騒動を起こして座り込んだら、その場に放置してぞろぞろ帝城に向かい始める始末さ」

『UIV』当然です。私たちは配下であると同時に、サッちゃんの保護者でもあったのですから」
「あのなあういうい、お前は当時初等部に入っただけだったんだぞ！ 本当に……、といつも、こいつも……」

語尾は、震えながら宙に落けた。ハルユキはただ無言で、黒雪姫の白い喉が動き、ぎゅっと両眼が閉じられるのを見た。

すぐに持ち上げられた瞳の奥はうつすらと濡れていたが、しかし涙をこぼすことなく、黒雪姫は静かに迷惘を続けた。

「……やむなく、私も皆と共に帝城を目指した。あの時のフィールド属性は、レアな（極光ス

「テージ」で……夜空一面に、綺麗なオーロラが揺れていた……。杉並から、新宿通りを使つて帝城まで歩いたあの道行きは……まるで真夜中のピクニクのようだったな……」

「U・V 楽しかったですね。私にとっては、レギオン全員で色々おしゃべりしながら歩いたあの時間が、今でも一番大事な思い出なのです。私はグラフさんに肩車してもらつて……アタアさんがレイカさんの車椅子を押して……まるで昨日のことのようです」

「あんまりすぐに帝城に着いてしまったので、いつそ東京を一回りしてくるかと思つたものさ。いや、グラフあたりが本気でそう言い出したんだっけな……。しかしもちろんその提案は却下され、半蔵門の手前、麹町の丘上で我々は最後の作戰会議を行つた」

長い睫毛が伏せられ、瞳が遠くを見るかのようにたゆたう。わずかに開いた唇から、静かな迷憐が紡がれる。

「――『四神』はいわは四身一体の關係にあり、同時に戦う必要があつたために、こちらもレギオンを四隊に分け東西南北に配置した。分かれる前に全員が誰の支援を貰つて勇氣漲々、最高の士氣と統制で心をついにし、我々は帝城の守護者たちへと挑んだ……」

「――それ、それで……どうなつたんですか……？」

わずか一秒の沈黙を我慢できず、ハルユキは掠れ声で訊ねた。

黒雲姫は唇を歪め、揃えた膝の上に両手を重ねて、静かに言つた。

「攻撃開始から約白二十秒後に、最後の一人が斃れた。第一期ネガ・ネビュラスは、尋常な解

散を経て消滅したのではないのだ。まさにその瞬間に、神の手によって壊滅させられたんだよ」

続きは明日また、タカム君やチユリ君も交えて話そう。

放心するハルユキに、黒雪姫はそう言葉を掛けると、冷めた紅茶を飲み干した。

正直、聞きたいことはまだまだあった。(壊滅)とは具体的に何を指すのか？ かつてのメンバーたちは、今どこでどうしているのか？ なぜは禁を守り、黒雪姫に連絡すらしてこないのか？ そしてその一人である四葉宮は、どうして二年半もの時を置いてからハルユキたちの前に現れたのか？

だが確かに、この話は現メンバーであるタカムやチユリも聞いておくべき内容だ。そして何より、壁に掛かったシタタなアナログ時計が、あと数分て下校延長限界の七時を指そうとしている。

手早く茶器を片付け、ソファの隅から学校指定の袍を持ち上げた黒雪姫は、「さ、帰ろう」と二人を促すと、ドアに向かって歩き始めた。その横顔は、常と何ら変わらないようにハルユキには思えた。

去年の秋にハルユキと出会い、ダミールバターを脱ぎ捨てて加速世界へと復帰した頃の彼女は、過去の記憶に目を向けることもすら怖れているかのようだった。事実、戦場で黄の王にリブレイ映像を突き付けられた時は、闘志を失い動けなくなる(零化現象)まで引き起こしたは

「だ。」

つまり、超絶的な戦闘能力を持つ黒雪姫さえも、自分の弱さと日々戦い続けているということなのだろう。

——僕も、不安がっている暇なんかない。

立ち上がり、黒雪姫に続いてドアに向かいながら、ハルユキは心の中で決意を新たにしたり、新生ネガ・ネビユラスの一員として、もつともつと強くならなくてはならない。デムエルアバターのとこかに寄生している《災禍の鎧》なんか一週間と言わず数日でとつとと追い出して、土曜日の領土戦争にも胸を張って参加するのだ。黒雪姫の考えている《淨化作戦》がどのような物なのかはまだ説明して貰っていないが、たとえどんな特訓や苦行を命じられようと耐えてみせる。

ハルユキが、こつそりと右拳を強く握った、その時——。

やはり黒雪姫もどこか平常心ではなかったのだと証明する一文が、視界に表示されたままのチャット窓に流れた。

「U—V 念のため訊きますが、サッちゃんはその格好で下校するつもりなのですか？」

へ？　と思つて斜め右側の黒雪姫を見る。背中に流れる長い髪の間こうは、光沢のある薄乾素材のTシャツ。下半身にはびつたりしたハーフパンツと、すらりとした細い脚。ハルユキもすっかり忘れていたが、長い会話のあいだ黒雪姫は、掃除のために着替えた体操服のままだ

ったのだ。

「う、うわ、しまった。ちよつと待っててくれ」

黒雪姫は、珍しく大いに焦った声を出しながら振り向いた。眼を丸くするハルユキと、ほんのり呆れ顔の誰の間を突っ切り、東西の角にあるロッカーの前まで駆け戻ると――。

床に靴を放り出すや、Ｔシャツの裾に両手をかけ、何の躊躇いもなくスバツと上半身から脱ぎ捨てた。

真っ白い背中と、黒いレースつきの下着のストラップが網膜に焼き付いた瞬間。

「ふりょく!?」

というような謎の叫びを漏らしてしまったのは、巨大な過ちだったのか、それともさやかな正解だったのか。ともかく黒雪姫はそれを聞いた途端にもう一度ぎゅんっと振り向き、棒立ちのハルユキを視認するや素早く両腕で胸部を覆った。その顔がみるみる赤熱していくのを見ながら、ハルユキはしみじみ考えた。

——ここが現実世界でよかった。加速世界なら最大級の心意攻撃で今こゝ首ちょんば。直後、唸りを上げて飛んできた黒いＴシャツがハルユキの顔を直撃し、とてつもなくいい香りとともに全視界をブラッタアウトさせた。

生徒会室からハルユキを連れ出して超高速で着替えた黒雪姫と、引き続き呆れ顔の誰に続い



て校門を出ると、午後七時に二十秒を残して急ぐ下校ロダが正常に記録された。

ふう、と一息つく暇もなく、頭上から陰のある声が降ってくる。

「ハルユキ君、もう暗いから、キミは闇を逃つていけ！ 明日は飼育委員会の活動が終わり次第、生徒会室に集合！ タクム君とチユリ君にはキミから声を掛けておくように！ 以上！ ではさようなら！」

朝早口で指令と挨拶をまくし立てた黒雪姫は、くもりと身を隠すと、校門前を阿佐ヶ谷方面へと去っていった。かつかつというロープアーの音が遠ざかり、濡れる黒髪が夕闇に溶けるのを見送ってから、ハルユキは胸に溜めていた空気を吐き出した。

「……………僕、べつに悪くないよな……………」

ぼそりと呟くと、隣に立つ諭がちこちこ両手の指を動かした。

【UI】 サッちゃんは昔から随れドジっ子なのです！

「……………うん、何となく知ってた……………」

こっくんと頷かせた頭を緩けて軽く左右に振り、思考を立て直す。あまりにも色々なことがあった月曜の放課後だが、まだオールミッドション・コンプリートとは行かない。黒雪姫に命じられた、諭を自宅まで送っていくという任務が残っている。

ちらりと空を見ると、夕焼けの色はほとんど消え去り、都心の街灯りが雲の底をおぼろに照らしていた。あらゆる道路にソーシヤルカメラ網が張り巡らされているといっても、この時間

に小学四年生が一人歩きするのは確かに物騒だろう。いや、それ以前に――。

「あの……四葉宮さん。もう七時回つてるけど、門限とかはだいじよぶなの？」

訊ねると、誠は表情一つ変えずに指を動かした。

【U-V 問題ないのです。私もバーストランカーなのですよ。】

数秒をかけてその一文の意味を理解した時、ハルユキは思わず口もとを引き結んでしまった。ほぼ全てのバーストランカーは、ひとつの共通する傷を抱えている。ハルユキの《師匠》であるスカイ・レイカーの言葉だ。傷とはつまり、赤ん坊の頃、両親の手の代わりにニユーロリンカーを与えられたこと。そういう育ち方をした子供が、たかが増宅が遅いくらいで吐られるだろうか、誠はそう言ったのだ。

その答えは、たとえ九時過ぎに増ろうとも、家に吐る大人のいないハルユキがよく知っている。

「……そっか。でも、まあ、早く増るにこしたことはないよ。あんなに増殖頑張ったんだから、お腹すいたでしょ」

そう言った途端、ハルユキ自身の消化器から、やや音量大きめの低周波が発生した。誠は小さくくりと笑うと、結わえ髪を揺らして頷いた。

【U-V 確かにそのようです。私は一人で増れますから、有田さんもこれで増宅なさってください。では、ごきげんよう】

一礼し、白いスカートの裾を翻して雨へと歩き始める。ハルユキは慌てて追いかけた。
 「いや、送るよ！ もう暗いし、それにここで帰ったら、明日黒川先生にすっごい怒られちゃうし……」

もともと早口に言うのと、語は歩きながら小首を傾げ、答えた。

「U・V それも確かかもです。では、すみませんが大宮までよろしくお願いします」

そしてやや針路を左に調整し、ハルユキの真横に並んだ。

それは、実になんとも不思議な道行きだった。

ハルユキは一人っ子なので当然弟も妹もないし、母親が親類縁者と疎遠なので、小さい子供と遊んだ記憶も無いに等しい。強いて挙げれば、隣接する中野区にハトコのサイトウトモコちゃんが生んでいるはずだが、五、六年前に母方の実家で顔を合わせたきりだ。

いや——、年下の友達ならば、そのトモコちゃんに偽装して自宅に乗り込んできたニコがいると言えはいる。しかし何せ向こうは大レギオン（プロミネンス）を率いる赤の王だ。とても小さい子供扱いする気にはなれない。というよりそんな真似をしたら主砲の一撃で黒こげにされかねない。

ゆえにこうして、葦草のランドセルを背負い右手にスポーツバッグを下げた四葉宮の隣を、年上のお兄さんの立場で歩くという経験はハルユキにとって大変新鮮なものだった。

「あ、ば、バッグ持つよ」

百メートル以上移動してからようやく気づきそう言うとき、誰はべこりと一礼してから差し出してきた。受け取り、必要以上に大きな動作でひよいと左手に持ち替えてみたりする。

——誰かを守る、ってこんな感じなのかな。

LED街灯に照らされた住宅街の洒落な小道を、歩幅を調節して歩きながら、ハルユキはそんなことをばーっと考えた。

いままで想像したこともなかったが、ハルユキもいずれ近い未来には、ブレイン・バースト・プログラムのコピーインストール権を行使する時がくるはずだ。それはつまり、《親》・バーストリンカーとして誰かを《子》に選ぶということだ。何も知らないレベルの雛鳥を見守り育てるということなのだ。

——もし、仮に、万が一、その相手が隣を歩く四禁宮崎のような、年下のか弱げな女の子だったら、いや想像を一步進めて、誰が自分の《子》なら、僕は《親》としてちゃんと振る舞えるだろうか。時として優しく、それでいて優しく、誰を守り導けるだろうか。

——できる。できるはずだ。だってちゃんと「バツグンを持つ」って言えたし、歩行スピードもすっかり合わせてるし。ああ、いっそ本当に《親子》だったらいいのに。

なにと、取り留めもない想像いや妄想を遠らせるハルユキは、数十分前に知らされたばかりの重大な事実をすっぱり失念していた。

その迂闊さを思い知らされたのは、無言で歩いていたら誰が不意に両手を動かして、遠慮げに

タイプした幾つかのセンチンスだった。

「U・V 私の家はもうすぐそこです。ついては、この機会に、有田さんに少々お願いがあるのですか」

睡さしてその一文を読んだハルユキは、擬似親気分が抜けないままにこくこくと頷いた。

「い、いいよ、何でも言つて！」

「U・V 送つて頂いたうえに、重ねがさねご面倒をおかけしてしまいましたが……」

「いいつて、大丈夫。遠慮しないで！」

「U・V ありがとうございます。では、お言葉に甘えさせて頂くのです」

「う、うん、な……何？」

「U・V あなたの實力を見せてください。サッチんの計画に従う前に、《白銀の鷲》が真にネガ・ネビュラスの一番槍を握るに足る者なのかどうか、この限で確かめておきたいのです」

「……………はい？」

びきーん。

と不自然な姿勢および表情で固まるハルユキの視線の先で、誠は肩からランドセルを下ろし、フラフラを開けて手を差し込むと、すぐに抜いた。

小さな手に握られていたのは、同じく小型の、まるで素焼きのような質感を持つ、艶潤しオフホワイトの——ニューロリンカーだった。

左手がボニーテールを持ち上げ、華奢なうなじに量子デバイスが装着されるのを見ながら、

ハルユキはようやく自分がすっかり忘れていた事実に思い至った。

四壁宮譚は、第一期ネガ・ネビュラスのメンバーであり、しかも《四元素》と称される主力、いわゆるところの四天王の一角であり、そこではかのスカイ・レイカーと同格だったのであり、つまりレベル1の雛鳥どころか、多分きつと間違いないハルユキよりずっと、ずーっと強いハイルンカーなのであって――。

フリーズしたままのハルユキのシヤツの腰あたりをくいくいと引つ張り、譚は小道に等間隔で設置されているベンチの一つに誘導した。ハルユキが半ば自動操縦で腰を下ろすと、再びラインドセルを探り、何かを取り出す。

それは、白いビニールで被覆された、直結用XSBケーブルだった。

ハルユキにブラダの片方を差し出しながら、譚は左手だけで器用にタイブした。

「U—V 私と一対一で戦いますか？ それともタッグを組んで、他のチームと二対二がいいですか？」

タッグでお願いします。

と、ハルユキは〇・五秒で回答した。

ハルユキと譚が腰掛けた遊歩道のベンチは、現実世界の住所では杉並区大宮一丁目、そして

加速世界では（杉並第二戦域）と呼ばれるエリアに存在した。

東には新宿エリア、南東には渋谷エリアという（対戦どころ）が隣接しているせいで、どちらかと言えば過疎傾向な場所だ。しかし午後六時から八時にかけてが一日でもっとも盛んに対戦が行われる時間だし、すぐそばの環七沿いには大きなダイブカフェも幾つかあるので、マッタンダリストには少なくとも二十人程度は登録されているはずだった。

長さ一メートル半のXS Bケーブルで論と直結したハルユキは、ワイヤードコネクション警告が現れ消えるのを、背筋をまっすぐ伸ばし両手を膝の上で握りながら眺めた。五つも年下の少女のはうは、まるで表情も変えずに落ち着いた仕草で仮想デスタクトップを操作している。恐らくBBコンソールを起動し、ハルユキ——（シルバー・クロウ）をタッグパートナー設定したのだらう。

【UI】 それでは、対戦相手のタッグは私が適当に選びます。序盤はサボートに回りますので、有田さんの思考がままに戦ってみてください。準備がよろしければ、開始するのです」

「はっ、はい、どうぞぞ！」

乾いた口でそう答へ、ハルユキは話の艶やかな響をじっと注視した。無論ハラスメント行為ではなく、謎の加速コマンドとタイミングを合わせるためである。

しかし、直後、ハルユキは、今まで考えもしなかった一つの疑問と直面した。

四壁宮譚は、運動性失語症に罹病している。肉声で喋れないのだ、その状態で、いったいと

のようにしてブレイン・バースト・プログラムにコマンドを伝えるのだろうか？

答へは、至極シンプルなものだった。

誰は不意に眼を閉じると、眉間に細い谷を割んだ。小さく開かれた唇が、擦撃するように震える。その奥で食い縛られた歯が、きりきりと軋む。額に汗の玉がひとつ、ふたつと浮く。

力技だ。出せない声を、体にむち打って無理矢理に出そうとしている。

やめよう、と叫びかけた言葉を、ハルユキは必死に吞み込んだ。誰が旧ネガ・ネビュラスの四天王を襲れるほどのハイランカーなら、そこに上り詰めるまでに数え切れないほどの対戦を経験しているはずだ。その全てが〈待ち受け〉であるわけもない。つまりこの少女は、途方もなく苦しそうに見えるこの行為を、何度も何度も数限りなく繰り返してきたのだ。

時間にしたら五秒足らずだったろうが、その何倍も長く感じられた苦闘の果てに、誰の唇が二センチほど開いた。続いてすばめられ、更に横に開く。最後にもう一度小さく突る。

パー、スト、ラン、ク。

まったく無音ではあったが、確かにそれらのシラブルを論は生身の口で刺立てみせた。同時にハルユキも、いつになくきこえない動きて、同じひと音を吐いていた。

じつとりと違つた梅雨の湿気が、嘘のように乾いた涼風へと変わり、体を抱てた。

デュエルアバターの鏡面ヘルメットのすぐ下で、ハルユキはばちつと眼を開けた。どの属性のステージに出現したのかを確かめるこの瞬間は、何度対戦を重ねてもわくわくさせられる。

しかし今は、それより何倍も気になることが心を占めていた。ゆえにハルユキは、燃えるような夕焼けと風に揺れる金色の草の海を見るやいなや「草原ステージ」——と認識し、すぐさまぐるりと体を返らせた。

気になること、すなわち四禁百論の操るデュエルアバターの姿を視界中央に捉えた瞬間、ハルユキは息を呑んだ。

ある程度干渉していた通り、かなり小柄だ。しかし、そうと感じさせない重厚なシルエットを持つている。理由は、胴體の下部に長く垂れるシルドと、高い位置の腰から足元までを広がりがながら覆うアーマースカートを備えているからだ。その二つが合わさると、まるで白衣と黒袴——和風の装束のように見える。

そして更に印象的なのは、アバターの上半身と下半身がまるで異なる色彩を持っていることだ。

胴と腕の装甲を染めるのは、彼女のニューロランカーと似た、しっとりとした半光沢のオフホワイト。しかし持状のアーマーは、深さと明るさを併せ持つ密度のある赤だ、初代赤の王（レッド・ライダー）の純粋な赤色とも、二代目（スカーレット・レイン）の透明感のある紅色とも違う。フォルムと同じくどこか和風の——言うなれば（緋）か。

頭部は、現実の頭とよく似ていた。白いマスクの額を前髪状の装甲が覆い、後頭部からは細いスタビライザーが長く伸びる。格と同じ緑色のアイレンズは、可憐ながらもきりりと凛々しい。

ハルユキは、ここまで鮮やかなツートンカラーのデュエルアバターを、かつて見たことはなかった。シルバー・クロウは言うまでもなく全身が銀色だし、他のネガ・ネビュラスのメンバーも基本的に単一カラーだ。塗り分けされたアバターもないことはないが、大抵は同系色の濃淡のみで構成されている。その理由は、アバターの冠するカラーネームリアバターの属性（ポアイの色）だからだ。カラーネームが必ず一単語である以上、表現される色も必然的に一つに限定される——はずなのだが。

しかし今、ハルユキの眼前に楚々と立つ謎のアバターは、下半身にかなり純粋な（透爾の赤）を、上半身に同じく高純度の（特色の白）をまといっている。それぞれの示す属性は、明らかに異なる。この二色を一語で表すカラーネームとは、一体いかなるものなのか。

ハルユキは、強く眼を引きつける和風のアバターから意識して視線を外し、視界左上に二つ

甚おんで表示された体力ゲージのうち、下側のものに付された名前を確認した。

「**Ar dor Maiden**」それが、四禁目録の**アバター**の名だった。

「**メイデン**」は解る。乙女おんなという意味だ。いかにも謙へたに相応ふさわしい名前と言えらるだろう。

しかし肝心のカラーネーム、**（アードー）**と読むのであろう英単語は、ハルユキの自前の臨まうでは聴取に和訳できなかつた。もしここが現実世界なら、単語に視線をフォーカスしただけで翻訳器をポップさせられるのだが、残念ながらブレイン・バーストにそこまでの便利機能は存在しない。どこかで眼にした単語のようにも思えるが、少なくとも中学二年までの英語の教科書に含まれていないのは確実だ。

その名前なんて意味ですか、と訊くのはあまりに問抜けすぎるので断念し、ハルユキは最後に**タフグバートナー**のレベルを確かめた。7——やはり相商に高い。

ここまでの全情報を、三秒ほどを費やして収集したハルユキは、とりあえずべこりと頭を下げて言った。

「そ……それじゃ、よろしくお願いします。がっかりさせないように、がんばります」

顔を上げてから、ハテと思う、ブレイン・バーストには、自動翻訳機能と同じくテキストチャット機能も搭載されていないはずだ。いったいどうやって意思疎通するのだろうか？ 手話？ それともアイコンタクト？

しかし、直後、脳は、ハルユキの眼、いや耳を疑わせる手段で応答した。

「よろしくなのです。それと、突然（突然）奥路にならなくてもいいのですよ、ターさん」

——ターさん？ それって僕のこと？ タロウのク？

いや、気にするべきはそこではない。今、確かに、間違はなく——喋った、誰のアバター（アバター・メイデン）のマスクの口部分が動いて、声が聞こえた。

「あつ、あ、あの!? し、し、しの……じゃない、ええと、こっちでは何て呼べば……」

「（デンデン）以外なら何でもいいのです。昔は主に（メイ）と呼ばれていました」

——Maidenの上半分かな？ いや、今はそれよりも。

「……じゃ、じゃあ……メイさん、その、今、しゃべっ……て……」

驚きのあまりややおしつけな言葉をハルユキは口にしてしまったが、気にする様子もなく話はこくりと頷いた。

「（加速）している間だけ、私はこうして言葉を話せるのです。むしろそれこそが、いまの私がこの世界を訪れるた一つの原因だとも言えます」

その声は、無垢な幼さと清らかさの中に、びんと芯の通った強さを備えていた。ハルユキの現実世界と大差ないガタビシした喋りと比べれば、むしろ圧倒的に滑らかかつ抑揚ゆたかで、まるで声を出す訓練を受けたかのように明瞭だった。

「て……でも、この世界で喋るのって、ニューロリンカーで思考発声するのと同じ仕組みだと思ってたんですけど……」

「詳しい理由は、私にも解らないのです。以前ブラック・ロータスは、量子的意識体との接続深度が違うからだと言っていました」

「は、はあ……僕にも、何のことだかさっぱり……」

首を捻りつつ、ハルユキは改めて語のデニエルアバターの全体像を眺めた。

鮮やかな白と緑色のコンビネーションだけでも美しいのに、和風の衣に袴姿と組み合わせると、まるで魂が吸い込まれるかのようなある種の神聖さすら感じてしまう。いや、それには理由があるのかもしれない。このカラーにこのフォルムの取り合わせは、現実世界にも存在する何かを思い起こさせる。ずつと昔、どこかで見たような……あれは確か、まだ両親が離婚する前、お正月に三人で出かけて……

「あの、ターさん。私をただけ見ても別に構わないのですが」

「……………それで……大きな神社に……初詣に行つて……」

「六月に初詣に行くのも別に構わないのですが」

「お参りしたあと、おみくじを買つて……あれ、僕だけ大凶だったんだよなあ……」

「さつきから、ガイドカーソルが元気に動いているのです」

「確か、勝負ごとは大いに負けあり……って、えっ!?」

ようやく謎の音が意識まで届き、ハルユキは慌てて視界中央にうつすら表示される水色の三角形をアクティブにした。確かに、右から左へと急速に向きを変えている。この矢印が指す先



にいるのは——もちろん、《敵》だ。

なぜなら、この綺麗な草原はおしやべり用のバーチャルスペースではなく、ブレイン・パイストの作り出す対戦フィールドなのだから。

「やばっ……だいたい接近されてる!」

慌てて身構えながら、ハルユキは視界右上の敵タッグを確認した。

一人は、レベルイの《オリーブ・グラブ》。確か緑のレギオンの一員だったと思うが認識はない。

次にもう一人の名前を見た途端、ハルユキはおやっと思った。

《フラッシュ・ウータン》だ、同じく緑のレギオンに所属するレベル3で、こちらとは数回戦ったことがある。しかしこれまでにウータンが移転に現れた時は、彼が《兎責》と素うバイタ使い《アッシュ・ローラー》と常にコンビを組んでいたのだ。

ハルユキは小さく首を傾げたが、すぐに違和感を捨てた。たまには兎責とタイミングが合わないこともあるだろう。それより、ガイドカーソルの振れ幅からすると敵はもう二十メートル以内にまで肉薄している。接触まであとわずか——のはずなのだが。

「……………と、どこだ?」

つま先立ちになり、ハルユキはカーソルの指す先を懸命に睨んだ。しかし、背の高い草がどこまでも風に揺れるばかりで、敵アバターはまるで影も形もない。恐らく、体を限界まで低く

して、草むらの底を泳ぐように移動しているのだ。

きょろきょろしていると、隣で誰か囁いた。

「ターさん、敵タッグは前衛後衛に分かれてくるようですよ。私は後ろのを牽制してますので、前のはお願いします。お手並み拝見、なのです」

そしてすーっと右方向に離れていく。

対戦前の口ぶりでは、長らく隠匿していた誰か今になってハルエキたちの前に現れたのは、黒雪姫の（実禍の體、淨化計画）と関連しているようだった。その計画に協力するか否かを、誰はこの一戦で見極めるつもりらしい。

となれば、棄勝とまでは行かずともせめて快勝くらいは披露しなくてはならないのだが、敵が見つからないのではそれどころではない。左へ左へと螺旋を描いて接近してくるらしい相手は、固もなく十メートルレンジに入るはずだ。そうなればガイドカーソルすらも消えてしまう。いっそう必死に眼を凝らす、ランダムな風に揺れる草むらと、敵が隠らしている草の区別はまったくつかない。

——そうだ、盲だ！

ハルエキはいきなり眼を閉じ、耳に全神経を集中した。敵が草をかき分ける騒音と、風が起こす葉擦れは微妙に音質が違ふはずだ。それを聞き分けるのだ。

二秒後。

「……ぜんぜん判んねー!」

呻き、ハルユキは再度輪を開けた。四方八方から押し寄せてくる、ザザザ……というサウンドエフェクトはまるで同じにしか聞こえない。どこかに微妙な違いはあるのだろうか、識別しようと思つたら並大抵ではない訓練が必要だろう。

眼もだめ、耳もだめ。羽根を使って上昇すれば見つけれられるかもしれないが、まだ必殺技ゲージは空だし周囲に破壊できるようなオブジェクトもない。

地りのあまり歯がみした時、ついに視界からガイドカーソルが消えた。正確にはもう一つ、ごく色の薄いカーソルが残っているが、これは遠距離に留まる敵後衛のもので、今は役に立たない。

前衛——ブラスシュ・ウータンがオリーブ・グラブのどちらかは不明だが、そいつは今半徑十メートル以内のどこかを移動し、シルバー・タロウに先制の痛撃を浴びせんとタイミングを計っている。いっそこちらも草原の底に匍匐してみるという手もあるが、それをするシルバー・タロウ最大の武器である機動力が失われ、掴み合いのグラウンド勝負に持ち込まれてしまう公算が大きい。

もしこれがいつもの対戦なら、このへんで考えることを放棄し、序盤は押されるのを覚悟してゲージを溜めて中盤以降の飛行勝負に賭けるところだ。むしろそれがハルユキの基本的戦法だとも言える。なぜなら打たれ弱くリーチも短いシルバー・タロウは、地上での格闘戦には不

向きだからだ。飛べない間は劣勢で当然――

と、心のとこかで思い続けてきたからだ。

しかし、四葉宮識は言った。ハルユキの実力を見たい、と。

実力とは（ほんとうの力量）のことだ。ほんとうとは、留保や言い訳がないということだ。そして何より、この戦いも、きつと（浄化計画）の成否に直結しているのだ。

――本当に、もう打つ手はないか？ 僕の中には、この状況に対応できるものはもう何一つ残っていないのか？

そう考えた瞬間、ハルユキの胸中に、一つの思考が稲妻のように閃いた。

あの人なら、シルバー・タロウと同じく基本的には近接・高機動型の、黒の王ブラッタ・ロータスならどうするだろうか。もちろん、こんなにアタフタ回りを眺めたりはするまい。きつと一所に悠然と立ち、敵が攻撃してくるその瞬間を待ち受け、一瞬の攻防に全てを賭けるだろう。そう、そうだ。敵も同じく近接型ならば、攻撃の瞬間だけは草むらから立ち上がらざるを得ないはずだ。

もちろん、こちらの初動は遅れる。敵が見えても先手は取れない。しかし、防衛を攻撃に変える技術もあることを、一週間前の直接対戦であの人は教えてくれた。まったく同じようにはできないだろうが、トライして失敗するほうが、諦めてただ立っているより百倍もマシだ。

ハルユキは、全身の力を抜き、瞳を半眼に閉じた。

瞬時に、先週戦った時のブラッタ・ロータスの姿を思い浮かべる。

シルバー・クロウの全力全速の右ストレートを、黒の王はむしろゆったりとした動きで受けた。《速い》のではなく《無駄のない》動作。敵の攻撃力を弾くのではなく引き込み、角度を変え、放つ。そのテクニクが黒の王言うところの《柔法》、すなわち《受け返し》だ。

まったく動いていないにもかかわらず、りいりんと高い音が意識に生まれ、周囲のノイズを遠ざけた。ハルユキの集中が一定のレベルを超えると発現する《加速感覚》だが、これほど力を抜いた静止状態で感じるのは初めてのことだった。

長いのか短いのか判らない時間が経過し、ついに襲ってきた敵の初撃を、ハルユキは音でも姿でもなく踏み込みの振動で悟った。

——右後ろ！

右手を持ち上げつつ体を回す。草むらから伸び上がりつつパンチを放とうとしているのは、周囲に溶け込むダラスグリーンの装甲を持つ小柄なアバター、《フラッシュ・ウィタン》だった。ある種の靈長類を思わせるマスク、窮屈したボディとコンパクトな脚に比べて、四肢が異様なまでに太く、長い。恐らく草むらの中を走るのではなく、この速い腕で《泳いで》いたのだろう。足音がしなくて当然だ。

身長が低いことも、このフィールドでは有利に働く。ハルユキにとって、草むらの底からいきなりパンチが撃ち出されてきたに等しい。相手を視認した時にはもう、巨大な右拳が顔面

数十センチに迫っている。足場が悪いこともあり、回避は完全に不可能だ。

「……ホオオ!!」

初撃ヒットを確信したが、ウータンが高い気合いを放った。対してハルユキは無言のまま、広げた右手で、相手の拳をゆるく受けた。

拳に、敵の右フックの燃えるような威力を感じる。ここで強引にガードしようとしても一瞬で腕が弾かれ、顔面に痛撃を喰らうだろう。そうではなく、相手に逆らわずに自分の動きを融合させ、攻撃の方向だけを変える。要諦は恐らく（円の動き）だ。かつて毎日プレイしていたバーチャル・スカッシュ・ゲームでも、超高速のボールを思い切り打ち返し続けていてはスピードが無限に上がってしまうので、時としてラケットのフェイスで球を包むようにして威力を殺していた。

その動作を思い出しながら、ハルユキは敵のパンチに誘うように拳を反時計回りに動かした。威力を殺しきれず、相手の装甲がびしびしと軋む。しかし同時に、わずかずつパンチの軌道が逸れていく感覚も生まれる。

照雪姫はここから、攻撃ペタトルを百八十度曲げ、ハルユキを真後ろに吹き飛ばしてみせた。そこまでの技術はもろみんない。しかし、左下方向にほんの十度ほど曲げられれば、少なくともクレーンヒットは避けられる。呼吸を止め、歯を食い縛り、慎重に、慎重に、ウータンの拳を回転動作に巻き込んでいく。

——「デッシー」

と小さな接触音が響き、左頬に鋭い熱感が走った。HPゲージが数ドット削れたが、巨大な拳はハルユキのヘルメットに一瞬触れたのみで後方に流れ、同時にウータンの上体が小さくぐらついた。恐らく、腕と肩だけが異様に発達した体格のせいで、立ち上がり攻撃中は重心が高くなりすぎるのだ。

そうと察じた瞬間、ハルユキは無意識のうちに右足を振り出し、ウータンの短い両脚を払っていた。

「ウホオ!?」

悲鳴とともに、草色のアバターがぐらりと回転。そのまま背中から壁むらに落下していく。ざんっ——という衝撃音。背の高い草がクッションになりダメージは少ないようだが、それでもウータンのHPゲージも数パーセントはと凹む。

——できた！ 一応ガードリバーサルっぽいやつ！

内心で一瞬の快哉を叫ぶが、喜ぶのは早い。ウータンは再び草の海に深く潜り、ざざざ……と高速移動する気配だけが届いてくる。もう一度奇襲攻撃を狙っているのは間違いない。緩く腰を落とし、感覚を研ぎ澄ませる。

二撃目は早かった。ほんの数秒後、今度は真後ろから踏み込みの振動が伝わる。振り向く視線より先行して右手を突き出し、何かに触れたと感じた瞬間、外向きの円運動に巻き込む。

ようやく追いついた境界が疑えたのは、左ストレートをいなされて再び重心を崩すウータンの姿だった。強引に拳の軌道を修正しようとしたか、左脚が伸びていつそう体が浮いている。

反射的にハルニキは左手をもウータンのパンチに添え、そのまま肩に背負った。

「せえっ！」

短い氣勢とともに、思い切り投げ飛ばす。先ほどよりも高く舞上がったウータンは、ぐるぐると回転して頭から草むらに突っ込む。天然タッションも今度は衝撃を吸収しきれなかったようで、ダメージエフエクトとともに、ゲージが一割近く減れる。

ブッシュ・ウータンはしばらく草から両脚を突き出していたが、やがて腕力でびよーんと飛び上がり、反転して立った。また滑るかと思いきや、そのまま数歩下がり、びしっとハルニキを指さす。

「ウホホ、さすがはブッシュの兄貴の永遠のライバルでヤンスね！」

思われ台詞に、ばちくりと瞬き。「え……、そ、そうだったの？」とややツレない台詞を口走ってしまうが、幸いウータンは気にする様子もなく再び競ける。

「なかなか妙ちきりんな防御テクを使うじゃないツスか！〈草原ステージ〉でオイラが

F A を取れなかったのは初めてでヤンスよ！でもこれで勝った気になるのは早いでヤンス！立ち技をやめて寝技勝負に持ち込めば、オイラこのステージではマジ無敵！ツスカ

ら！」

「うっ」

それは確かにその通りかもしれない。せっかく開眼した気がする黒雲線直伝の《柔法》だが、原理的に按じれば、関節技には対応できないのだ。草の下からあの豪腕にいきなり脚を掴まれたら、有無を言わず苦手なグラウンド屋風に持ち込まれてしまう。

しかし、焦るハルユキに対して、ウータンは右手の人差し指をチチチと振ってみせた。

「でも、ここで寝技使うとギヤラリーの皆さんに大不評なんスよねえ。何せまったく見えないでヤンスからねー」

その言葉にちらりと周囲を見ると、少し離れた場所までハルユキを見守る四禁宮謡——《アーダー・メイデン》と、まだ遠距離を移動中らしく姿の見えないもう一人の対戦相手（オリー・ブ・クラブ）の他にも、三、四名ではあるが観戦者の人影がある。近くには高い地形は一切ないため、全員同じ草原に立った状態だ。確かにこれでは、ハルユキとウータンが草むらの底でどったんばったん掴み合っても、彼らには何も見えるまい。

「……なら、どうするんだ？ あつ、腕相撲で決めようとか言っても乗らないからな！」

ハルユキが先回りして言うのと、ウータンは広げた左掌に右拳をぱんと打ち付けた。

「おお、そりやいい考えてヤンスね。でも残念ながら、その細ッコイ腕じゃあオイラの見える力コブとは勝負にならないッスねー。っちゅうワケで、今回は、ゲットしたばっかの新ワザを使わしてもらうでヤンスよ!!」

「し、新技!?」

これには身構えざるを得ない。ハルニキの知る限り、ブッシュ・ウータン^{ブッシュ・ウータン}の武器はあの発達した腕腕のパワーと、必殺技ゲージを消費して腕を三倍以上に伸ばすアビリティの二つだけのはずだ。先週戦った時からレベルは3のまま上がっていないので、新しい必殺技や能力を獲得したわけではあるまい。となればポイントで強化外装を買ったが、自分で新戦法を工夫したかだ。どちらにしても要賢^{えいけん}戒^{けい}だ。

腰を落とし、神経を張り詰めさせるハルニキに向かって、ウータンは無造作に近づきながら、いっそう挑発的な台詞を発した。

「ムホホ、この前の領土戦みたくサツタリ勝てると思って乱入してきたなら後悔するでヤンスよ。オイラはもう先週のオイラじゃないんス。見たらビビるツスよ……これが、生まれ変わったオイラの力でヤンス!!」

立ち止まり、大きな動作でぐつと両腕をクロスさせる。一瞬^{ひとしきり}留め、思い切り左右に開く。同時に――叫ぶ。

「(ヘイSモード) 発動!! でヤンス!!」

あ……アイエスモード?

まったく聞いたことのない技名コールに途惑^{とまど}いつつも、いきなり飛び道具が発射されても避^さけられるよう、ハルニキはいっそう神経を張り詰めさせた。

しかし、続いた現象は、あらゆる子嗣を裏切るものだった。

ブラシユ・ウータン、草色の胸部装甲の中心に、ぼこっと舌を立てて奇妙なモノが浮き上がった。それは、直径五センチほどの黒い半球だった。深い光沢があるが、金属質ではない。プラスチック、いやいつそ生物を思わせる、濡れたような輝き。

直後、その印象が正しかったことが証明された。半球の表面が、まるで喉を開くように、中央から上下に割れたのだ。出現した《眼》は、血を思わせる深い赤色の光を噴し、じっとハルユキを凝視した。

直後――。

ぐわっ！ と凄まじい圧力がブラシユ・ウータンの全身から放たれ、周囲の草が放射状に倒された。続いて、胸の《眼》を中心に黒いオーラが放たれ、ウータンの全身を包み込んで高々と進った。十メートル近い距離があるのに、ハルユキのボディ表面にもチリチリと突き刺すようなプレッシャーが伝わってくる。

濃い影のようなオーラをまとったウータンは、異様にギラつく肉眼でハルユキを見据えると、何の躊躇いも見せずに正面から突っ込んできた。雄叫びとともに右拳を大きく振りかぶり、まったく聞き覚えのない技名を高らかに発する。

「ホオオオオオオオ……………《タータ・ブロウ》!!」

ズウウウ、と重々しい振動音を響かせ、拳がいつそう分厚く闇に覆われる。そのパンチが、

巨大な鉄球を思わせる圧力を振りまきつつ、ハルユキに迫る。

「くっ……」

先ほどと同じく、〈ガードリバーサル〉を仕掛けようと思えば可能なタイミングだった。しかしハルユキは突如とも言われぬ事態に襲われ、とっさに回避に切り替えた。思い切り左に飛び、からくも拳を避ける。

直後、カウンターで反撃を入れることすら忘れ、ハルユキはこぼれんばかりに眼を瞢った。空振ったウータンの拳が、自らの足元に突き刺さるや——地面を、密生する草ごと、あたかも岩石が衝突したかの如くこっそりと吹き飛ばしたのだ。

本来、対戦ステージの地面というのは、建物や岩と違いそう簡単に破壊できるものではない。なのに、たった一撃であれも深いクレーターを穿つとは、尋常な威力ではない。仮に受け返しを試みていたら、あのパワーを片手で受ける羽目になっていたところだ。

——なんだあれ!? 必殺技……いや、強化外装か!?

無言の驚愕を漏らしながら、ハルユキは反射的に、ウータンのHPゲージの下に表示される細い青ライン——必殺技ゲージを確かめた。

そして、これまでに倍する衝撃に打たれ、喘いだ。

必殺技ゲージが、まるで減っていない。いや、そもそもほとんど溜まってすらいらないのだ。

なのにウータンの全身からは、赤い燐光を帯びた黒いオーラが溢れんばかりに放射されている。

ゲージを消費しない継続的発光。その現象を説明する言葉は、加速世界には一つしか存在しない。

すなわち（過剰光）、ノーマルな運動命令系の裏に隠されたもう一つのアバター操作経路、《イマーシブ制御系》を強力なイマジネーションが進める時に溢れた信号が、光として処理され、眼に見える。

ここに至って、ハルニキはようやく《ISモード》が何なのかを悟った。

《インカーネイト・システム・モード》の略に違いない。使い慣れた言い方をするならば《心意モード》だ。いまウィータンの体を纏っているオーラは、禁断の力たる心意システムが発動中であるという証なのだ。

だが、いったいなぜ、心意システムを教わる時は真っ先に、一般対戦での先制使用は最大の禁忌だと叩き込まれるはずだ。それ以前に、あの胸に貼り付いている黒い目玉は何だ。心意は使用者の心の中からだけ生まれる力だ。あんなオブジェクトを統制する必要はないはずだ。

極度の混乱に見舞われたハルニキは、漆黒のオーラを纏すウィータンが、再び真正面から突っ込んでくるのにすぐには反応できなかった。

「グ……ホオオオオッ!!」

低い濁音の振る地叫びとともに、右拳が大きく振りかぶられる。ようやくハッと眼を見開くが、もう左右への回避は間に合わない。危険を察いほど感じつつも、やむなく《柔法》で対

出すべく、開いた左手を突き出す。

「ホオオッ……（ターク・プロウ）ッ!!」

ウータンが、先ほどと同じ姓名発声とともに、轟然と拳を繰り出した。

いっそう強烈な過剰光を激き散らすその拳を、ハルユキは手で受けた。

凍るように冷たい、と感じたのもつかの間――

甲高い破砕音を放って、シルバー・タロウの左手が、無数の金属片と化して呆気なく吹き飛んだ。

「ぐあっ!」

銃弾痛覚が抑えられている一般対戦フィールドなのに、まるで神経系を引きもぎられるような激痛を覚え、ハルユキは叫いた。しかしウータンの拳はそこで停まらず、顔面めがけて突き進んでくる。

懸命に首を捻ってかわそうとしたが、ヘルメットの左側面を太い親指の角が挟んだ。再び、焼かれるような熱感。巨大な圧力に弾かれ、背中から草むらに叩き付けられる。

肘の先から欠損した左腕と、ヘルメットに刺まれた深い傷から青白い火花を散らして転がるハルユキを見下ろし、ウータンは重々しい動作で右手を引き戻すと、おもむろに左拳を高く振りかざした。

どこかユーモラスなマスクに光る両眼には、先週の対戦で――いや、ほんの数秒前までの

彼が浮かべていた、対威に熱中する生き生きとした輝きはなかった。ただ、ハルユキを叩きのめし、破壊し、屈服させることの興奮だけにギラついているように見えた。

三度、粘着質な闇のオーラに覆われた左拳が襲いかかってくる。ハルユキは必死に背中を浮かせるも、倒れたまま両の金属翼を展開し、十枚のフィンを全力で振動させた。

コンマ一秒前までハルユキの胴体があった草むらとその下の硬い地面を、ウーダンの拳が深々と貫いた。血も凍るような思いでそれを見ながら、ハルユキは懸命に距離を取り、上昇に転じた。二十メートル以上も高く舞い上がってから、ようやくホバリングする。

状況が、まだ呑み込めなかった。いや、事実を認めなくなかった。ヘルメットの下で固く強張る口をどうにか動かし、言葉を押し出す。

「……う、ウーダン……なぜ……その技は、いったい……」

答えは――。

上空のハルユキに向けて突き出された、巨大な右手だった。低く潰れた唸り声が、マスクの口もとから漏れる。

「……飛んでも無駄でヤンスよ……」

一杯に開かれた五指の中央に黒いオーラが集まり、凝縮した。直後、そこか垂直にエフェクトを浴びた叫び声。

「〈ターク・シロット〉II」

凄々しい振動音とともに、ウータンウータンの掌てのひらから漆黒のビームが撃ち出された。

最早驚くという段階すらも超え、ハルユキは迫り来る闇の大楯を呆然と眺めることしかできなかった。無意識のうちに片翼が震え、ビームの軌道から逃れんと空中でスライドしたが、間に合わず――。

ぱつ、と鋭い衝撃とともに、左の翼が中央から貫かれた。金属フィンが、銃に撃たれた鳥の羽根のように俤く散った。推力のバランスが崩れ、立て直す暇もなく地面に墜落する。

下が分厚い草むらでなければ、この時点で体力ゲージは赤くなっていたであろう。それでもすでに五割近くはまで凹んだゲージをちらりと眺め、ウータンウータンの心意技の恐るべき威力に戦慄しながら、ハルユキはどうにか上体を持ち上げた。

ざ、ざ、と草を踏みながら近づいてきたブッシュ・ウータンは、ハルユキのすぐ前で立ち止まると、にやりと顔中で笑った。

「……………どうでヤンスか、オイラの新技のパワーは。すげえつスよね？　もうカンペキ無敵でヤンスよね……………」

胸の中央では、深紅の（眼）がどくん、どくんと光を脈動させている。その鋭えたような視線を感じながら、ハルユキは切れ切れの掠れ声で訊ねた。

「ど、どうして……………いたい、どうやって、その力を……………」

冷静に考えれば、誰かに心意システムの使い方を教わったのだとは思えない。かつてハル

ユキがスカイ・レイカーに、そしてタタムが赤の王スカイレット・レインに心意の要諦を伝授されたように。だが、どうしても一つだけ納得できないことがある。

心意システム四種の力——すなわち《射撃》《移動》《威力》《防衛》拡張の各能力は、もとのアバターの属性と合致するものしかマスターできない。それが大原則だとニコは言った。しかし観前のブラッシュ・ウータンは、カラーサークル上では《遠隔の赤》の対極に位置する《防衛の緑》に属しているのに、空中のハルユキを遠距離ビーム攻撃で落としてみせた。明らかに《射撃拡張》の心意技だ。しかもその直前には《威力拡張》のパンテ技をも使った。この二つの心意の両立は有り得ない。達人たるニコですら、自分の属性と反する《威力》《防衛》の心意は使えないと認めたのだ。

理解の遠く及ばぬ事実を前に、ハルユキは尻餅をついたまま、ただ眼を見開くことしかできなかった。

対峙するウータンは、長く逞しい腕をだらりと降ろした格好で、ちらりと自分の胸に貼る付く《観球》を眺めた。口が動き、子供が内緒話をするかのような、やけに熱のこもったひそひそ声が流れる。

「……言ったてヤンしょ？ ゲットした……知り合いに貰ったんスよ。この《ISSモード練習キット》……略してISSSキットをね」

「も……貰った？ ISSSキット……だって!?」

いっそう思いがけない説明に、呆然と嘆く。

練習キット、という言葉そのものには大いに聞き覚えがある。現実世界の色々な教育関連企業が、子供向けにありとあらゆる分野の商品を販売しているからだ。ピアノ練習キット。鉄棒練習キット。自転車練習キット。それらをニューロランカーにインストールすると、フルダイブ環境や拡張現実環境で、仮想インストラクターの丁寧な指導を受けることができる。ハルユキ自身、かつて（しゃべり方練習キット）などという代物にお世話になったという、ちよつと人には言いたくない過去がある。

だが、まさか現実の企業が、加速世界で（心意システム練習キット）を売り出したりするはずがないし、そもそも心意の力は、そんなインスタントな方法で身につけられるものではないはずだ。それに、ウータンはキットを買ったのではなく知り合いに貰ったらしい。恐らく、誰か他のパーストリンカーが、アッシュ・ウータンに「これで心意システムが練習できる」と言っただけの賄い目玉を譲渡したのだ。

では、誰に貰ったのか？ まさか……、まさか。

「それを……その（ISSキット）を君にくれたのは……アッシュ・ローラーか……？」

ハルユキが恐る恐る訊ねると、ウータンは一瞬奇妙な表情を作り、やがて首を左右に振った。

「……違うてヤンスよ。アッシュの兄貴には……まだ内緒っス。こういうの……兄貴は、あんな

もし好きじゃないかもでヤンスから……」

それを聞き、ひそかに胸をなで下ろす。アッシュ・ローラーは、親であるスカイ・レイカーから、ごく初歩的ではあるが心意の手ほどきを受けている。そんな彼が、ISSキットなどという怪しいモノに手を出すはずがないのだ。

だが、ほっとしたのもつかの間、ブラッシュ・ウィーダンが、ハルユキに顔を寄せると、いつそう熱っぽく囁いた。

「……でも、オイラがこのキットでがんがん強くなれば、兄貴もさっと喜んでくれるはずッス。タロウさんもそう思うッスよね？」 一週前はタロウさんにぼこぼこにやられたオイラが、
 「ISSモルド」で仕舞ってきたって知ったら、兄貴も大喜びッスよね？ ギガ・タ——ル！
 って言ってくれるッスよね……？」

「……………」

ウィーダンの丸い両眼に宿る、ギラギラとした興奮の光を間近に見て、ハルユキは鋭く息を吸い込んだ。反射的に大きくかぶりを振り、答える。

「……もち、違う。それは違うよ。ISSモルド……いや、心意システムの力は、そんなキットで身につけていいもんじゃない。まず、自分自身の《傷》と向き合って……力の意味と、その源を知るところから始めなきゃだめだ。さもないと、心意の暗黒面が、逆に君自身を呑み込んでしまおう……」

「脱獄タスか」

という、吐き捨てるようなウータンの一と一言に、ハルユキは絶句した。覆い被さるようにマスクとマスクを接近させ、ほんの数分前までは陽気なお調子者だったはずのパーストリンカーは、低く覆れた声で言った。

「……クロウ。その口ぶりなら、あんたもこの《力》についてちよつとは知ってるみたいタスけど……でも、先週のレースに出てたんだから、あんたはその体で感じたはずタスよ。乱入してきた十号機が、《ISSモード》の力でオイラたちのシヤトルと、何百人のギヤララーたちまでを一瞬でボロボロに錆びさせたのを、ISSモードには、あんなとてつもないパワーがあるんス。ブレイン・パーストのルールそのものをぶっ飛ばすような、究極の力が。それを知って、ずつと隠してた汚い奴らがいるんスよ。それなのに、いまさら力の意味なんて気にして、なんの役に立つんスか？ いや、それどころか……もしかしたらあんたも昔から、ちよこちよこ対戦でこの力を使って、小ずるく勝ってきたんじゃないタスカ……？」

大蛇のように伸びてきたウータンの右手が、ハルユキの喉もとをガツと掴む。そのまま、圧倒的な背力で引つ張り上げる。ごく至近距離にあるウータンの、本来緑色のはずの服の奥には、間期的に赤黒い光が瞬いてる。その脈動が、胸に埋まる《ISSキット》の眼球に宿る光と完全に同期していることにハルユキは気付く。

「強くなきゃ、意味ないんスよ。強くなきゃ、勝率も極げず、レギオンじゃ下っぱのまんまで、

そのうちポイントが枯渇して、人知れず加速世界から消えるんだ。(飛行アビリティ)なんてレアな力を最初っから持ってたあんたには、オイラたち負け組バーストリンカーの気持ちなんて解(わ)らないかもツスけどぬ」

——解る。僕はその痛みを誰よりも知ってる。僕は自分が勝ち組だなんて思ったこと、現実世界でも加速世界でも、ただの一度もない。

ハルユキはそう言いたかった。しかし口を開くよりも早く、ブッシュ・ウータンが軋(こ)るような言葉を繋げた。

「……でも、この(ISSキット)は、負け組でも強くしてくれる。いや、負け組なら負け組なほど強くなるんだ。あんたも見ただろう？ まだ貰(もら)って三日しか経(か)ってないのに、オイラはもうこんなに上手(うま)く(ISSモード)を使いこなせる。この力があれば、近接型にも遠隔型にも負けない。オレを馬鹿にしたレギオンの奴(やつ)らにも……兄貴、いや、ブッシュ・ローラーにも勝てる。強い……そうだ、オレは強いんだ!!」

声色(しんせき)だけでなく、いつしか口調すらも大きく変化していた。

シルバー・クロウの喉(のど)を掴(つか)んだ右手を高々と持ち上げ、ブッシュ・ウータンは吼(こ)えるように叫んだ。

「強い……オレは強い！ もうタフダパートナーも必要ない！ (オリブ・クラブ)、この対戦が終わったら、お前とも決着をつけてやる！ オレとお前の(ISSモード)のどっちが強い

か解らせてやるからな！　どこだオリーブー！　オレがこいつを仕留めるところをちゃんと見ておけ!!」

不可解極まる状況と、ブッシュ・ウータンのおまりの実情に思考がついて行けず、痺れたような意識の中でハルユキはぼんやりと考えた。

オリーブ・クラブは、この対戦におけるウータンのタッグパートナーの名前だ。緑のレギオンの仲間同士なのだろうが、口ぶりからしてオリーブのほうも「E.S.Sキット」を手に入れているらしい。つまり、ハルユキが喰らったような驚異の「金属性心意」をオリーブも使えるはずだ。となれば、そちらと相対しているはずの四葉宮論はどうなったのか。まさか、同じようにひとたまりもなく倒されてしまったのでは……。

ハルユキが、視界上部の体力ゲージを確認しようとしたその寸前、右方向から足音が聞こえた。嗚嗚に顔を向ける。

冷たい風に揺れる草原をかき分け、見知らぬデュエルアバターがゆっくり近づいてくるところだった。

装甲は、名前の通りの褐色がかった緑——オリーブ色だ。全身は木の枝のように細いが、両手だけは不釣り合いに大きい。そして胸の真ん中には、ウータンと同じく濃黒の半球が貼り付いている。

しかしその瞳はほとんど閉じられ、内部の「眼」がごく細く露出しているだけだ。赤い光も

不規則に明滅し、今にも消え去りそうに思える。

よくよく見ると、オリーブ・クラブ本体の歩みもやけにぎこちなかった。頻繁に（ワグワグ）そのたびに危うく踏みとどまって、どうにか前進する。まるで——何かから、逃がっているかのようだ。

「……オリーブ？」

怪訝（ワグワグ）そうなウータンの声に、細身のアバターはぎこちなく顔を上げた。縦に長いマスクに切られたスリットの奥で、二つの眼がいっばいに見開かれていた。

「……………ウータン……………た……………助け……………」

漏らしかけたしわがれ声が、びたりと中断する。さっと後方を振り返り、怯（おそ）えるように右手を突き出す。木の根を思わせるこつこつとした指を、薄（うす）い影のようなオーラが取り巻く。

「た……………（ターク・シヨ……………）」

発声された技の名前を、とすつ、という軽い音が（ワグワグ）通った。

それは、いずこから飛来した、全体に火炎をまとった細長い棒——すなわち《火矢》が、オリーブ・クラブの左胸を貫いた音だった。

直後、アバターの全身が呆気（アタ）なく砕け散り、消滅した。体力ゲージがゼロになったのだ、ハルニキは反射的に、視界上部の四本——いや、今はもう三本になったバーを確認した。

ブッシュ・ウータンの体力ゲージは、残り八割強。シルバー・クロウのものはほぼ半減して

いる。そして、ハルユキのバートナーである四壁宮謡——（アーダー・メイデン）のゲージは、封戦開始時のまま、一ドットたりとも減っていないかった。

あの（眼）、ウータン言うところの（ヘーSSキット）がオリーブ・グラブの腕にも出現したので、アーダー・メイデンも間違ひなく先制の心意攻撃を受けたはずだ。事実、オリーブはいまわの際に、ウータンが使ったのと同じ遠距離技（ターク・ショット）を放とうとした。あれが最初で最後の攻撃ではあるまい。なのに、メイデンがかすり傷さえ浴びていないのはどういうことなのか。

呼吸すらも忘れ、ハルユキはオリーブが消えた位置から、ゆっくりと視線を持ち上げていった。

二十メートル以上離れた場所に、白衣と鎧持の二色をまとうデュエルアバターの小さな姿があった。全身の装甲は、一点のくすみもなく輝いている。しかし、華奢な左手には、開始時にはなかったものがそっと握られていた。ほとんど身長と同じほどもありそうな、細長い棒。上下部分がゆるく湾曲し、その両端を細い弦が繋いでいる。つまり——弓だ。

アーダー・メイデンは、片手片翼を失ったシルバー・クロウと、その喉節を覆って吊し上げるブッシュ・ウータンを、涼しげなアイレンズで一瞥した。

左手が動き、長大な弓をゆるやかに持ち上げる。空の右手が弦に添えられ、軽く引く。

直後、それまで何も存在しなかった手元の空間に、赤々と燃え上がる細線——火矢が出現し

た。びんと背筋を伸ばし、右腕を高く掲げて、瞳は惚れ惚れするほど美しい動作で弦を引き絞っていく。

時が止まったかのような、一瞬の静止。直後、ふっと右手が閃き、同時に素早く左手首が返された。

唸りを上げて飛来した火矢は、ブツシュ・ウータンの右前腕に深々と突き立った。

「ウタ……………」

声を上げ、ウータンはハルユキを振り落とすと、左手で炎の矢を引き抜いた。直後、矢は空中に燃え落ちてしまう。だがそれまでに、ウータンのゲージは一部以上も減少している。

火矢の威力と精準の正確さもあることながら、ハルユキは、そして恐らくブツシュ・ウータンも、アーダー・メイデンが弓を射る姿の凄々しさに吞まれ、動けなくなってしまう。ざわざわと揺れる草の海を、和風のアバターは滑るように近づいてくる。サイズだけを見ればこの場の誰より小さいのに、まるでそれを感じさせない圧倒的な存在感がもりもりと空気を焼く。ニコの言葉を借りれば、〈信じられないほどの情報圧〉だ。

ハルユキとウータンのすぐ近くまで歩いてきたアーダー・メイデンは、長弓を両手で水平に下げ持つ、あどけなくも凛々しい声で言った。

「予想外の展開なのです。そちらの勝負がつくまで抑えておくだけのつもりが、オリーブさんを倒してしまわなくてはなりませんでした」

まるで、無傷での勝利が実策だったかのようにそつと首を振る。続けて、思案するような顔で、

「(「ISSキット」)……そんなものが無制限に流通しているとすれば、容易ならざる事態なのです。速やかに配布元を突き止めるなくては……」

顔を上げ、峻烈な面睨でしつとウータンを見て、語は言葉で真つ向から斬り込んだ。

「ブッシュ・ウータン、あなたにそれを渡したのは誰ですか？」

草色のアバターは、気圧されたかのように一步、二步と下がった。精神恍惚と流動しているのか、胸の(眼球)の光が不規則に明滅し、全身を覆う黒いオーラも各所で激しく揺らぐ。

ウータンは、何度か左右に首を振りながら、掠れた声で答えた。

「い、言えない……でヤンス……。オイラ、言わないって、約束したんスよ……」

「そうですか。約束ならば仕方ないのです」

語はあつさりと頷き、尚も強い視線でまっすぐウータンを射貫きながら、次の問いを発した。「断言しますが、その方はあなたから、与える以上のものを奪います。ブッシュ・ウータン、もしあなたが望むなら、私のアバター属性である(喪)は、あなたに寄生するその異物を浄めることができます。今ならまだ間に合います。残念ながらオリーブさんには拒否されてしまいましたか……あなたはどうしますか？」

その言葉が内包する事実の重大さに、ハルキはすぐには気づけなかった。

一秒以上経ってから、ようやく両眼をいっぱいに見開く。

寄生する異物を浄めることができる。誠は確かにそう言った。だが、そんな能力はおいそれと宿るものではない。以前、黒雪姫と親子が話していたではないか、寄生属性を持つオブジェクトを解放できるのは、稀少な《浄化能力》を持つ者だけだ、と。

それでは――四葉百論、《アーダー・メイデン》こそが、その浄化能力者なのだ、黒雪姫の立てた、《災禍の浄化計画》の要、ハルユキに取り憑くクロム・ダイザスターの因子を取り除く者。

左腕と左翼の痛みも忘れ、ただ立ち尽くすハルユキの目の前で、誠はウータンを促すかのように小さく首を傾かせた。

数メートル離れた場所で、ブラシユ・ウータンはいつそう黒いオーラを溜めさせ、弱々しく呟いた。

「お……オイラ……オイラは……ただ、強く……兄貴みたいに……強く……」

一歩、前に出る。両腕をだらりと下げ、小刻みに震えていた頭が、確かに傾きを返そうとした――その、寸前。

胸の眼珠が、ほとんど真円近くまで瞳を開いた。純い赤色が重しく脈打つ。そのパルスに同期して、ウータン自身の眼にも赤い光が宿る。まるで、ただのオブジェクトであるはずの眼珠が、ウータンの精神に干渉しているかのようにハルユキは感じる。

「……………だめだ……………この力はオイラの……………オレの力だ……………オレの強さ……………」

声は徐々に低くなり、歪みを帯び始める。全身のオーラも再び厚みを増す。緩く開いていた両手が、ぐっと巨大な拳を握る。

「誰にも渡さない……………盗む気だな……………オレから取り上げる気なんだろう……………だめだ……………だめだ……………」

うわごとのように唸り続けていたウータンが、いきなりぐわっと上体を持ち上げた。両眼と胸の三箇所から、暗赤色の光が細い槍となって迸る。

「オレの力、オレの（E.S.モード）だ！ 盗む気なら……………こうしてやる!!」

闇のオーラを凝縮させた右拳を高々と振り上げ。

「オオオオオオ……………（ダーク・プロウ）ッ!!」

ブラシュ・ウータンは、自分よりいつそう小柄なアーダー・メイデンを、真上から叩き潰そうとした。

「あつ……………」

ハルユキは反射的に、その拳の下に飛び込まんと踏み出した。だがそれより早く、すつと持ち上げられた諭の左手がハルユキの動きを制した。

同時に、何も持たない右手が頭上に掲げられる。ウータンの巨岩のようなパンチに比べれば、その五指は脆く出たばかりの若芽のように細い。止められるはずがない、とハルユキは思った。

だが。

瞬間、アーダー・メイデンの右手が、仄かなオレンジ色に輝いた。炎だ、凄らかに遠き通った火炎が、小さな手を覆っている。

降り注ぐ剛拳が、草薙な掌を粉碎する——その寸前で、ガアアアアン!! という凄まじい衝撃が生まれた。インパクトの圧力が押し寄せ、ハルユキと周囲の草を大きく揺らす。だがそれを意識すらせず、ハルユキはただただ呆然と眼前の光景を眺めた。

ウータンとメイデンの手は、血接には触れていない。五センチほどの間隙の中で、黒いオーラと透明な炎が激しくせめぎ合っている。その周囲では、白いスパークが眩く弾ける。両者のイマジネーションが、互いを（上書き）せんと争っているのだ。つまりウータンの心意攻撃を、メイデンが自らの心意で防衛したということだ。

しかし、両者の様子には大きな差がある。ウータンが剥き出しの怒りと殺気で顔を歪めているのに対して、誰はただただ静かに右手をかざしている。その表情は、どこか真切ですらある。不意に、ハルユキの印象を裏付ける言葉が、静かに流れた。

「フッシュ・ウータン。あなたは考え違いをしているのです。心算……あなたの言う（I Sモード）の力は、誰かに貰ったり、誰かから奪ったりできるようなものではありません。それは、自分の心の中から生まれる、自分の似姿なのです」

「……ようるさい、うるさいうるさい！」

ウータンは喚き、左拳をも振りかぶった。

だが、それが叩き付けられるよりも早く、誰の右手の炎がわずかにその勢いを強めた。
 途端、いままでの均衡はあつてなく崩れ去った。ウータンの拳が激しく弾き飛ばされ、体ごと後方の草むらに倒れ込む。

圧倒的な強度差だった。誰が用いた心意は、おそらく《防御拡張》に分類されるものだろう。赤糸のアバターには本来使えないが、使えても苦手を力のはずだ、にもかかわらず、《透刺光》だけであの剛拳を弾くとは、いよいよ只者ではない。

アーダー・メイダンの底知れなさを、ブッシュ・ウータンも感じたようだった。もう一度殴りかかろうとはせず、そのまま草の海に潜る。ざざざ……という音が円を掻き、やがて風が起す無数の葉擦れに密着して消える。逃げたのではなく、恐らく遠距離から、ハルユキを落とし、周囲のビームを溶びせてくるつもりだろう。

「……う、じやないメイさん、あいつは飛び道具で攻撃する気ですー」

ハルユキが慌てて囁くと、誰は軽く頷いた。数歩ハルユキに近づき、くもりと周囲を見回す。再び、遠とした声が草原に流れる。

「ブッシュ・ウータン、あなたが知らないことはもう一つあるのです。心算攻撃を行うならば、一つの大きな覚悟を決めなければならぬ。それは、相手の心意で反撃されるかもしれない、ということですよ」

言葉を切り、諭はちらりとハルユキを見ると、まったく何気ない口調で囁いた。

「ターさん、一度だけいいので、ウータンさんの攻撃を防いでください。私の心意技は発動にちょっと時間がかかるのです」

「わ、わかった……って、ええ……!?」

咄嗟に引き受けてしまってから、ハルユキは狼狽した。発射点の見えない遠距離攻撃を防ぐというのは、そう容易いことではない。と言うよりほとんど不可能と考えていい。

しかし、諭はすでにハルユキから視線を外し、精神集中を開始していた。ゆるく両脚を開いて立ち、眼をつぶる。全身を、柔らかな炎に似た過剰光が包み込む。

突然そのアバターに、思いがけない変化が訪れた。

顔の両側に垂れ下がる髪状のパーツの下から、じやかっ！と音を立てて追加装甲がスライドし、マスク全体を覆ったのだ。滑らかな曲線を持つ真っ白な装甲には、上向きに弧を描く細いアイラインだけ存在する。まるで《仮面》——いや、それそのものだ。

新たな顔に刻まれた眼は、角度によって柔和にも冷酷にも見えた。少なくとも、本来のマスクのあどけなさはもう欠片もない。

次の変化は、左手に纏られた和弓に発生した。

全体が炎に包まれたと思った瞬間、長さが一気に数分の一にまで縮まる。燃え上がる短い棒になってしまったそれを、諭は右手に持ち替えてまっすぐ前へと差し出す。銃か何かか、と

ハルユキが推測した、その途端。

ばん、と鋭切れのいい音が響き、棒が根元を中心に薄べったく展開した。扇形のそれは、見た目とおりの（扇）だ。飛び道具どころか、武器ですらない。なんてせっかくの弓を扇子にしちやうの！ と叫びたくなるが、今更集中の邪魔はできない。

やむなくハルユキは、自分が何か何でもウータンとのビーム攻撃を防がねばと覚悟を決め、視線を周囲に送らせた。

ウータンの過剰光が鮮やかな原色ならば、密生する草を通しても視認できたかもしれないが、黒いオーラは夕闇の底に溶けてまったく見えない。相違わらず足音も一切聞こえず、これでは発射点の特定は、パンチ攻撃を察知するよりも数倍困難だ。

——いや、たとえ移動音は消せても、ウータンは攻撃前にたった一度だけ余計な音を発さなくてはならないはずだ。すなわち（技名発声）である。ノーマルな必殺技と違って、心霊技には必須ではないが、発声によるイマジネーション・トリガーなしでの即時発射は相当な高等技術だ。（「ささキット」）を手に入れて数日のウータンには、そこまでの技術はあるまい。

ハルユキは、右手の指先をびんと伸ばすと、聴覚だけに全知覚力を傾けた。

風鳴り、葉擦れ、あらゆるノイズを意識から排除する。数分前の記憶に残る、ウータンの叫び声だけをひたすらに待ち受ける。

長い、長い数秒が過ぎ——ついに、それがハルユキの知覚に触れた。

「（タ……）」

瞬間、かつと両眼を見開き、ハルユキも叫んだ。

「（光線剣）」「（……ーク・シヨット）」「」

二つの心意技の名は、ほぼ同時に響いた。

右後方から、アーダー・メイデンを狙って発射された闇のビームに向けて、ハルユキは右手を鋭く切り上げた。指先から、銀色のオーラが剣となって長く伸びる。切っ先が、濃黒のオーラに触れ――

ギョアアッ！ という耳をつんざくような衝撃音とともに、軌道を上に逸らした。ビームは誰の肩口ギリギリを擦れ、危ういところを夕空へと消え去った。彼方で立ち上がったウータンのマスタに、驚きの色が走る。しかしアバターはすぐに再び草原に没し、高速移動で姿を隠す。

誰に指示された（一度の防衛）はなんとか果たせた。だが心意技は必殺技ゲージを消費しない。正確には、《精神力》という見えないゲージを消耗させるが、ウータンの戦意はまだまだ衰えないようだ。数秒後にも、二発目のビームが襲ってくるに違いないのだ。

とうとういいのか解らなくなり、ハルユキは傍らのアーダー・メイデンを見た。

小柄なアバターは、顔に仮面を装着したまよ、右手の扇子をゆるやかに動かしている。その動きは、まるで舞のようだ。



と思つた瞬間、ハルユキの強い記憶がちりちりと刺激された。

どこかで、こんな光景を見た気がする。そう、幼い頃に両親と初詣に行つた大きな神社で、何かの舞台を見たのだ。玄妙な音楽が流れるなか、白い衣に赤い袴を着けた女の人が、扇子を片手に舞っていた。まさしく今の謡の姿そのものだが、幾つか違いもある。昔見た舞台では仮面など着けていなかったし、動きも謡のほうがダイナミックだ。緩急が大きく、要所でびしりと止まるその舞は、見事と謂うよりない。

もう今にも発射されるかもしれないビーム攻撃のことほとんど忘れ、ハルユキはアーダー・メイデンの動作に見入った。

不意に――仮面の口もとから、朗々とした声が流れた。叫んでいるわけではないのに、まるでステージの端から端まで響き渡るかのような、透明かつ強靱な「歌」。

「（少し涼しき二熱の）」

突然、見渡す限りの草原が、ゆらりと揺れた。陽炎、いや火だ。謡の全身を包む仄かな炎色と同じ輝きが、ステージの隅か枝方までを覆っている。これは心意の光、つまり「通照光」のはずだが、範囲があまりに広い。先週の（ヘルメス・コード縦走レース）を破壊したラスト・ジグソーの空間侵蝕型心意技（第びる秩序）すらもあるいは上回るのではないか。

息を呑むハルユキの耳に、続く声が高らかに届いた。

「（苦しみを免るそれのみか）」

世界が——燃えた。

こう、と天にも届かんばかりに紅蓮の炎が八方から吹き上がり、周囲の草原を一瞬で焼き払っていく。ステーション全体が赤々と輝き、無数の火の粉が星のように夕空を流れる。

謎を中心とする半径二メートルばかりの空間だけは保護されているらしく、火炎は侵入してこなかった。しかしハルユキは、全身を焦がすような高熱を錯覚し、激しく喘いだ。

アーダー・メイデンが、ゆるやかに扇子を動かす。その光で火炎がいつそう猛々しく渦巻き、草どころか假想の地面までもを焼き尽くしていく。

と、炎の幕を透かして、小さな影が見えた。

ブッシュ・ウータンだ。全身が火炎に包まれ、両手はすでに燃え尽れて存在しない。

だが不思議なことに、当人はほとんど熱を感じていないようだった。炎の柱となった自身のアバターを、不思議そうに見下ろしている。ハルユキは反射的に右上の体力ゲージを確認したが、それは恐ろしい勢いで減少中だった。早くも残り三割を下回り、火炎よりも濃い赤に染まったゲージは留まることなく闇られていく。二割。一割——そして、ゼロに。

人型の炎が、ぱつと一際眩しく輝き、消えた。

呆然と視線を戻し、ハルユキは謎を見た。

小柄なアバターは、尚もしなやかに舞っている。その姿をただただ無言で見つめながら、ハルユキは幾つかの疑問に答えがもたらされるのを感じていた。

《メイデン》の訳語は、乙女^{おとめ}だけではない。袖に仕える女性という意味も含んでいる。白と赤の装甲色^{さうこうしき}が、神社を連想させたのも当然だ。これは《巫女^{みこ}》の姿そのものではないか。

そして《アーダー》が意味するのは、炎^え、《ファイア》よりも熱く、《フレイム》よりもなお激しい《劫太^{せつた}》だ。

アーダー・メイデン。

すなわち、劫火の巫女。

六月十八日、火曜日。

シリアルに牛乳をかけたいつもの朝食をさぶさぶと食べ、母親の寢室に行つてきますの声をかけたハルユキは、足早に自室を出た。

今日は久々に太陽が顔を出しているものの、空気はべっとりとして濡っている。この時間から不快指数はうなぎ上りで、ちよつとでも運動すればたちまち汗が吹き出してくるのは必至だが、それでもほとんど小走りでマンシロン前の幹線道路を目指す。

別に遅刻しそうなわけではない。急いでいる目的は学校ではなく、通学路の途中にある、環状七号線に出たハルユキは、いつもなら右に曲がる角をスルーしてそのまま広い歩道を南下し続けた。

中央線の高架を潜り、ゆるやかな坂を登る。数分て、環七と青梅街道が交わる大きな交差点に出る。エスカレーター式の歩道橋を上り、環七道路の中央部で立ち止まると、ちらりと境界右下の時計を確認。午前七時四十五分。

眼下を行き過ぎるEの車列へと視線を移し、ハルユキは小声で呟いた。

「（ハースト・リンクス）」

ばしいいっ！ という衝撃^{しやうげき}がとともに世界が青く凍る。ブレイン・バースト・プログラムがハルユキの心臓から発せられる量子クロックを増幅し、意識を一千倍に加速することを作り出す（初期加速空間）だ。

透明なブルー一色に染まったE.V.群は、完全に静止しているようだが、よくよく見ると一秒に一センチ程度ずつじわじわと移動している。その奇妙な躍めを背景に、ハルユキは桃色ブタアバターの手を動かしてブレイン・バーストのマウチンタリストを聞くと、意外に多い登録者一覧の中から目指す名前を見つけてはっと仮想の息を吐いた。迷わずタッチし、浮き上がったメニューから《対戦》を選ぶ。

再度の世界変容。空が周辺部から真っ黒に染まっていく。道路両側のビルやコンビニはたちまち壁をひび割れさせ、タルマも全て消滅して、代わりに路面には無数の瓦礫や陥没孔^{くわんとく}、錆びたドラム缶などが出現する。

《世紀末ステージ》の、相変わらずの殺伐たる光景に、ハルユキは思わず笑みを浮かべた。別にこのステージが殊更好きだというわけではないが、今この時にはまったく相応しい。なぜなら、数秒前にハルユキが選んだ相手との、最初の《対戦》の舞台も世紀末ステージだったからだ。そしてそれは、ハルユキの——シルバー・クロウの生まれて初めての対戦でもあった。

耳を澄ませる。広い幹線道の北から、特徴的な内燃機関の駆動音がどこどこ聞こえてくる。

木色のガイドカーソルはほとんど動かないので、どうやら一直線にエンジン全開バリバリ暴走

中らしい。一瞬、いつかのようによ道橋の上に姿を隠し、相手が通過する寸前に飛び降りて全方のダイブキックをぶちかましたい——という誘惑に駆られる。

しかしハルユキは当初の予定通り、敵影が見えないうちからすすりを繰え、無遠慮に身を躍らせた。背中の翼でゆるやかにグライドし、すたっと路面に降り立つ。

「あれっ」

「クロウ君、降りちったよ。何でだろ」

という声は、離れたビルの上で三々五々点在する観戦者たちのものだ。せつかくの有利を捨てるハルユキの行動を訝しんでいるのだろうが、彼らには申し訳ないことながら、今回ハルユキは戦うために（加速）したわけではない。

両腕に手を当てて待つこと数秒、暗がりの彼方にヘッドライトが眩く煌めいた。Vツインエンジンジンの咆哮が一気に高まる。向こうもハルユキに気付き、シフトダウンして突っ込んでくるようだ。だがハルユキは、フリーストアタックに備えて身構える代わりに、両手を上に高々と突き出して威意のないことを示した。

その意思は、幸い相手に伝わったようだった。両の彼方から出現した鋼鉄の騎馬は、前後のブレーキローターから火花を散らして減速すると、各所のクロームメッキにオレンジ色のかかり火を反射させながら後輪をスライドさせ、ハルユキのすぐ目の前で停まった。ライダーが右手をハンドルから離し、チチチと指を振る。

「ソー・バッドだぜ。そっちから乱入しといて、戦う前から降参かあ？」

恐らくは加速世界で唯一のバイク使いである（アッシュ・ローラー）のいかついスカルフェイスに向かって、ハルユキはべこりと頭を下げた。

「すいません。今日はちよっと、アッシュさんに話があつて……」

アッシュ・ローラーは、渋谷エリア以南を領土とする緑のレギオン（グレート・ウォール）に所属している。当然メインの対戦フィールドも渋谷のはずなのだが、なぜか平日朝と夕方の短い時間だけ、杉並エリアのマッチンダリストに出現するのだ。多分、環七道路（かんしちだうろ）を使ってバス通学していて、その時間をいわば《領土外遠征》に充てているのだと推測されるが、だとすればなかなか大胆な行為だ。デュエルアバターの出現位置傾向から来っているバスが特定されれば、《リアル餌れ》に懸かりかねない。

しかし、考えてみればこれはほど大胆あるいは大難抱という言葉が似合うバーストリンカーも居ないので、ハルユキは脇道に逸れかけた思考を中断するとバイクに数歩近寄った。声を低め、ばそばそと囁きかける。

「それで、できれば（クローズド）で話せると助かるんですけど……」

（クローズド・モード）とは、その名の通り閉鎖された――つまりギヤラリーの観戦を拒否する対戦のことだ。両対戦者の同意によって設定できるが、周囲からはケチくさい奴と思われるし、そもそも《ギヤラリーにいいところを見せる》ことがバーストリンカーの対戦のかなり大き

なモチベーションでもあるので、利用する者はほとんどいない。

当然、アツシユ・ローラーも不満げにふんと鼻息を漏らした。だが、どうやらハルユキの意を汲んでくれたようで、「わーったよ」と小さく叱じる。

バイク乗りは、続けて周囲をぐるりと見回すと、よく通る大声で叫んだ。

「ヘイヘーイ、ギヤラリーのボーイズンガールズー。せっかく俺様の勝つところ観に集まってくれたのにゾー・スマナツシンだけど、この対戦はナシンコにさせてもらうぜー」

すぐさま、周囲のビルから幾つもの抗議が沸き起こる。

「えーっ、そんなのつまんなあーい！」

「やってくれよー、久々のアシュタロ戦じゃんかよおー」

だが、それらの声も、直後にアツシユが発した、

「しやーねーだろー！ このカラス野郎が、俺様に告りてーつつうからよおー！」

——というとんでもない台詞で、一気に大歓声へと変わった。

降り注ぐ拍手と口笛を浴び、ハルユキは魂を食って「そんっ、ちがっ」と叫んだが、確かにこれくらいのおマケをつけないければギヤラリーも気持ちよく落ちてはくれるまい。果たしてこれはアツシユ・ローラーの深い配慮なのか、それとも後先考えないウケ狙いなのかと悩みながら、ハルユキもやむなくここへ頭を下げた。

続けて視界左上の自分の名前に触れ、(インスト画面)を開く、デュエルモード変更メニュー

ーから〈タローズド〉を選び、OKボタンにタッチ。アッシュ・ローラーが、視界に表示されたはずのイエスノー窓をリタッチすると、尚も大騒ぎ中のギヤララーたちが、片端から先に包まれて消滅した。

まるで音量ミュートボタンを押したかのような静寂が、しんとステージに満ちる。響くのは、低くアイドリンドを続けるVツインエンジンの不規則な鼓動だけだ。

アッシュ・ローラーは、イグニッション・キーに右手を伸ばすとそのエンジンも停止させた。

「……で？　ンだよ、話つつうのは。また羽根がなくなった……ってワケでもなさそうだな」

「ええと……ですわ……。その……」

「どこから説明するべきかしばし悩んでから、ハルユキは事実を順番に言おうと口を開いた。

「僕、昨日、緑のレギオンの〈アッシュ・ウーダン〉と対戦したんですが……」

だが、たったそこまで告げただけで、アッシュ・ローラーは予想外の反応を見せた。

「な……なんだって!?」

シートから転げ落ちるように地面に降りると、強面のライダーは、胸懷を模したフェイスシ

ールドをハルユキの顔にぶつけんばかりにして叫んだ。

「どこでだ!?　何時のことだ、そりや!?」

道路脇の手頃なコンクリート・ブロックに向き合って腰掛け、ハルユキは昨夕の一戦につい

て、説明できる限りのことを説明した。

放課後十九時過ぎ、杉並第二戦域で、ブツシユ・ウータンとオリブ・グラブのタッグにこちらから挑戦したこと。

対戦序盤、ウータンはいつもの「オイラでヤンス」口調を貫いていたのに、中盤に滅多き（ISSキット）を装着してからは、まるで別人のように乱暴な態度に変わってしまったこと。そのキットを、ウータンは「二日前に何者かから貰った」らしいこと。

言わなかったのは、ハルユキとタッグを組んでいた（アーダー・メイデン）の名前とその能力だけだった。あの対戦にはギヤラリも数名いたのて、いずれは噂話としてアッシユの耳にも入るだろうが、一応は白んギオンの仲間のデータを無闇と他んギオンに漏らすものではない。アッシユも、そこに関しては質問してこなかった。

十分ほどかかった説明を聞き終えたアッシユ・ローラーは、こつぱタダのついた両膝に腕を預けて前屈みになり、深く長い息を吐き出した。

「（ISSモード統合キット）だと……」

聴るように聴くと、上目遣いにハルユキを見て、短く問うてくる。

「そのISSモードってのは、アレか。いわゆる（心意システム）のことかよ？」

「え……ええ、同じものだと思います。アッシユさんはもう、心意システムを……？」

ハルユキの省略気味な質問に、戦艦ヘルメットがゆっくり左右に振られた。

「師匠から、名前だけはな、前に、『Vツイン準』の開発に行き詰まった時、そういうモンがある。ただ教わったけど、そのものの修行はしてねえよ。なんつうか……ビビっちゃってな。」
 「心の闇」に吞まれる危険がある、なんて言われちまうとな……。それに、師匠がネガビュに復讐した今となっちゃ、教えてくれつつうのも筋道いだしよ」

アッシュ・ローラーの言う師匠とは、彼の《魔》にしてハルニキ自身の心霊の師でもあるスカイ・レイカーのことだ。彼女は今年の四月に、古巣である黒のレギオン（ネガ・ネビュラス）に正式復讐したので、《グレート・ウォー》所属のアッシュ・ローラーとは一応敵同士となつてしまつた。もともと本人たちはさして気にする様子もなく、領土戦などでは真正面からばちばち戦っているが、自分の《魔》に頼りづらいというアッシュの立場はやはりきつい部分もあるだろう。

多少脱線するが、この機に以前から気になつていたことを訊いておこうと思い、ハルニキは口を開いた。

「あの……、アッシュさんは、どうしてグレウオに？」

「なんだよ、突然だな。んー、正直最初の頃はフアキン大レギオンって思ってたんだけどな。家があつちのほうだし、誘つてくれたのがけっこういいヤツだったしな。入ってみたら、青やら紫に比べりゃグレウオはぜんぜんフリーな雰囲気だったし、後悔はしてねえよ。レギマスも命令とか規律っぱいこと何も言わねーしな」

ダレート・ウォールのレギマスと言えば、もちろん緑の王だ。ハルユキは先日の七王會議で遠く見た、〈タリオン・グランデ〉の権威した真実さを感じ出しながらなるほどと頷いた。少し間を置いてから、いよいよ本題に切り込む。

「それで、アツシユ・ウータンなんてすけど……。彼は、もしかしたら、アツシユさんの〈子〉なんてすか？」

それはアツシユ・ローラーには意外な問いだったようて、スカルフエイスを大きく引いてから、ぶるぶると顔に皺をつた。

「まさか、彼ははまだ〈子〉を持てるような器じゃねーよ。ウーのヤツの〈親〉は……もういねーんだ。今年の頃に、ポイント全損しちゃってな……」

その言葉に、ハルユキはびくりと背中を震わせた。耳の奥に、昨夜のウータンの独白が鮮やかに聴える。

——強くなきゃ、意味ないんスよ。強くなきゃ、勝率も稼げず、レギオンじゃ下っぱのまんまで、そのうちポイントが枯渇して、人知れず加速世界から消えるんだ……。

驚き込むハルユキの目の前で、一度深いため息をついたアツシユ・ローラーは、突然思いも寄らぬ行動に出た。右手をヘルメットの側面シールドの口もとにあてがうと、ガシヤツと音を立てて顔全体を後方に跳ね上げたのだ。

ぎょっと体を仰け反らせるハルユキを見て、アツシユ・ローラーはその〈素顔〉で怪訝そう

な表情を作ってみせた。

ペールグリーンのアイレンズはやや細めて、顎の尖ったフェイスプレートと合わせて、どこか理系の少年を思わせる造形だ。少なくとも、日頃のヒヤハハアな世紀末ライダーよりは百八十度印象が異なる。その口もとから、これも意外に繊細なトーンの生声が流れた。

「……ンだよ？」

「い、いえ、何でも」

「……なら、話戻すけどな。(親)がいなくなっちゃった時、ウータンはまだレベル1だったんだ。そんなにまあ、成り行きつつうか、色々あって俺が面倒見ることになってる。ガラじやねーと思っただけど、はっとく訳にもいかねえしき……」

「いえ……、立派な兄貴っぶりですよ」

「どうだが……。結局、俺にはあいつが心の底で何考えてるか、まるで見えてなかったのかもな。ここしばらく、ウーのヤツがなんか激怒ってたのは気付いてたんだけど……俺も色々忙しくて、つい後回しにしちまって……そしたら、一昨日ぐれーからまるで連絡取れなくなっちゃってよ。いつ禁いでも渋谷のマウチングリストにいねえし、メールも全然返してこねえし……その内、妙な噂が聞こえてきてき……」

「噂……？」

ハルユキが身を乗り出すと、アッシュ・ローラーは再び肩を落とし、力なく答えた。

「——ウータンが、オリイブ・クラブと組んで、世田谷や大田の過疎いエリアで怪しい技を使って勝ちまくってる、ってな。だから俺は昨日はそっち方面を回ってたんだけと、まさか杉並にいたとはな……。それに、〈怪しい技〉の正体が、そんなとんでもねえ代物だとは思わなかったぜ。装着すると心意システムが使えるアイテム……しかも他人に譲渡可能、かよ……」

「アツシユさんは、ウータンたちに〈ISSキット〉を渡したバーストリンカーに心当たりはありますか？」

言葉の切れ目を狙っておそろおそろそう語ったが、シールドを上げたヘルメットは小さく横に振られた。

「……どいつと名指しはできねえ。ウータンと仲がいい連中の名前を、俺が知ってる範囲で挙げることならできっけど……でもクロウ、もしかしたら、ウータンに渡したキツを特定しても意味ねえかもしれねーぞ」

「え……そんなことないでしょう。あんな危険なもの、少なくとも配布だけはすぐ止めさせない……！」

ハルユキは慌てて反論した。(ウータンにISSキットを渡したバーストリンカーの特定)こそが、こうしてアツシユ・ローターにクローズド・モードでの話し合いを要請した目的なのだ。即座に一人に絞り込めなくても、ウータンと交際のあった者のリストを作り、順に当たっていけばいずれ配布元を突き止められる可能性はある。

だが、ハルニキのその希望的推測は、アッシュ・ローラーの鋭く言葉に打ち砕かれた。

「お前の見た（ISSキット）の見た目が生物型だったのが、俺アどうにも気にかかるんだよ。加速世界じゃ、ナマモノ系の装備やアイテムには特有の性質ってのあるだろうが、壊れても自動修復したり……時間経過で分裂したり。もし……、もしそのキットの構造が……子コピー孫コピーありなら……」

「あつ……」

これまで、その可能性を一切考えなかったハルニキは、思わず声を上げた。

アッシュ・ウータンが何者かから貰ったという（ISSキット）。配布しているバーストリンカーは一人だろうと信じて疑わなかったが、確かにその推測には何の根拠もない。アッシュ・ローラーの言うとおり、あの黒い眼球に（自己複製能力）があり、コピーを任意に他人へと譲渡できるなら、そしてその行為に、何らかの報酬が存在するとすれば、

現時点で、もう何もかも手遅れかもしれない。

こうしている間にも（ISSキット）は無制限の拡散を続け、あの恐るべき威力を持つ暗黒の心意技を使えるバーストリンカーはどんどん増え……しかも彼らは、心意システムの何たるかを一切、誰にも教わらないままなのだ。当然、（心意は心意によって攻撃された時以外は使ってはならない）という第一原則など知りもせずに、対戦で使いまくるだろう。それはもう、ブレイン・バーストという対戦格闘ゲームの崩壊に等しい。ステージの属性に合わせた戦略、

自分の能力を生かした戦術は意味を失い、ただ遠距離では（ターク・シコット）、近距離では（ターク・プロウ）を撃ち合う戦いばかりが繰り返られる。

その殺伐たる未来図に、ハルユキはぞっと全身を震わせた。

何とか否定材料を探そうとしたが、それより早く、アツシユ・ローラーがぼそりと呟いた。

「実はな……急に（怪しい技）を使いはじめたヤツの噂は、ウータンとオギーブ以外にも二、三件聞いてんだ、しかも一人は、江戸川エリアあたりに出たらしい。お前の話を聞いて、俺が――SSキットの出所は複数なんじゃねーかと思つたのはその話のせいもあんだよ……」

「え、江戸川区……ですか……」

呆然と繰り返す。ウータンの本拠である渋谷、世田谷からは、皇居を挟んで反対側だ。余りにも遠い。これはいいよ、配布というより拡散しているのではないかという疑いが残る。

――いったい、誰が、何のために。

ハルユキは、昨夜から何度となく考えたその問いを、口中に苦く噛み締めた。

もちろん答えはまったく思いつかない。深く頭垂れ、ドラム缶のかがり火に揺れる自分の影を見下ろしながらほとんど放心していると、やがてアツシユ・ローラーが低く呟いた。

「こうして話してるだけでも短けえモンだな、三十分のは」

反射的に視界上部のタイムカウンタを確認すると、一八〇〇秒から始まったはずのそれはすでに残り三〇〇秒を切っている。もちろん、もう一度マツチングリストから対戦をやり直すこ

とは可能だが、これ以上話しても推測に推測を重ねるだけだろう。

ハルユキは、突然の対話要請に応じてくれたことに礼を言つて締めくくろうと、頭を下げかけた。

しかしそれより早く、ガシヤツと音を立ててヘルメットの鋼製（こくさく）シールドを降りしたアツシユ・ローラーが、エフエクト強度の増した声で早口に言った。

「クロウ、最後に、俺からも話しくることがある」

「え……、何ですか？」

「あー、うーっと……俺様から持ち出す話題でもねえんだけど……時間ねえから直球でいくぜ、お前、ここ一週間の対戦で、なんか変だと思わなかったか？ ウータンの件以外に」

「え、妙……ですか？」

囁（ささや）きに記憶（きおく）をスキヤンするが、特に引つかかることはない。三日前の領土防衛戦を含めると、ノーマルな対戦を二十回程度行つたはずだが、昨日のウータン戦の印象が強すぎて勝敗すらも思い出せないくらいだ。途（みち）惑（まよ）いながら、そのままと口にする。

「いえ……、どの対戦も、いたって普通だったと思うんですけど……。変つて、何がですか？」
するとアツシユ・ローラーは、再び奇妙な躊躇（ためら）いを見せてから、どこちなく答えた。

「その《普通》が、だよ」

「ふ、普通が変？ —— ええと……すみません、僕、先週のレースから色々心配事抱えてて、

正直あんまり対戦もしてなくて……」

その心配事とはもちろん、一昨日行われた七王会議と、そこで議題となったシルバー・クロウの処遇だ。アバターのどこかに寄生したままだと思われる《災禍の種》の因子を一週間以内に浄化できなければ、ハルユキは事実上加速世界から追放されてしまう。そう、考えてみれば、《ISSキット》がもたらすであらう大混乱を、ハルユキは自分の眼で見られないかもしれないのだ……。

——と、そこまでを思考した瞬間、ハルユキはようやくアアシユ・ローターの言わんとするところを悟った。

普通が変。そう、その通りだ。本来ならばハルユキは、普通に対戦などできる立場ではなかったはずなのだ。なぜなら、一週間前の《ヘルメス・コード縦走レース》に於いて、シルバー・クロウは百人以上のギヤラリーの目の前で《タロム・ディザスター化》してしまったからだ。ハルユキがあの呪われた鐘の六代目所有者であるという噂は加速世界を駆け巡り、対戦を拒否されたり悪し様に罵られたりしても何ら不思議はなかったはずだ。

しかしここ一週間に対戦したどのバーストマシンカーも、昨日のブアシユ・ウータンすらも、まるでハルユキのディザスター化の一件を知りもしないようだった。そんなことは、普通に考えれば有り得ない……。

「そうだ……確かに、変です。どの対戦でも……みんな、僕に何も言わなかった……」

掠れた声でそう口走るハルユキに、アツシユ・ローラーは早口でまくし立てた。

「その理由はない、お前とあの赤銅野郎とのバトルを観てた百何十人のギヤラリーが、ログアウト前に全員で協定を結んだからなんだよ」

「へっ？ 協定？ なんのです？」

訳がわからず訳き返したハルユキに――

アツシユ・ローラーは、驚くべき内容を告げた。

「（ヘルメス・コードで災禍の鐘を装備した件に関しては、今後一切シルバー・クロウを責めない）」

「……………」

「なぜなら……お前はレースを救ったからだ、赤銅野郎にぶつ壊されるはずだったイベントを、最後の最後で俺たちの手に取り戻してくれたからだ。だから、あの一回限りの変身については無言を貫くし、お前がどういう経路で《鐘》を入手したのかも考えない。あの場にいたギヤラリー全員が、誰からともなくそう言い出して、商場一致で合意した……んだと思うだ、この一週間の対戦で、誰もお前にダイザスターのデの字も言わなかったのはそういう理由だ」

「……………」

余りに深い驚きと、それ以上に巨大な一つの感情に打たれ、ハルユキは無言で両眼を見開き続けた。

シルバー・クロウとラスト・ジグソーの戦いを見守っていた百人以上のギヤラリーの中には、もちろん《王》のレギオンに所属する者だって沢山いただろう。彼らにとって、ハルユキは敵のはずだ。本来ならば、恐むべき《災禍の鎧》を召喚したハルユキを責め、悪し様に罵って当然なのだ。なのに――それなのに……。

「……それぞれのレギオンのメンバーである以前に、俺たちやバーストリンカーなんだ。そういうこった」

ぼつりと言い、アフシユ・ローラーはじつとハルユキを監視して、かつてないほど真剣な声で続けた。

「クロウ、そういう理由で、今のところお前に対する反感はそう大したことはねえ。《七王会議》の決定は、ダレウオの上の連中から俺もちらつと聞いたけど、それだって敵しすぎるつつう声もあるみてえだしな。そいつを解つたよと聞いてはいいんだけどよ……」

わずかな間、次に発せられるであろう言葉の不言さを暗喩に予感し、ハルユキは押し殺した声で促した。

「……何ですか……うー」

「――俺が聞いた噂には、続きがあんだよ。ウータンやオリーブたちが使っている《怪しい技》……そいつは、クロム・ダイザスターの能力のコピーだ、ってな……」

環状七号線を走るバスのどれかに乗っているのであろうアッシュ・ローラーとのイレギュラーなクロースド封戦を終えたハルユキは、歩道橋をそのまま雨に覆って学校へと向かった。

青梅街道を西に歩く間も、校門をくぐって靴を履き替え、教室の自分の机についてからも、臨内に居座る衝突と疑問はなかなか去ろうとしなかった。

ブッシュ・ウータンらが使った怪しい技、つまり「ヘーSSキット」による心意攻撃が、クロム・ディザスターの攻撃力のコピー。

そんなことは有り得ない。誰かの能力を複製し、それを寄生アイナムに内蔵させるなどという話は聞いたこともない。しかし、それを言ったら寄生とか浄化といった言葉だって最近まで知らなかったのだ。加速世界には、まだまだハルユキの知らないロジックが存在しても不思議はない。

それに——あの「ターク・プロウ」や「ターク・シロット」の強い過剰光は、笑顔の鏡が常にまとう闇のオーラと、確かによく似ていた……。

硬い樹脂製の椅子の上で、ぞくぞくと体を震わせる。ことの真偽はさておくとしても、そんな噂が広く流布し、同時にISSキットも拡散が続ければ、クロム・ディザスターの六代目所有者ということになっているハルユキに対する、いまの加速世界を愛するバーストリンカーたちの怒りは爆発的なものになるだろう。せつかくヘルメス・コード鎮定レースのギョウラーたちが結んでくれた協定など、一瞬で消し飛んでしまうに違いない。いや、むしろ彼らこそ、ハル

ユキに裏切られたと考える巨大な憎悪を抱きかねない。

「……………なんて、こんなことに……………」

遠く響く始業のチャイムを聞きながら、ハルユキは無言で呟いた。

いったいこの危機的状況は、いつ、どこから始まっていたのか。まるで、七王会議の裁定とは別のところで、目に見えない力がハルユキを追い込もうとしているようにも思える。これは不運な偶然の連鎖なのか？ それとも、誰かの意思によるものなのか…………？

もし後者だとすれば、周到に準備を整え、自在に情報を操って追い詰めていくこのやり口は、強くある人物のことを思い出させる。今年の春、梅郷中の新入生としてハルユキの前に現れ、聖魔の手口でハルユキを破滅させようとした（略奪者）。

もちろん天井——その向こうにある一年生の教室を見上げ、すぐに小さく首を振る。

彼が再び動いている、というようなことは絶対に有り得ない。バーストポイントを全損し、ブレイン・バーストを強制アンインストールされた者は、加速世界に関するあらゆる記憶を失う。ハルユキは最後の決闘の翌日、彼と直接話してその隠しルールを我が眼で確かめた。

だが、彼の手口が、誰かに学んだものだったとすれば？

その（誰）が、ついに自ら動き始めたのだとしたら……………

「ハル」

ぼん、と右肩を叩かれ、ハルユキはほとんど飛び上がりかけた。物凄い勢いで振り向くと、

そこには青い眼鏡の奥でぱちくりと眼を瞬かせる、見慣れた親友の顔があった。

「……タク」

「どうしたんだい？ 教堂移動だよ」

幼馴染みにしてレギオンの仲間でもある、兼、拓武の言葉に、慌てて周囲を見る。いつの間にか朝の日も終わっていたようで、クラス生徒たちが次々と教堂を出ていくところだった。火曜日の一時間目は音楽なので、防音設備のある音楽室に移動しなくてはならないのだ。

「あ……そ、そうか」

慌てて立ち上がるハルユキを見て、タカムはふと眉をひそめた。長身を屈め、ハルユキの耳元で囁く。

「……ハル、もし賞金首の件を心配してるなら、昨日も言っただけど、気に病む必要はないよ。僕やチーちゃん、楓子さん、それにもちろんマスターが、必ず君を守るから」

「あ、ああ……悪い、こっちこそ心配させて……」

どうにか微笑みを浮かべ、先に立って歩き始めながら、ハルユキは考えた。

タカムはおそらく、まだ「HSSキット」のことも、それがタロム・デイズスターのコピーアイテムだという噂のことも知らないだろう。だが、放課後に目録の対戦をしていれば、いずれ耳に入るはずだ。その前に、ハルユキから説明しておいたほうがいい。そう——タカムだけでなく、黒雪姫はじめ他のレギオンメンバーにも。

廊下に出たハルユキは、隣を歩くタタムの腕を肘でつつき、低い囁きを返した。

「あのな……今日、謡が終わったらオレんちに来てくれ。話したいことがあるんだけど、多分学校じゃ時間が足りないから」

「……わかった」

余計な質問を挟まず、即座に頷いてくれるタタムに感謝しつつ、更に口を動かす。

「チユにはタタから言つていてくれないか。オレは先輩と、フリーコさんにもメールしとく」

「時間は？」

「そうだな、六時半」

「了解」

打てば響くやり取りをしていると、ようやく背中貼り付いていた寒さも遠ざかっていくようだった。ぐつと両手を握り、ハルユキは胸中で自分に言い聞かせた。

——負けない。負けるもんか。僕にはこんな頼もしい仲間がいるんだ。誰が何を企んでいようと、どんな状況に陥ろうと、心までは折られない。絶対に。

しかし、直後、タタムの放った毒舌台詞に、ハルユキは心の中の何かがボアキリ折れる音聞いた。

「そういえば、ハル。次の音楽の授業、たしか独唱の課題発表があるはずだけど、練習はしてきたのかい？」

敗退後。

一時間目の音楽の独唱発表に加え、五時間目の体育では苦手極まるソフトボールをやられ、肉体的精神的に大ダメージを追ったハルユキは、へろへろと裏庭の飼育小屋を目指した。

小屋の掃除は完了しているため、今日の目録ファイルで指示されている任務は、委員長のパルユキ一人で行うものだけだ。昨日は遠攻帰ってしまった同僚の浜島くんと井関さんの、熱い感謝とねぎらいの言葉をほんの少し期待していたのだが、先刻昇降口のところで頂戴したのは、「がんばったじゃんイインチャ」「おつー」という至極シンプルなフレーズだけだった。

「……いいさいいさ、男は自ら感謝を求めないものなのさ……」

ハードボイルドとは縁遠い口調でぶちぶちと呟きながら、薄暗い旧校舎裏を通り抜けて飼育小屋の前まで歩く。

一日太陽に晒したおかげで、小屋の床タイルは完全に乾いていた。金網の前に積み重なっている古い落ち葉の山もかなり乾燥が進んでいるようで、これなら明日には袋詰めしてゴミに出せるだろう。

自分の仕事の結果を確認するというのはなかなか気分のいいもので、ハルユキはしばらくそ

の場に立ったまま、ぼーっと小屋を眺め続けた。

なので、突然視界中央にアドホック接続の要請ウインドウが出現した時、昨日と同じくらい驚いてしまった。一瞬仰け反ってから周囲を見回し、少し離れたところに立つ小さな人影を確認する。すばっと切り揃えた前髪と、きつく結わえたポニーテール。純白のワンピースタイプの制服の背には、茶色のランドセル。系列の松乃本学園初等部四年生、四葉宮路だ。

「あ、こ………こんにちば」

挨拶しつつ、急いで要請窓のOKボタンにタッチ。途端に自動展開したチャットウインドウに、ばばっと文字列が流れる。

【UIV こんにちは、有田さん。遅くなっていますみません。こちらの管理係さんに、備品の受け入れとデータ登録をお願いしていたので少し時間がかかってしまったのです】

相変わらずの鬼っばやタイピングだ。眼が追いつかないほどのスピードで入力された文章を二度読み、しかし内容を理解しきれずに、ハルユキは顔を上げて訊ねた。

「え………び、備品受け入れ？ って、どういう……？」

すると、謎の足元に、かなり大きめのキヤラングケースが置かれていることに気付く。全体が硬そうな樹脂製で中は見えないが、あれを誰が手で運んできたならかなり大変だったろう。

「あ、それかな？ 中身出すなら、手伝うよ」

言い、ハルユキはケースに歩み寄りかけた。しかしなぜか話はさっと右手を前にかざし、同

時に左手だけでタイプした。

【U—V】これは違います。申し訳ありませんが、しばらくこのケースには近づかないで欲しいのです。理由は後ほど説明します。備品は……今、来たようです】

その言葉、いや文字とあり、ごくごく土地を踏む足音がハルユキの耳に届いた。視線を向けると、歩いてくるのは宅配業者の制服を来た若い男性だった。両肩に、なんだか細長い木のようなものを担いでいる。

「お届け先は、こちらでいいツスカあー？」

という業者さんの声に、誰は真早く両手を動かした。どうやらあちらともアドホック接続しているらしい。

【U—V】はい。お手数ですが、そちらの小屋の中に運んでください。ひとつは左奥に、もうひとつは右奥にお願います】

「へーい」

威勢のいい仕事とともに、ハルユキの眼前を業者さんがずんずん歩いていく。左右の肩に担がれているのは、長さ一米メートル八十センチほどもある幹部分の先から、数本の細い枝が曲がりながら伸びる、木のような——ではなく本物の木だ。枝に葉はなく、根元には重そうな支柱が取り付けられている。生木ではなく加工品のようなだ。

開け放たれたままの入り口から、二本の長い木を器用に搬入した業者さんは、奥の目陰にな

っているあたりに離して設置すると振り向いた。議がタイプで細かく位置を指定する。

【U-V そちらを、もう二十センチほど右に……はい、そこで大丈夫なんです】

小屋から出てきた業者さんが提示した受け取りのホロタダに、議が電子サインする。「まいどー」の声とともに業者さんは駆け足で去っていき、あとにはハルニキと議、議の木と議のケースだけが残される。

ハルニキは金網越しに、運び込まれた背の高い木を呆然と見上げた。

両方とも、幹の直径は七、八センチほどもあるだろうか、表面は磨かれてつるつるしているが、決して新しくはない。恐らく、この小屋で暮らすことになる動物が使うものなのだろうが、考えてみればハルニキはまだ動物の種類を教えてもらっていないのだ。

学校の飼育委員会と言えば、ウサギとかニワトリあたりが定番だ。しかし、こんな大きな木が必要ということは……サル系？ それともカメレオン系？ まさかのナマケモノ系？

ごくり、と唾を呑むハルニキの傍らで、議が短くタイプした。

【U-V それでは、あの子を小屋に入れるのです。しばらく飛び回ると思うので、私が入ったらドアをしっかり閉めてください】

反射的に、大型のキヤリングケースを見る。つまりあの中身が、問題の飼育動物なのだ。そして飛び回るということは——トリ系だ。小屋に運び込まれたのは（止まり木）なのだ、

考えてみれば、小学校の飼育委員会がサルだのカメレオンだの飼っているはずがない。きっ

とインコとか九官鳥とか、大きくてもオウムあたりだろう。

内心で、ほんの少しばかり「なあんだ」と思いながら、ハルニキは謎が慎重にケースを運ぶのを見守った。ドアを潜ったところで、ふと跳ねる。

「あの……四葉宮さん、僕も入っていいの？」

すると謎は一時考える様子を見せてから、こくりと頷いた。

「UーV 大丈夫でしょう。でも、脅かすといけないので、静かにじっとして欲しいのです。ちよつと臆病な子なので」

「う、うん、了解」

謎に続いて小屋に入ったハルニキは、金網張りのドアをそつと閉めると、内側のスライドロツクをきつちり施錠した。

それを自分でも確認した謎は、キヤリングケースを床に置くと、ランドセルも降ろした。その中から、見慣れぬものを取り出す。それは、丈夫そうな革製の長手袋だった。慣れた仕草で左腕を通し、二、三度手を握る。

次に、ケースに向かつてかがみ込むと、側面に設けられたスライド式のフタをそつと開く。内部の暗がりに、まるでRPGで戦士系のクラスが装備する（レザリー・グローブ）のような、というよりそれそのものを嵌めた左手を慎重に差し込んでいく。

インコかな、いやあんなゴツい手袋が要るんだから大きめのオウムかな、とわくわくしながら

ら、ハルユキは譜の仕事を見守った。ケースの中を覗き込み、何かを話しかけているようだ。もちろん声は出ないし唇も動いていないのだが、それでもハルユキには、優しく呼びかける囁きが聞こえた気がした。

数秒後、左腕が慎重に引き戻されはじめる。手首が現れ、甲が見え、ゆるく伸ばされた指先と、そこをしつかりとホールドする二本の腕が露わになる。予想通り、鳥だ。羽毛の色は、白に近い灰色。大きいが、巨大というほどではない。全長は二十センチを少し超えるくらいかな。なら、やつぱりオウム——

では、なかった。

譜がゆつくり立ち上がり、その左手指先に止まる鳥とばかり目が合った瞬間、ハルユキは「ひいっ!?」と叫んでしまいそうになるのを必死に堪えた。

丸く膨らんだ頭、下に大きく湾曲するくちばしと、頭の両側から突き出した耳のような羽根。そして何より、赤金色の虹彩を持つ、まん丸な両眼。

これはフクロウ、いやミミズクだ、つまり猛禽類、肉食で、ハンターで、ケンカすればきつとカラスより強い暴れん坊。

もちろん、この手の鳥を見るのが初めてというわけではない。ずっと昔に連れていつてもらった上野の動物園には、もっと大型のフクロウやそれより大きいワシだっていたはずだ。しかし、何も隔てるものがない空間で、しかも一メートル半の至近距離で向き合うとなれば話が違

う、今にも飛びかかってきて、ハルユキのはつぺたをオヤツ代わりにつつきまくるのではあるまいか。

そんな想像にとらわれて、指先まで固まったまま、ミミズクの大きな眼から視線を外せずにいると――。

視界下部のチャットウインドウに、桜色のフォントが顯られた。

『UIV そんなに怖がらなくて大丈夫なのです。むしろ、今はこの子のほうがほえてい
のです』

「え……、そ、そうなの？」

ごく小さな声で泣き、わずかに肩の力を抜く。するとミミズクも、ほんの少しばかり眼力を緩め、くりんと丸い頭を傾けた。その仕草は思いのほか可愛らしく、ハルユキは無意識のうちに口もとを和らげていた。

「それ……ミミズク、だよね？ 種類は何ていうの？」

小声で訊ねると、すぐさま答えが表示された。

『UIV アフリカオオコノハズク、といいます。日本の在来種ではなく、ペット用に輸入、または人工繁殖されている種類です』

「へえ……。てことは、松乃木小の飼育室で購入したの？」

さすがお嬢様学校は飼ってる動物もひと味違うなあ、などと思ひながら覺したハルユキの

質問に、しかし誠はそつと首を横に振った。

【UIV そうではありません。少し、複雑な事情があるのです。長くなるので、いずれ改めて説明します】

うん、と頷き、ハルユキはもう一度ミミズタを見た。飼育小屋の内部をきょろきょろと見回すその仕草は、確かにどこことなく不安そうだ。しかし考えてみれば、慣れ親しんだ住処からいきなり見知らぬ場所に連れて来られたのだから、怯えるのも当然なのかもしれない。

ハルユキは、今までベクトというものを飼ったことがない。それどころか、他の家で飼われている動物に触れた記憶もはばないに等しい。だから、目の前の動物が何を感じているのだろうと考えるのは、これが初めての経験だった。

「……情がなくてもいいよ」

いつしか、小さな声が目をついて出ていた。

「ここはお前の家だ。僕と四壁宮さんて、一生懸命排除したんだ。ここにいれば、誰もお前をいじめたりしない」

安全な居場所が奪われる。それがどんなに辛く恐ろしいことなのか、ハルユキはよく知っている。去年の最悪だった時期、この学校に於けるハルユキの居場所は、現実世界では旧校舎二階の男子トイレの個室、仮想世界ではローカルネットのバーチャル・スカッシュ・コーナーだけだった。

しかし、ある日突然ハルユキの前に現れた人が、黒揚羽蝶の翅を羽ばたかせて、深い穴の底から引き上げてくれた。その瞬間から、ハルユキの日常は何もかも変わった。とてつもなく広い新世界を知り、多くの人たちと触れ合い、大切な居場所を得た。

目の前のミミズク、いやコノハズクも、冷たい金魚の論理で家を取り上げられ、それどころか危うく殺処分されてしまうところだったのだ。しかし話の懸命な努力で、こうして新しい居場所を見つけることができた。今度こそ、この小屋ですつと幸せに暮らしていけるように、僕も激力ながら手助けしたい——というハルユキの気持ちも、コノハズクが理解してくれたのかどうかは、定かではなかったが。

不意に両の翼を広げると、コノハズクは誰の左手から勢いよく飛び立った。四メートル四方の小屋の中を、ぐらりとぐらりと円を描いて飛ぶ。

白と灰色の羽毛に夕日を浴びて羽ばたくその姿は、鼻を存むほど美しかった。ほんの数秒のことだったのに、ハルユキはまるで自分も一緒に飛んでいるかのように体が軽くなるのを感じた。やがてコノハズクは、左側の止まり木の枝をたくましい両脚で掴むと、二、三度翼を動かしてから静かに体を落ち着けた。

大きな赤金色の両翼が、すうっと細められる。耳のような羽根がべたりと倒れ、右足を持ち上げて一本足になると、そのまままるで眠ってしまったかのように身動きしなくなる。

「U—V— どうやら、ここを気に入ってくれたようです」

謡の発音に、ハルユキも小さく囁いた。

「そ、そう……。よかった……」

「UーV 有田さんが、あの子に優しいことを言ってくれたおかげからなのです。ありがとうございます」

そうタイプしてから、ボニーテールを揺らしてぴよこんと頭を下げる。ハルユキは慌てて頭と両手を小刻みに動かした。

「そ、そんなことないよ。四壁宮さんが、色々頑張ったからだよ。そ……それより、そうだ、

あのコノハズク、名前は何て言うの？」

訊ねると、謡は顔を上げ、数回瞬きしてからにこりと笑った。

「UーV そうでした、肝心なことをお伝えしていませんでした。あの子の名前は《ホウ》です。全校投票で決まったのです。オスで、なぶん三歳くらいなのです」

フクロウだからホウ、だとすればなかなか明快なネーミングだ。しかし、コノハズクも囁き声は「ホーホー」なのだろうか？ そもそもフクロウとコノハズクってどう違うんだ？

という疑問が脳内をスクロールしていたため、ハルユキは謡の説明文に、もっと気にするべき箇所があることにすぐには気付けなかった。あれ、と思いかけた時にはもう、謡はキヤリングダースを抱えて出口に向かおうとしていた。やむなくハルユキも後を追う。

コノハズクのホウ君が飛び出さないよう慎重に扉を開閉して外に出ると、謡はキヤリングダケ

ースの底から小さなプラスチック容器を取り出し、水道で水を入れてもう一度中に入った。止まり木の幹にそっと設置し、戻ってくる。

『U』V これで、今日は施錠して大丈夫なのです。水浴び用のプールや、体重管理用のセンサーは明日設置します』

「え……餌は？ やらなくていいの？」

『U』V 今日は、もとの小屋から運び出す前に与えてきたのです。基本的には一日一回なので、毎日放課後に私がこちらにお邪魔して餌やりをします』

そういえば昨日、謎は（事情があつて私の手からでない餌を食べなくなっちゃった）と説明していた。事情って何なんだろう、と思うと同時に、先刻述べたかすかな疑問も甦（よみがえ）ってくる。ハルユキはチャット窓を上にとくろいさせ、謎の発言を再確認した。ホウの名前と性別を記した文章の末尾に、確かにこう記されている。（たぶん三歳くらい）。

学校で飼育している動物の年齢が解らないなんてことがあるのかな？ と内心首を捻（ひね）りながらも、ハルユキはとりあえず飼育委員長としての本日の任務を遂行することにした。

自分の靴（くつ）を開け、ここに来る前に第二校舎一階の事務室まで受け取ってきたものを取り出す。真新しいステンレススチール製の、電子式J字ロックだ。電源を入れ、ニューロリンカーで接続すると、飼育委員のみに配布されている解錠コードを入力する。がちゃんと音がして、ロックが外れる。

U字部分を飼育小屋の扉の金具に通してから本体に嵌め込むと、自動で再施設された。引っ張ってがっちりロックされているのを確認し、扉に向き直る。

「それじゃ、四葉宮さんにも解説コード渡しとくね」

【UIV よろしくお願ひします】

ロックのメニュー窓から、コードを複製して論に送信。これで、ハルユキがいなくても論はホウに餌を与えられるようになったわけだ。本日の委員会活動は、これにて完了。日誌ファイルにサインし、学内ネットに提出する。

最後にもう一度、小屋奥の薄暗がりで見つめているコノハズクに視線を向けると、大きな眼が一瞬だけハルユキを見て、再び閉じられた。

——これからは、僕もホウの世話をするんだ。あいつがここで楽しく、心安らかに暮らしていけるように努力する責任が僕にはあるんだ。

そう考えると、身の引き締まる緊張感と同時に、不思議な虚かさも胸に生まれた。

両手をきゅっと握って立ち尽くすハルユキの視界に、灰色のフォントが育もなく流れた。

【UIV それでは、次のお仕事に向かいましょう、有田さん】

「え……次の仕事？ でも、今日の委員会活動は、もう……」

【UIV 飼育委員の仕事ではないのです。(ISSキャット)と(食糧の籠)をどうするか、ということですよ】

「……………はっ」

突然大転換した話題に、「瞬くらっと思考をふらつかせながら、ハルユキは四禁宮譚の小柄な制服姿を見た。

そういえば、そうだった。この子は、動物好きな年下の女の子というだけでなく——第一期本ガ・ネビュラスの幹部たる《四元素》の一角にして、恐るべき威力の範囲型攻撃力を持つレベル7バーストリンカー、《劫火の草花》だったのだ。

昨日のタッグ対戦が終わり、現実世界の杉並区に戻ってからも、ハルユキはしばらく放心したままだった。平然とニューロリンカーから直結ケーブルを抜き、ランドセルにしまう隙をばんやり眺め続けたため、ようやく我に返って、対戦中から気になっていたことを真っ先に訊ねた。

「四禁宮さんのアバターには《浄化能力》があるんですか？ 寄生属性のオブジェクトを解除できるんですか？」

しかし、テキストで返された回答は、明確なものではなかった。

「UV できるとしても、とても時間がかかるのです。さっき見たような、小さなオブジェクトでも最低三十分。より強力な寄生体は、通常対戦フィールドではとても時間が足りないのです。詳しいお話は、また明日にしましょう」

そして誰は立ち上がり、【家はすぐそこですのでここで大丈夫です】とタイプすると、深々

と頭を下げて住宅地の奥へと去ってしまったのだった。

猛火に包まれる草原の中央でゆるやかに舞う巫女の姿と、目の前の華奢な少女を一致させようと努力しつつ、ハルユキはどうか口を動かした。

「え、ええと……え、そうだ、今日はその件で色々話があつて……たぶん学校じや七時までに話が終わらないから、僕の家で……つてことになつて、もう図書館先輩たちにも連絡してあるんだけど……西楚宮さんは、大丈夫？」

すると話は、なぜかびくつと周囲のあたりを擴張らせ、ややスロー気味にダイブした。

【U-V】 そういうことならば、私もお邪魔させて頂きたいと思うのですが】

「あ……やっぱ、時間遅くなつちやうと厳しいかな……？」

【U-V】 いえ、それも問題はないのですが……その集まりには、いまのメンバーが全員集まるのですか？ 具体的には、フリーねえも……？】

フリーねえとはつまり倉崎楓子、すなわちスカイ・レイカーのことだ。彼女には黒書姫から連絡して貰うよう頼んであり、結果は快諾ということだった。ハルユキが「もちろん」と頷くと、話はいつそう難しい顔で俯いた。

——もしかして、苦手なのかな……？ 昨日、生徒会室で昔の話を聞いた時は、特にそんな感じもなかったけど……。

そう考え、ハルユキが口ごもっていると、話は妙に決然とした表情で両手を持ち上げ、ホロ

しめて更に叫ぶ。

「ういうい——、会いたかったですよ、ういうい——!!」

風子の体の下から突き出た細い右手が、痙攣するように宙を叩いた。

『U—V 待ってください、やm、フーねえ、いきがてkまるん』

「あたしに断りもなく、こんなに大きくなっちゃって……っ！ でも大丈夫ですよ、また昔みたいにかわいがってあげちゃいますから……っ!!」

『U—V だれk、たまアけてくだ』

「あめん、ういうい……ういうい——っ!!」

……四壁宮さんがミスタイプするの、初めて見たなあ。

キタチン寄りの床で立ち尽くしつつ、ハルユキはそんなことをぼんやり考えた。左隣ではタカムとチュリがこちらも唖然と眼を丸くし、右では黒雪姫がやれやれと頭を振っている。

ソファ上の修業場はしばらく終わりそうにないので、ハルユキもぶるぶる頭を動かしてから、黒雪姫に小声で話しかけた。

「……あの、先輩、前に、第一期ネガ・ネビュラスのメンバーの中で、リアルで会うようになったのはフーコさんともう一人だけだ、って言ってましたよね。それって、四壁宮さんのことですよ、ね？」

「シ……、よく覚えてるな。その通りだ」



「でも、先輩はこうも言ってたんです。フリーコさんが、たった一人現実世界でも友情を結んだ相手だ、って。ちよっと矛盾してるように思えて、気にしてたんですけど……それはつまり、あの……アリスアサマが……」

ハルユキの言葉に、黒雪姫は大きく苦笑しつつ頷いた。

「ああ、まあ……そういうことだな。私は誰ともちろん戦友のつもりだが、それ以上に誰はフリーコの……何というか……」

少し言葉を切ってから、ハルユキたちに向き直り、説明口調になって続ける。

「キミたちは、フリーコがかつて（ICBM）と呼ばれていた理由はもう知っていたかな？」

「あ、ええ、ニコに聞きました。領土戦で、支援役をひとり背負って、敵陣の最後方に特攻する戦法を使ってたからだ、って」

ハルユキが答えると、うむとひとつ頷く。

「その通りだ。敵軍の戦列が伸びている時などは実に効果的だったが、レイカーにくつついていく支援役は、そりやもう大変なめに遭ったのだ。空中から、支援に遭ったポイントに落とことされたり、敵の大群に追い回されたり、時として弾頭代わりに敵拠点と真ん中に叩き込まれたり、な。……もう薄々察しているかもしれないが、その支援役を務めていたのが誰だ。彼女、（レイカー専用オブション）だったんだよ」

「……お、おぼしゅん……」

頬を引きつらせ、ハルユキは繰り返した。再びソファのほうを見ると、助けを求めるように空中に伸びていた謎の腕が、ぱたぱたと倒れたところだった。

——約三分後。

ダイニンダテールの上座に黒雪姫、向かって右にチユリ、タタム。左に楓子と謎。そして正面にハルユキという配置で、一同は改めて腰を降ろした。卓上には、ハルユキが淹れた紅茶のカップと、チユリが自宅から運んできてくれた、チユリママお手製のサンドイッチの大量が置かれている。

ヒタスとバストラムをたっぷり挟んだハムサンド、チユダーチーズにルッコラやアスパラを合わせた野菜チーズサンド、黒いライ麦パンにスモークサーモンとアボカドを挟んだサンドイッチなどがうずたかく積み上がるさまは、まさしく壮観だ。楓子の熱意な挨拶にしばらくぐったりしていた謎も、眼を丸くして料理に見入っている。

「いつもいつもすまないな、チユリ君。母上に、くれぐれもお礼を伝えておいてくれ」

「いーんです、ママもハルに友達が増えて喜んでますから！」

黒雪姫が頭を下げ、チユリがにこやかに応じ、ハルユキが複雑な顔をするという一連の儀式が終了したところで、まずは頂きますの唱和。三角に切られたサンドイッチの山に、六本の手がいつせいに伸びる。

全種類を一切れずつ食べ終えた謎が、いつにないスピードで指を躍らせた。

【U】 とても美味しいのです。先ほどのサツちゃんの話からすると、レギオン会議の前には、いつも倉嶋さんのお母様が料理を作って下さっているのですか？」

「名前がいいよ！」

と前置きしてから、チユリは限れくさそうに頷いた。話が運動性失語症によって音声で喋れないことは、最初の自己紹介の時に告げられているので、途惑うことなく喋り続ける。

「あたしがネガ・ネビュラスに入れてもらったのは二ヶ月前だから、まだ会議にはそんな何回も参加してないんだけどね。でも、昔からハルんちにあたしとタツくんが集まる時は、ママが三人分の料理作ってくれてたんだ。さっき、六人分お願いって言ったら、昔の二倍だって驚いてた」

【U】 そういえば、チユリさんと黛さん、有田さんは、幼馴染みなんてしたね」

そこで一度指を止め、話は透明感のある大きな瞳で、向かい側に座る三人を順に見つめてから文字列を連ねた。

【U】 幼馴染みの三人が、全員バーストリンカーになり、しかも同じレギオンで共に戦っているというのは奇跡なのです。現実の絆は、とても大きな力を持っています。私とサツちゃん、フーねえも、かつて現実世界で絆を結びましたが、そうなるまでには長い長い時間が必要でした。そして、恐らくそれは遅すぎたのです」

発言を読んだ途端、黒雪姫と楓子が、「話……」「ういうい」と声を上げる。話はちらりと二

人に視線を向け、様やかな——しかしどこか哀切な笑みを浮かべる。

「UIV 私たちは、サッちゃんを追いつめていたけれど、フリーねえが秘め続けていた望みの深さ、大きさを、互いに思いやることできまめました。ゆえにサッちゃんは六王たちに追われる身となり、フリーねえはアバターの両脚を失い……最終的に、レギオンそのものも崩壊へと至ってしまった。私たち三人だけでなく、もっと多くのメンバーと、もっと早く現実世界の絆を築いていれば、違う道もあったかもしれないと、私はいまでも悔いているのです」

びたりと停止した、露の手を——隣に座る彌子が、そっと握った。その世草は、先刻とは打って変わって優しく、いたわりに満ちているように思えた。

「でも、わたしたちはこうしてまた出会いましたよ、ういうい」

眩し、にこりと微笑む。論がはっとしたように眼を見開く。

「二年半もの時間が流れてしまいましたが……取り返しのつかないことなど何もないと、わたしも、サッちゃんも、その小さな箱さんに敬まりました。サッちゃん再び加速世界に王として立ち、わたしはもう一度両脚を取り戻した。ですからね……」

「——我々は、確信しているのだ」

と、黒雪姫が言葉を引き継いだ。紙ナプキンで口もとをぬぐい、びんと背筋を伸ばした。露の王は、毅然とした口調で言った。

「露（無制限中立フィールド）に封印されたままのお前の本体も、必ず取り戻せる……たと

え相手が無敵の『神』だろうと、な」

山ほどのサンドイッチが綺麗に消滅し、大皿を片付けて紅茶のお代わりを淹れたところまで、ハルユキは我慢できずに質問の声を上げた。

「あの……、さっき先輩が言ってたのは、どういうことなんですか？ 四柱宮さんの本体が、無制限フィールドに封印されてる……って？ 僕は昨日、四柱宮さんと通霊フィールドでタタグ対戦したんですが……それとは別に、無制限フィールドで何か問題を抱えてるってことですか？」

右側では、チユリも同じように首を捻っている。しかしタタムには何か思い当たることがあるようで、躊躇いながら口を開いた。

「マスター、もしかしてそれは……《無限EK》のことですか……？」

「お、さすがはハカセ、詳しいな」

黒書姫は頷いたが、ハルユキには何のことやらさっぱり解らない。

「む、むげんいーけー？ タタ、それ何……？」

体ごと向き直って睨ねると、タタムは指先で眼鏡のブリッジを押し上げながら、遽に質問を返してきた。

「ハル、君は、一人のバーストリンカーを消滅させる……つまりポイント全損、ブレイン・バースト強制ブインストールに追い込む手段が加減世界に幾つ存在するか、知っているかい？」

「え……？ そんなの、何度に対戦して勝ち続けるしか……」

と反射的に答えてから、二ヶ月前に自分自身が陥った消滅の瀬戸際のことを思い出し、付け加える。

「……いや、それと、無制限フィールドでの《決闘》もあるな。《サドンデス・デュエル・カード》に互いの全ポイントをチャージして、勝ったほうが総取りする……。あ、サドンデスと言えば、レベルリバー同士の特例ルールもあるか……」

「うん、それで三つだね。他には？」

すると今度はチユリが、口に含んだ紅茶が塩水にでもなってしまったかのような顔で言った。

「あとは、あれだね。《物理攻撃》……だっけ？ リアルで襲ってクルマの中とかに監視して、直結対戦でポイント根こそぎ奪うってやつ。許せないよね」

タカムも厳しい顔で頷き、付け加えた。

「四月に僕らを追い込んだ彼も、広義のPKと言っているかもしれないな。……ともかく、それが四つ目。そして五つ目が……ばくがさっき言った《無限EK》、正式には《無限エネミー・キル》だよ」

「エネミー・キル……。エネミーを殺すこと、じゃないよな。エネミーで殺す……？」

「そう……その通りだ」

ここで闇雲殿が声を発したので、三人は口をつぐんでそちらを見やった。紅茶のカップに音を付けてから、黒衣のレギオンマスターは静かに話しはじめた。

「ハルユキ君には昨日も説明したが、無制限フィールドには、《巨獣級》や《神獣級》といった凄まじい攻撃力を備えたエネミーが棲息している。とは言え、その中でも上位の本当にどんなでもない奴らは、フィールドを自由に徘徊しているのではなく決まった領域に留まっているので、近づかなければ危険はない。だがそれは、道に言うと、もし何かのはずみでテリトリに突っ込んでしまい殺されると、脱出が非常に難しくなるということでもあるのだ」

「え、ええと……っ」

ハルユキは視線を彷徨わせ、かつて何度か訪れた無制限中立フィールドのルールを思い出そうとした。

あの世界でHPゲージがゼロになる——つまり死んでも、バーストリンカーは現実世界に帰還するわけではない。視界が灰色になる《幽霊状態》で死亡地点に留まり、一時間後に蘇生するのだ。

そして無制限フィールドでは《バースト・アウト》コマンドも使えない。自覚的に現実世界に戻る、通常のフルダイブVRゲームで言えば《落ちる》には、駅や観光名所といったランドマークに用意されている《脱出ポイント》のポータルを通り抜ける以外の方法はない。

その二つのルールを踏まえた上で、先ほど黒雪姫が言った状況を考えてみる。

位置固定型巨大エネミーの縄張りについて、タゲられ、とてつもない威力の攻撃を喰らって即死したとする。すると視界に「YOU ARE DEAD」と表示され、実体のない地縛霊状態で蘇生ゲージが溜まるのを待つことになる。一時間後、ようやく生き返って動けるようになるが――そこはまだ、巨大エネミーのターゲット範囲内なのだ。もちろんすぐさま再攻撃され、また死ぬ。一時間後、生き返り……また死ぬ……。

「……………き、キリがないじゃないですか!」

とハルユキが叫ぶと、黒雪姫が陰鬱な表情で頷いた。

「そう。だから（無限）なのだ。（無限エネミー・キル）とは、その状況を意図的に作り出す……つまり、ポイントを全損させたいバーストランカーを巨大エネミーの縄張りの奥深くに置き去りにして、一時間ごとに何度か何度か殺させるという方法だ。もちろん、脱出の可能性がゼロというわけではない。生き返り、即死するまでの間にわずかでも移動できれば、次はその地点で蘇生するわけだからな。少しずつ距離を稼ぎ、いつかはエネミーの縄張りから出られるかもしれないが、一度の死んで減少するポイントの量は、対エネミーの場合は10固定だからな……。十回死ねば、100。百回なら1000ものポイントを失うことになる。そうそう耐えられるものではないよ」

我が身がその状況に陥ったらと想像し、ぞっと背筋を震わせていたハルユキは、掠れ声で

相手を打った。

「です、よね……とくにレベルアップ直後や、高いアイテムを買った後なんかは、大量のポイントが消費してるわけですし……」

しかしすぐに、あることに気付いて眉を寄せる。

「で、でも、その《無限EK》……仕掛けるほうもけっこうリスクイじゃないですか？ 縄張りの奥に置き去りにする前に、自分が死んじやうことだって……」

「そう、ですから、通常は縄張りの外部から放り投げたり、爆発系攻撃で吹き飛ばしたりといった手段が用いられるのです」

答えたのは楓子だった。暫の端に穏やかな笑みを浮かべたまま、恐ろしい言葉を付け加える。「ま、わたしは一度、運良く名刺を特定できた《PK》野郎を、ゲイルスタスターを使って神獣殿の頭の真上に落つこととしてやりましたけどね。……ともかく、普通の《無限EK》ならば

そうそう縄張りの奥深くにまでは運べないので、物凄く頑強れば脱出できないこともないのです。利用されるエネミーが強くなればなるほど仕掛ける側のリスクも高まるので、脱出に要する距離は短くなるものですしね」

なるほど、とハルエキたち若手三人が同時に頷く。

その時、今まで沈黙を守っていた諷が、ひとやかに指を動かした。

「U・Vでも、どんなセオリーにも例外はあるのです」

神秘的な雰囲気を持つ小学四年生は、透明な眼差しをどこか遠くに向けたまま、ゆっくりとダイビングを続けた。

「U」 加速世界で最強のエネミーの纏束りの、一番奥深くにまで突入して死に、もう戻ってこれなくなってしまう三人のうちの一人……通常対戦フィールドには入れても、加速世界の本質たる無制限中立フィールドには二度とダイブできないバーストリンカー。それが、私なのです」

昨日生徒会室で聞いた、第一期ネガ・ネビュラスの崩壊・消滅にまつわる話のあらましを、ハルユキはすでにタムとチユリにも伝えていた。

無制限中立フィールドの中央に存在する、絶対不可侵の《帝城》。その四つの門を守護する最強のエネミー、《四神》。第一期のメンバーたちは、ブレイン・バーストの二つ目のタリア案件と予想される《帝城封鎖》を目指し、四神の突破に挑んだ。そして――全滅した。

ハルユキが聞かされたのはそこまでだ。肝心な、なぜたった一度の全滅がレギオンの崩壊にまで繋がったのかという理由まではまだ知らない。

しかしハルユキは、いまの《無限BK》の話から、おぼろげな推測へと迫り着きつつあった。大きく息を吸い、海流を、風子、謎を順に見て、ハルユキは口を開いた。

「それは、つまり……四葉宮さんは、二年半前に《四神》の纏束りの奥深くで死んでしまい、

そこから生還できなくなってしまう……ということなんてすね？」

こくりと首を動かして、誰は空中を叩いた。

「U V　そうです。炎熱耐性の高い私が一隊を率いて挑んだのは、帝城の南門を守護する炎の大鳥（スザク）。長射程の大炎プレスと、わざ爪による物理攻撃、全方位への範囲熱攻撃を行うという難敵でした。しかしそのデータはあったので、対応する作戦を立て、門が見える位置まで侵入に成功したのですが……そこで、スザクの攻撃パターンが変わったのです。全身を大炎に包んでの超高速チャージに対応できず、戦列は崩壊しました。私の耐性など気休めにもならなかった。せめて仲間の退路を作るため、私はスザクを縄張りの最奥部まで引っ張り、そこで死にました」

「東門の（セイリュウ）、北門の（ガンブ）も、途中から攻撃パターンが、より凶暴なものへと変化したそうだ」

眩くように言った黒雪姫は、唇を軽く噛んでから続けた。

「……私がレイカーと共に当たった西門の（ビヤッコ）もそうだった。本来なら、私たちもビヤッコの縄張り奥深くから戻れなくなるはずだったのだ。だが、レイカーが最後の力で、私を抱えて飛んでくれてな……」

「当時、わたしはもう足を無くして、感傷では役立たずでしたからね」
同じく痛みに耐えるような表情で、楓子も口を動かした。

「せめてサツちゃんだけは生還させないとして、心意を振り絞って必死で飛びました。今でもたまに、背中ですぐ後ろでがちゃん、がちゃんてビヤフロの牙が鳴る夢を見ますよ。……（四元素）の中で一人だけ生き残ってしまったわたしには、それでも軽すぎる罪ですが……」

「UIV あの時フリーねえが頑張ってくれたことには、私も、きつとグラフさんやアタアさんも感謝しているのです」

「そうだと、レイカー。私やお前が四神の門に封印されていたら、きつと（子）を持とうと考えることもなかっただろう。必然、（シルバー・クロウ）も、クロウの良きライバルである（アフシム・ローラー）も誕生しなかった。第二期ネガ・ネビュラスの結成も有り得ず……我々の、この再会もなかったはずだ。お前の決死の飛翔が、未来を繋いでくれたんだ」

混雪姫の、穏やかだが決然とした言葉に、楓子は伏せていた睫毛を持ち上げ、そっと頷いた。その光景を、胸に込み上げるものを感じながらハルユキは無言で見つめていたが、同時に湧き上がってきたひとつの疑問を抑えられず、機を見ておずおずと口を開いた。

「あの……、先輩、四壁宮さんのデュエルアバターが、無制限フィールドの（帝城）の南門に事実上封印されてしまったという状況は解りました。でも……僕は昨日、四壁宮さんと……（アーダー・メイデン）とタラダを纏んで対戦したんです。つまり、四壁宮さんは今もパーストリンカーで……二年前前にポイント全損はしなかったってことですよね？（無限EK）状態から、どうやってポイントを守ったんですか……？」

「いい質問だ」

黒雪姫はそう言うのと、再びタタムに視線を向けた。

「それでは、我がレギオンの誇る頭脳に、もう一度議論をお願いしようかな。タタム君なら、すでにその方法も推測しているだろう？」

初対面の謎の魔術師とハカセキヤラが固定しつつあるタタムはやや複雑そうな表情を見せたが、それでも「はい、マスター」と素直に答えてハルユキに向き直った。

「それじゃあ、ハル。今度は、《無限限中立フィールドから離脱する方法》だ。幾つかあるか解るかい？」

くい、と眼鏡を押し上げる幼馴染みの顔を、ハルユキは唇を尖らせながら上目遣いに覗き込んだ。

「おい、いくらオレでもそれくらい知ってるぞー。ていうか、常識じゃないか。答えは（一つ）だろ。無限限フィールドから出るには、離脱ポイントの《ポータル》を通るしかない。その大原則があるから、《無限限E.K.》も成立するんじゃないか」

「ぶっぶー———— はーずれー!!」

と叫んだのは、こともあろうにチユリだった。

タタムに向かって、いたずらな猫を思わせる笑みをにんまりと浮かべたもう一人の幼馴染みは、ハルユキに向かって右手の指を二本突き出してみせた。

「答えは三つです」

「げっ……う、ウソ、み、三つも!? なんかのアイテム? それとも必殺技……?」

倒れてるハルユキに、チユリはもう一度「ぶー」と不正解ブザー音の口まねをしてから、指を折り折り答えを列挙した。

「二つ目の方法は、(ニューロリンカーのグローバル接続を切ること)。三つ目の方法は、(ニューロリンカーを首から引っこ抜くこと)です」

「な……」

余りにも予想外の言葉に、しばし絶句。ようやく思考を再起動し、必死に喚く。

「そ……そんなのズルイぞ! いや、ズルかないけど……それ、現実世界の話じゃないか!」

「あれ、別にタツくんは、(加速世界でできる方法)なんて言っていないよ!」

「そ……そりやそうだけど、でも加速中にニューロリンカーを引っこ抜くなんて、自分じゃできないじゃないか!」

「あれ、別に(自分ひとりでする方法)とも言っていないよおー?」

チユリと、幼い頃から数限りなく繰り返してきたぐいの言い合いをしていると――

不意に左側から、穏やかな笑い声が上がった。視線を向けると、愉快そうに笑う黒雪姫と楓子のみならず、誰までもが無言の笑みを零していた。

十秒以上も笑い続けてから、黒雪姫がまず口を開いた。

「ははは……、まったくいいトリオだな、君たちは。チユリ君が正解だ。《無制限中立フィールドの内部から自発的に離脱する方法》なら確かに一つだけだが、《現実世界から受動的に離脱させてもらう方法》もまた存在するのさ」

こはん、と吸い出し、表情を改める。

「――二年半前、第一期ネガ・ネビュラスの総員は、無謀と知りつつ《帝城攻略》に挑んだ。しかし、それは決して集団自殺ではなかった。ゆえに我々は、ひとつのセーフティを設定していたのだ。ニューロリンカーをグローバル接続する際、通常の無謀ではなく、踏み台となるホームサーバーなり据え置きPCなりを有線で経由するようにしたんだよ」

「踏み台……」

唖いたハルユキに、誰かチャットで補足する。

「U-V として、その踏み台マシンに特定のタイトルのメールが着信した際、自動的にグローバルネットを切断するよう設定したのです。仮に部隊が壊滅した際、最初に離脱ポイントから現実世界へ復帰できた者が、レギオン全員にそのメールを発信する。その瞬間、皆はDISCONNECTIONで自動バースト・アウトする。つまり、たとえば《無限EK状態》に陥った者が出ようともし、少なくともポイント全組は免れるのです」

「は……な、なるほど……」

ハルユキは思わず嘆息を漏らした。よもや、そんな手段で無制限フィールドから脱出できよ

うとは、これまで思ったこともなかったのだ。

しかし思い出してみれば、二ヶ月前に篠馬区は桜台のケーキショップをタタムと共に訪れ、赤の王ニコに心意システムを調練して貰った時も、たしか無線ではなく有線でグローバル接続したはずだ。あの部屋のルータ装置にも、同じサーフティが仕込まれているに違いない。

まだまだ知らないことがいっぱいあるなあ……とハルユキが放心していると、隣でタタムが軽く手を挙げた。

「すみません、マスター。ばくも、無制限フィールドからのデイスコネクト離脱については、詳しいことを知らなくて……。その場合、デュエルアバターはどうなるんですか？」

「ん……。それがな、やや複雑な状況が生まれてしまうんだよ。無制限フィールドから、ネフト切斷やニューロリンカー除装といったイレギュラーな手段で離脱した場合、デュエルアバターは一応フィールドから消滅する。その後は、通常対戦ならば問題なく行えるのだが……再び無制限フィールドにダイブすると、現実世界の所在位置ではなく、かつて消滅した座標に出現してしまうのだ」

「え……え、と……？」

囁きに呑み込めず、ハルユキが声を上げると、楓子がびつと指を一本立てた。

「鶴さん、あなたは、わたしが長いこと暮らしていた、無制限フィールドの旧東京タワーの天辺にある家を覚えていますよね？」

「は、はい、もちろん。忘れるわけないですよ……僕、あそこからレイカーさんに落ちることさ
れ」

「わたしは忘れちゃいました。それはともかく、わたしの現実の家はここ杉並（杉並区）の南の端にある
ので、港区（港区）の国東京タワーまではちよっと遠いんですよ。でも、あの塔の家に行く時は、
いちいち杉並から移動していたわけではないのです。タイマーでグローバル機體を自動切斷す
ることアバターの位置情報（位置情報）を塔の上に固定し、次回ダイブ時にも同じ場所に出現するように
していたんですよ」

「あ……ああ、そうだったんですね！」

深く頷き、思考を進める。

四葉宮（四葉宮）——アーダー・メイデンは、二年半前、超級エネミーたる《四神スズク》のテリ
トリー奥深くで果てた。本来なら、一時間経って發生した直後に再び即死すること無限に繰
り返し、やがてバーストポイント（バーストポイント）を全損していたはずだ。

しかし、《メール着信による自動切斷》というセーフタイのおかげで、ポイントがなくなる
前にデイスコネクションし、現実世界に復帰した。だから昨日、ハルユキとタツタを組んでの
通常対戦も可能だったわけだ。

だが、その復帰は限定的なものだ。バーストランカー究極の戦場たる無制限中立フィールド
にダイブするための《アンリミテッド・バースト》コマンドを唱えた瞬間、誰は物理身体が

横たわる位置ではなく、密城南門を守護する（四神スザク）の目的的に出現してしまう。当然、瞬時の猛攻を浴びて即死。再び恐怖の無限E.K.状態へと陥（おち）つてしまう……。

「……だから、（封印）、なんてすね……。そこから解放されるためには、誰かがスザクの足元まで行って、ダイブ直後のアバターを救出するしかない……」

ようやくそこまでを理解したハルユキは、掠（さら）れた声で呟（つぶや）いた。

こくりと頷き、誰は十指を滑らかに走らせた。

【U】 私だけでなく、東門（セイリュウ）の目の前では四元素の一人である（アタ・カレント）さんが、北門（テンブ）の足元には同じく（クラファイト・エッジ）さんが封印されています。他のメンバーをテリトリから脱出させるため、この三人で……いえ、西門（ビヤッコ）を受け持っていたサッチャンとフリーねえも、四神のターゲットを限界まで引き続けたのです。幸い、他のみんなは無限E.K.状態になることなくテリトリ外に脱出できたのですが、その過程で何度も何度も死に、ポイントを大量に失いました。とても、レギオンの領土を維持していくのは不可能だったのです。私たちは領土を全放棄し、レギオンそのものも解散せざるを得ませんでした。かつてのネカ・ネビュラスは、そのようにして消滅したのです。誰のせいでもない、誰が悪いのでもない……」

そこで、誰の指が強く軋（こ）んだ——ように、ハルユキには見えた。

ハッと視線を上げると、いままではほとんど表情を見せることのなかった九歳の少女は、くし

やりと顔を歪めて強く唇を噛んでいた。再び指が動き、空気を引き裂くような激しいタイピングを行った。

「U—V いえ、強いて言うなれば、あの人……サツちゃんを欺き、追い詰め、そして裏切ったあの人の」

「誰」「ういういー」

という二つの声が、文字列をそこで停止させた。ホロキーボードの上で両手をぎゅっと握り、深く深く誰の肩を、誰の腰がそつと抱く。

その様子を、黒雪姫は少し離れた椅子から何かに耐えるような表情で見つめていたが、やがて静かに言った。

「誰、悪いのは私だ。レギオン破壊に関する責任の全てはこの私にある。衝動のままに最初のきっかけを作ってしまったことも……全てが終わったのち、心を折られて、二年間もロークルネットに閉じこもってしまったことも、な。だが私は彼に……ハルニキ君に出会い、再び立ち上がる力を貰った。もういたずらに過去を悔い、眼をそむけ続けたりはしない。あの者とはいずれ決着をつける。そのためにも、鳴。私はお前の《封印》を解きたい。帰ってきて欲しいんだ、新しいネガ・ネビュラスに」

交わされる言葉の全てを理解できたわけではなかった。誰の言う《あの人》とは誰なのか。かつて黒雪姫に何があったのか。しかし、今はそれを訊ねるべき時ではないと思えた。だから

ハルユキも身を乗り出し、語に向かつて精一杯真剣に語りかけた。

「四葉宮さん、僕からもお願いします。もう知ってると思いますが、僕のアバターには今、《タロム・ディザスター》っていう強化外装が寄生してて、これを一週間以内に《浄化》しないと、僕は王たちに賞金を掛けられて、まともに対戦もできなくなっちゃうんです。僕は……もともとちょっと強くなりたいじゃない。黒書筆先輩や、レギオンのみんなと一緒に戦い続けるために、少しでも立ち止まってはられないんです。お願いします……僕を、助けてください。」

しばらく雨までのハルユキなら、至んだプライドが邪魔をしてとても口に出せなかったであろう言葉だった。しかも多くの苦しい戦いのあいだに、ハルユキは《仲間と共に戦う》ことの意味をわづかながら学んでいた。時には意地を張り、我を通すべき場面もあるだろう。でも、一人で何でもできると強がるのは、愚かな思い上がりというものだ。誰だって、知らず知らず、いつも誰かに助けられているのだ。

ハルユキの懸命な言葉を受け止めかねたかのように、語は視線を俯けた。しばしの沈黙。指が小さく持ち上がり、躊躇いながらも、そつと舌を叩く。

【UI】私が一年以上もサアちゃんや、フーねえや、他のレギオンメンバーとの連絡をかたくなに断んだのは、まさにその提案を……封印を解く、という言葉を怖れたからなのです。タミッターを全て解放した《四葉》は、想像を絶する攻撃力を秘めています。私のアバターを回収

しようとするれば、その人も同じく（無限E.V.）状態に陥（おと）つてしまふ危険が大きすぎるのです。四方門に封印されたのがたった三人だけで済んだのは、むしろ幸運でした。これ以上、仲間犠牲を増やしてはいけません。私は……きつとグラフさんや、アデアさんも、そう思つて接触を断ち切ったのです。ほんとうは、私も――

そこで抱（か）ぎたりと止まり――

謡（うた）は、動かないはずの唇（くちびる）を、かすかに震（ふる）わせた。静寂（せいき）の中に流れた言葉を、ハルユキは耳（みみ）ではなく意識（いし）で感じた。

――会（あ）いたかったのです。

白い頬（ほ）に、すうつと二つぶの雫（しずく）が流れた。謡（うた）の風子（ふうこ）が、自分も目尻（めじり）を濡（ぬ）らしながら、小さな体をぎゅつと抱（か）きしめた。

今度は一切（いっけつ）拭（ぬ）うことなく、謡（うた）は楓子（ふうこ）の胸（むね）に顔を埋（うめ）、激（げき）しく肩（かた）をわななかせた。かすかな、しかし確（たしか）かな鳴咽（なげん）が響（ひび）き、当時の事情（じきじょう）を直接（じか）に知らないハルユキや、タム、チユリも、何（なん）度（ど）となく瞬（みづ）きを繰（くり）返（かえ）した。

ほんの三十秒（さんじゅうびょう）ほど抱（か）擁（よう）を解（と）き、楓子（ふうこ）がポケットから出したハンカチで頬（ほ）を拭（ぬ）いてもらった謡（うた）は、恥（は）じ入（い）るように俯（うつむ）いたままタイピングを再開（さいかい）した。

【U—V すみません、話を続（つづ）けます。……私は、自分（みづか）から新しいネガ・ネビュラスに接（け）触（ふ）する気（き）はありませんでした。サッちゃんたちの戦（いくさ）いを、加速（かそく）世界の隅（すみ）つて見（み）守（まも）っていられば、



それで満足だったのです。ですが、私の学校の飼育委員会が廃止されることになり、家のなくなる飼育動物の引き受け先がどうしても見つからず……私は迷ったすえに、サッちゃんが進学した梅郷中学校に依頼のメールを出しました。まさかサッちゃんが私の名前に気付くはずはない、と思ういつばうで、心のどこかでは気付いてほしいとも思っていたのです」

「気付くさ。ういいういの名前は目立つからな」

黒雪姫が微笑みながら言うと、まだ眼が赤いものの、顔はきゅっと唇を失らせてみせた。

【U】V 私を選んで名前ではないのです。……メールの返事が、学校管理部ではなく、生徒会副会長名で来た時は、ほんとうに迷いました。ですが、動物のためだと自分に言い聞かせて、私はサッちゃんにダイブボールで連絡を取りました。そして、最初の言葉が「

「交換条件だ。管理部を説得して飼育小屋は用意する。だからお前は戻ってこい」

黒雪姫が自ら再現したその言葉に、一同ばかんと口を開ける。驚きはすぐに、やれやれという苦笑へと変わる。話も微笑みとともに文字列を繋げた。

【U】V サッちゃんの、せっかちでガサツで意地っ張りなところ、全然変わってないのです。何を言おうか色々考えていた私がバカみたいです。いきなり真正面から切り込まれたので、つい「話を聞くだけなら」と答えてしまいました。その後もし刷しにベースに巻き込まれて、気付いたら今ここにいますのです。黄、リアルで会うのを承知させられた時とまったく同じなのです」

その発言を読みながら、ハルユキは自分が黒書姫に誘われた時のことを懐かしく思い出していた。

——いきなりバーチャル・スカッシュ・コーサーに現れて、最初の言葉が「もっと先に加速したくはないか、少年」だもんなあ、意味が知りたくてついラウレンジに行っちゃったら、たちまち直結、すかさずブレイン・バースト転送で、考える暇もなかったよな。

——でも、ああいうふうに誘ってくれなきゃ、僕はきつと尻込みしてた。この人は確かにせっかちだし意地っ張りだけど、それ以上に何事にも真剣なんだ。きつと今回の《災禍の鑑・浄化計画》だって、僕の知らないところで一生懸命頑張ってくれてたんだ……。

と、そこまで考えたところで、ハルユキはふと一つの疑問を感じ、対面に座る黒書姫に向かって小さく手を挙げていた。

「……あ、あの、先輩」

「ン？ 何だい？」

「ええと……先週のレースが終わったあと、この場所で《災禍の鑑》の寄生をどうするか話し合った時、《浄化能力者》に心当たりがあるから任せあつて言っていましたよね。それって、四葉宮さんのことですよわね？」

「ああ、その通りだよ」

こくりと頷くので、更に問いを重ねる。

「でも、連絡する方法はあったんですか？ さっき四壁宮さんは、二年以上も連絡を断念に拒んだ、って……」

「U-V 確かに有田さんのおっしゃる通りなのです。私は、以前使っていたアドレスを破棄していました。サツちゃんから連絡する方法はなかったはずなのです。もし私が飼育小屋の件で梅郷中学校にメールしていなければ、どうするつもりだったのですか？」

誰にも不思議そうに首を傾げながらそうタイプすると、黒雪姫はにこりと優しくな笑みを浮かべて答えた。

「決まっているじゃないか。メールアドレスが破棄されていても、私は誰の通う学校と学年だけは知っているのだ。松乃木初等部の校舎に直接乗り込んで、四年生の教室を端から確認すれば済む話さ。だから？」

それを聞いた途端、すーっと顔のあたりを青さめさせた話は、どこもない指使いて応じた。

「U-V 飼育小屋の件を梅郷中にお願ひするが迷った時、そうしなさいという声が聞こえたのです。あれは絶対天の声なのです」

これにはハルユキたち三人と、楓子までもが声を上げて笑った。いまだ夢ろしように首をすくめている誰の背中を、楓子がぼんと叩く。

「ね？ ういうい、あなたが戻るべき場所に戻る時が来たんですよ。わたしもそうでした。旧東京タワー屋上の小さな庭に、ある日傷ついた一羽の鴉さんが逃げ込んできた時、わたしも確

かに感じたんです。停滞した世界に、もう一度風が吹くのを……」

「その通りだ、誦。私はたしかにせっかちだが、もう世のように生き急いではいない。お前のアバターを四神の封印から解き放つ作戦も、今なら可能だと信じるからこそ、こうして言っているのだ。戻ってこい、と」

黒雪姫が、漆黒の瞳でまっすぐ誦を凝視する。対する誦も、虹彩に炎の色が走る瞳でその視線を受け止める。

【UIV】 私も、自分のためだけでなく、有田さんのアバターを（浄化）するためにも封印状態から解き放たれたいという思いはあるのです。寄生するのがあの《サ・ディザスター》ならば、浄化するのにとても二十分では足らないので、通常対戦フィールドではなく無制限中立フィールドで行う必要がありますから。私は昨日、有田さんとタッグ対戦して、絶めた力を存分に見せて頂きました。確かに、王たちの企みて歩みを滞らせてはいけません」

その文章を読んで、ハルユキは思わず声を出してしまった。

「えっ……で、でも、僕は昨日いいとこぜんぜんなくて……一方向的にやられちゃっただけだし……」

すると誦は、ポニーテールを揺らしてハルユキに向き直り、幼きの中に不思議な慈愛を感じさせる表情で微笑んだ。

【UIV】 有田さん、あの《未法》は、サッちゃんに教わったのですか？」

「なに？」

と眉を寄せたのは黒雪姫だ。そちらをちらりと見て、肩を締めつつ必死に答える。

「あ、いえ、その、教わったって言うが、一度見せてもらったんで、それでちよっと……僕も練習してみようかなって……」

【U】V だと思いました。サッチんの技とは、呼吸は同じでも壁が違いましたから、有田さんの対戦には、逆か遠いところを目指し続けようという意思が感じられます。昨日負けて、今日も負けても、挫けずに明日もう一度挑戦しようという気持ちがあるのです。レベル5にもなつて、一步一步進むことの大切さをまだ忘れていないバーストリンカーは、そう思うものではないのです」

「え……いや、そのお……自分では、そんなこと……」

誰かに褒められる、という状況にまったく不慣れたハルユキは、いたたまれずに真下を向いてしまった。すると、チユリの笑みを含んだ声が聞こえた。

「じわじわ進むのはハルの得意技だもんね！ 昔っから、何ても最初はあなしやタツくんより下手なのに、気付くと妙にウマくなってるのよね。まあ、ゲーム関係限定だけとき！」

幼馴染みが助け船を出してくれたことに内心で感謝しつつ、扉座に言い返す。

「げ、ゲームだけじゃないぞ！ 確か、（トウモロコシをどれだけ綺麗に食べられるか勝負）でも、最終的にオレが一番……」

「ハル、実利的じゃない度合いでは大差ないよ」

タタムの冷静なツッコミに、朗らかな笑いが生まれる。それが取まると、誰はびんと背筋を伸ばし、一同を順に見やってから――深く頭を下げた。

「UIV 迷いや悔れ、躊躇いは今もいっぱい感じているのです。でも、ここで一步踏み出さなければ、私は加速世界でも現実世界でも、永遠に今いる場所から進むことはできないでしょう。幽世と顕世は表裏一体、デュエルアバターが渡り付いている時は、現実の自分もどこにも行けないのです」

「その通りですわ……」

諭の発言に、隣に座る楓子がそつと頷いた。

「旧東京タワーに隠れ住んでいる間は、現実世界のわたしも、知らず知らずのうちに息を殺し背中を丸めて生きていた気がします。あの二年間よりも、猶さんが現れてからの二ヶ月間のほうが長く感じるくらいです」

その言葉を受けて、今度は黒書姫が深々と首肯する。黒い瞳には、きらきらと無数の星屑が渦巻いているように見える。

「そう感じて当然さ、フーコ。なぜなら、たとえブレイン・バーストを起動していなくとも、仲間と共に一つの目標に向かっていてる時、我々は常に《加速》している。誰がときどきするよきな興奮が、意識を強く、激しく駆動するんだ」

そして最後にもう一度、誰か十指を静やかに輝わせた。

「U I V」私も、昔みたいにとどきどきしたい。みんなと一緒に、途切れてしまった夢の続きを追いかけたいのです。サッちゃん、フリーねえ、チエリさん、麻さん、そして有田さん……」

一瞬の躊躇いを、細くしなやかな指先が決然と撃ち抜いた。

「U I V」お願いします。私を……私の移し身（アーダー・メイデン）を、スズクの封印から解き放ってください」

黒雪姫の立案した《実情の銀浄化計画》は、三つのフェーズから成っていたらしい。

第一段階は、四禁官論に現実世界で連絡をつけ、どうにか対話の場に引っぱり出すこと。

第二段階が、識を説得し、そのアバターを、無制限中立フィールドでの《無限EK状態》から救出すること。

そして第三段階が、識の浄化能力により、シルバー・タロウに寄生するタロム・ディザスターの因子を消滅させること――。

六月十八日火曜日午後七時二十分、ハルユキの直筆リビングダルームに於いて、第二フェーズ開始をいつにするかと親子に問われた黒雪姫は、迷いの欠片も見せずに即答した。もちろん、今この瞬間からだ、と。

場所をソファアセットに移し、リラクダスした姿勢で腰掛けた六人は、まずそれぞれのニューロリンカーを五本のXSBケーブルで数珠つなぎした。無制限フィールドへのダイブは、本来直結までにはする必要はないのだが、今回は例の《回線切断セーフティ》を用意しておかねばならない。ゆえに全員、ニューロリンカーの無償グローバル接続はキヤンセルし、代わりにホス

ト役のハルユキが有田家のホームスイーパーに有線接続した同線を經由することにしたのだ。こうしておけば、もし不慮の事故が発生して誰かが〈無限EK状態〉となっても、最初にボートから滑還した者がホームスイーパーに繋がるケーブルを引っこ抜けば、その時点で全員が加速停止できる。

もちろんその時は、誰を救出できないばかりか〈ミイラ取りがミイラに〉という最悪の事態が起こってしまうのだが、もうそれを怖れる段階は通り過ぎている。今はただ、万全の備えを整えたうえで、百パーセントの成功を信じて突き進むだけだ——というのが、現実世界での打ち合わせの最後に黒雪姫が発した言葉だった。

【U—V それでは、皆さん、よろしく願いますの、です】

という謎の発言に、黒雪姫、楓子、ハルユキ、タタム、チユリが一斉に力強く頷いた。まずこの五人がダイブし、内部での準備が全て完了してから誰もダイブするという手順だ。

五人は、ソファの上で眼を閉じると、大きく息を吸った。

黒雪姫がテンカウントを開始。ゼロのタイムシタに合わせて、レベル4以上のバーストリンカーにのみ許された、真の加速世界へ飛躍するためのコマンドを叫ぶ。

「一二三アンリミテッド・バースト!!」

久しぶりに見る〈無限中立フィールド〉は、地平線の彼方まで真っ白く凍り付いていた。

《氷雪ステージ》だ。空は灰色の雲に埋め尽くされ、冷たい微風に乗って細かな雪片がきらきらと舞っている。

「よし……まずは幸先がいいぞ」

地面を分厚く覆う氷を剣状の脚の先端で音高く突き、黒雪姫——馬の王ブラック・ロータスが言った。

「理想は《霧雨》か《暴風雨》だったが、遠距離視界が障害されるから……一瞬のタイムインダを狙うには、こっちでむしろ良かったかもしれないな」

「そうね、これくらいのみぞれなら、視界の妨げにはならないでしょうし」

隣に立つ風子——スカイ・レイカーが、空色の髪を揺らして頷く。

二人の会話が暗黙に理解できず、シルバー・タロウの丸いヘルメット頭を傾げさせたハルユキは、おずおずと訊ねた。

「あの……、なんで《氷雪》や《霧雨》だとラッキーなんですか？」

「火の属性を持つ《四神スズク》の力が弱まるから、ですね？」

と、即座に声を発したのは、ヘルユキの右側に立つ大柄な近接型アバター、シアン・バイル——タクムだ。更にその右で、黄緑色のとんがり帽子をかぶり左手に大きなベルを装備したライム・ペル——チユリが声を上げる。

「それなら、急がないとだね。いつ《豪雨》が来るかわからないから」

先聲のタタムはともかく、まだバーストリンカーになって二ヶ月ちよつとのはずのチユリにまで理解度で遅れを取っている感がひしひしと押し寄せてきて、ハルユキは慌てて口を開いた。

「じゃ、じゃあ、僕の羽根で飛んでいきましよう。四人でも、ぎりぎり運べると……」

しかし、最後まで言い終わらないうちに、黒書姫が軽くマスタを横に振った。

「いや、今回ばかりは、万が一にも他のバーストリンカーに邪魔されたくない。同時にダイブしている者が近くにいる可能性は低いが、空を飛ぶと目立つからな。千代田エリアまで、がんばって走ろう」

「あ……そ、そうですわ……」

しゅん、と静かかけると、数歩近づいてきた黒書姫が、調子を和らげた声で言い添えた。

「それに、今回の作戦の主役はキミだ。作戦開始まで、わずかでも翼を疲労させるわけにはいかない」

「は……はい！ 解りました」

——え？ 僕、主役？

返事の途中でびきーんとフリーズしたハルユキの背中を、楓子が優しく叩いた。

「頑張ってくださいね、鶴さん。大丈夫、あなたならできます」

「そうだよハル、君ならたとえ相手がどんなヤツだろうと、空で負けたりしないさ」

「ばきーんと決めちやつてよね、ハル！」

タムとチユリも言葉を重ね、ハルユキを除く四人は、一斉に深く頷き合った。そのまま、もとは高層マンションであつた水の塔の外壁開口部へと歩いていく。

……主役、って何するの？ まさか、よもや、もしかして、無敵の超級エネミー様の縛束りに一人で突っ込む……とか？

金属ボディの全身にだらだらと冷や汗を流しつつ、何だか胸にもこんなことあつたな、と記憶を探る。あれもしない半年前、同じくハルユキの自宅から無制限フィードに出撃した（炎城の臨時伏魔マンション）の時も、唐突に突撃役を命じられて愕然としたものだ。そりゃあ、あの頃と比べればそれなりに強くなつてゐつもりだけど、それにしたつてなんていつもいつも僕が怖い目に……。

などと数秒間後ろ向きな思考を巡らせてしまつてから、ハルユキはハッとして我に返つた。慌てて仲間たちの後を追うと、四人はもう、塔の外壁から突き出す水のバルコニーを次々に飛び降りていくところだつた。その最後尾について地上を目指す間に、胸中でどうにか自分を諷刺する。

——四神とか言つても、所詮はトリじゃないか。僕はさっき、ナマで本物のフクロウ、じゃないミミズク、じゃないコノハズクを見たばかりなんだ。リアル猛禽類と同じ小屋にいても平気だったんだから、バーチャルなスズクだかスズメだかを怖がる必要なんかない。それに、何も戦つて勝とうというわけじゃないし、全速飛行でぶつちぎつて、四禁宮さんのアバターを

回収して、きくつと離脱すればいいんだ、なんだ、楽勝じゃないか。

「……よし、やってやる！」

地面に到着すると同時にヘルメットの下でこっそり叫び、ハルユキは皆と一緒に、広い氷の谷を南へと走り始めた。

杉並区と千代田区は、直線距離で十キロ近くも離れている。現実の生身でなら、とても不休息の全力走行は不可能だろう。しかしデュエルアバターは、限界を超えた動作をしない限り疲労とは無縁だ。高速ホバー移動するブラクタ・ロータスを光園にくきび型の隊列を組み、五人は環七から4号東京所沢線經由葛西橋を抜けるルートで、ひたすらに疾駆する。

途中、何度か行く手に大型エネミーの影が現れたが、全て隠匿を使って回避した。(氷雪ステージ)は(原始林)や(工場)と違って障害物がほとんどないので、東京都心の密な道路網をはばそのまま利用できる。しかしそれは破壊可能なオブジェクトが少ないということでもあるため、目につく壊せそうな氷の塊は逃さず粉砕し、全員の本数減ゲージを溜めていく。

約四十分後――

氷の固態と化した新宿通りの、四谷から麹町へと続く坂を登り切ったハルユキの眼前に、突如その光景が広がった。

壮麗な雄大な構図。どれほどの言葉を重ねてもまだ足りない。

巨神の使う大槓のような雲塔群が、幾つも並んで天を衝いている。それらに守られるように、

美しくも猛々しいデザインの宮殿が鎮座する。周囲には高く分厚い壁が巡らされ、更にその外側を深く広い断崖が取り囲む。

あらゆる壁や柱は深い藍色に沈む水でできていて、内部には赤い灯火が無数に揺れる。動くものの姿はないが、決して廃墟や遺構ではない。宮殿の奥深くからは、確かに、何か——誰かの存在感が強烈に放射されている。

あれが、無制限中立フィールドに於ける皇居、すなわち――

「……（帝城）……」

走る速度を落としながら震える声で呟いたハルユキに、前方で同じく減速し、水に鋭利な輪を刻んで立ち止まった黒雪姫が応じた。

「そうだ、加速世界の中心たる異界……かつてのネガ・ネビユラスが総力で挑み、わずか二分で打ち砕かれた、絶対不可侵の神域だ……」

その言葉にぞくぞくと全身をおののかせつつ、ハルユキは再び眼を凝らした。

高さ三十メートルはあろうかという城壁は、ほぼ完全な真円を描いているようだ。規模は現実の皇居に等しいはずなので、直径は千五百メートルほどあると思われる。

ハルユキたちのいる新橋通りは、帝城を囲む無限の断崖に架かる水の橋となつてそのまま伸びている。長さ五百メートル、幅二十メートルほどもありそうな橋の向こう側には、あまりにも巨大な両開きの門が屹立し、万人を抱むかのように扉を開きかけていた。

「マスタ―、あれが現実世界の半蔵門に相当する、《西の門》ですね？」

タタムの側に、黒雲姫は再び頷いた。するとチユリがつま先立ちになり、門の回りをきよきよと眺めながら怪訝な声を出した。

「でも、先輩、《四神》……だったけ？ でっかいエネミーなんて、どこにもいないよ……う」

「ベル、ほら、あそこをご覧ください」

チユリの隣に進み出た楓子が、まっすぐ左手を伸ばす。指さす先、氷の橋と大門が接するあたりの広場には、一段高くなった真四角の舞台のようなものが存在した。四隅を円柱に飾られたその台は、どこか厳かな、整頓めいた気配を漂わせている。

「何者かが橋に侵入した瞬間、あそこに《四神》が湧出するのよ。つまり奴らのデラトラーは、あの長さ五百メートル、幅三十メートルの大橋全体ということね。ちなみに周りの断崖の、橋以外の場所には下向きの異常重力が発生していて、わたしのゲイルスラストでも跳躍は不可能だったわ。峡谷の上に飛び出た直後に、谷底の増圧に引き摺り込まれて即死。その場合は、蘇生するのは外側の崖っぷちですけどね」

無限の闇めがけて落下するところを否定なく想像させられ、押し黙るハルニキたち三人に、黒雲姫が静かに語りかけた。

「……二年前、私とレイカーはレギオンの一隊を率い、あの西門を守護する《四神ビヤッコ》に挑んだ。以前に、《神獣級》ならば同程度の人数で何度か倒していたので、内心では超

級エネミー何するものぞという気負いがあつた。だが……知つてのとおり、結果は無残なものだつた。正直、今ここに立ち、門を見ているだけで……胸がすくむ」

「……せ、先輩……」

ハルユキが声を濡らすと、漆黒の鏡面ゴーグルが小さく震られた。

「すまない、キミたちを怯えさせるつもりはなかった。無論、ここで引き返す気もない。だが、これだけは心に刻んでおいて欲しいんだ。――《四神》は人の抗える存在ではない。たとえどのような理由があろうとも、決して立ち向かおうとしてはいけない。私が指示したら、あるいは予定外の状況に陥つたと自分で感じたなら、その時点で全力を振り絞つて櫓の外へと退避しろ」

「そ、それは、もちろん……そうするつもりですが……」

細こうとしたハルユキの眼を、ヘルメット越しに正面から凝視し、黒雪姫は威しさを増した口調で言つた。

「つもり、では足りん。これは命令だ。いいな……私が逃げろと言つたら逃げろんだ。たとえ私かレイカー、あるいは二人ともがスズクに殺されようともだ」

瞬間、ハルユキは鋭く鼻を吸い込み、声を上げていた。

「そんな……！ 櫓に突入するのは僕のはずです！ さつき、先輩やレイカーさんがそう言つてたじゃないですか!!」

すると、黒雪姫と撫子はちらりと顔を見交わし――

アバターのマカニカルなマスクを通して、深い温かさが感じられる微笑を浮かべた。左右から、ハルユキに向かって交互に語りかける。

「はは……、バカだな、クロウ。私がキミを単独で特攻させるわけがないだろう」

「そうですよ、鶴さん。そんなことをしたら、ベルやバイルに怒られちゃいます」

「スザクのターゲットは我々が取り続ける。キミには一瞬たりとも眼を向けさせはしない」

「あなたは、ただアバター・メイデンの救出だけを考えて下さい」

予想外の言葉に、ハルユキはただ年上の二人の顔を順に見やることしかできなかつた。

本当は、マンションを出る時に腹をくくつた通り、僕が一人で行きます！　と言いたかつた。

しかし、黒雪姫をすらもすぐさせる《因神》を、単身で相手にできるとは今はまだ到底思えない。

戦闘能力では、ハルユキはこの二人の足元にも及ばないのだ。ここで我を張ってみても、

それは単に格好をつけるためのポーズに過ぎない。

できるのは、唯一、全力で飛ぶことだけ。それが今のハルユキの実力であり限界なのだ。

何も言えずに俯くハルユキの肩を、左胸に立つチュリが軽く叩いた。同時に、朗らかな言葉。

「姉さんゴメン！　あたしてつきり、クロウが一人でスザクの果に特攻するのをみんな応援するだけかと思ってた！　怒らないとだったよね、ウン」

途端ハルユキは、がくつと膝を折っていた。反射的に声を上げる。

「あ……あのなあ！　せめてヒールくらいしてくれよ！」

「やーよ、あれけっこうエネミーのヘイト上がるんだもん」

その掛け合いに、タムと黒雪姫、楓子が一斉に笑う。

——そうだ、僕にできることは他にもあった。

——それは、信じること。仲間たちの力を、絆を、それらが導く奇跡を。

胸中でそう呟き、ぐっと両手を握りしめていると、黒雪姫が左手の剣を空にかざして言った。
「さ、それではもうひとつ走りしよう。スザクとアーダー・メイデンが待つ南門は、内堀通りを右に進んだ先だ」

帝城の威容を左手に、氷の摩天楼と化した諸々の官庁街を右手に望みながら更に数分走ると、行く手に別の大橋が見えてきた。サイズは西のものと同様、長さ五百に幅三メートル。渡った先には正方形の祭壇があり、その先に巨大な城門がそびえるのも一緒だ。

現実世界では桜田門と呼ばれる、帝城の南門。四神の一族、火の鳥スザクが守護する聖域。そのまじ何の妨害もなく進み、ついに氷の橋梁のたもとに迫り着くと、五人はゆるやかに足を止めた。

東西に伸びる内堀通りから、南に桜田通りが分岐する広い丁字路になっている。すぐ南西の敷地には、鋭い角を持つ大きなビルがそびえる。たしかこの建物が、隣接する城門の名を取っ

て桜田門と通称される警視庁のはずだ。しかしもちろん、警官の姿はひとつもない。

丁字路の中央に立った黒雪姫が、自分の体力ゲージからシステムメニューを引き出して時間を確認した。

「ダイブしてから、もうど一時間だ。ここまでは予定とおりだな……」

つまり、現実世界の有田家のリビングでは、三・六秒が経過したことになる。ダイブせずに待っている誰にとっては息を二回吸う程度の時間だろうが、実際にはその数十倍も長く感じられているに違いない。

くると振り向き、黒雪姫は一同の顔を順に見ながら、覆と響く声で言った。

「それでは、『実橋の銀浄化作戦』第二フェーズ、『アーダー・メイデン救出作戦』をこれより決行する」

四人が同時に「はい」と叫ぶ。ひとつ頷き、黒の王はその名にふさわしい威厳を放ちながら言葉を続ける。

「最後に、もう一度作戦の内容を確認しておく。初期配置は、橋のたもとギリギリの場所に、私、ブラッタ・ロータス。そのすぐ後ろに、ライム・ベルとシアン・バイル。さらに後方、桜田通りを二百メートル下がった場所に、スカイ・レイカーとシルバー・クロウ」

皆が脳裏に配置を思い描くための間を置き、指示を再開。

「作戦開始と同時に、私が前進。大橋の中央まで進み、スザタを捕出させる。出現完了と同時に

に、レイカーはクロウを背中に乗せてゲイルスラストターで離陸。高度三十メートルを、門に向かって全力飛行する。その間に私は、スザクに遠距離心意気攻撃を行い、ターゲットを取る。直後、後退開始。ここまではいいな。」

「はい！」

四人が応じると、黒青姫は再び倒れて、霧子とハルユキを見る。

「飛行するレイカーが、後退中の私の上空に達する寸前で、クロウが分離。自分の翼の推進力を加えて、前進するスザクの上空を全速で通過し、さらに南門を直指す。レイカーは私の位置に着地し、防衛心意気を展開。スザクの火炎ブレスを防ぎつつ、共に後退する。スザクとは最低百メートル以上距離を取り続ける予定なので即死はしないはずだが、それでも相当なダメージを受けるだろう。それを、橋の後方からベルが（シトロン・コール・モード）で回復する。」

私とレイカーが橋のたもと近くまで後退する頃には、クロウは南門の直前（雷神の祭壇）に到達しているはずだ。アーダー・メイデンはその中央に出現するので、ビクアアップして急上昇、百八十度反転。再び橋の上空を南下し、スザクを追い越してテリトリの外に脱出する。

――以上――

疲れなく告げられた指示を聞き終えたハルユキは、そつと息を吐いた。

状況と戦力を考え抜いた、これが最適解だろう。シンブルにして巧妙。一度作戦が始まれば、あとは相互に意思疎通する必要もない。

だが、この作戦には、《手段》と《要領》が一つずつ欠けている。

手段とは、現実世界に残る謎のダイブとハルユキの全速突進のタイムリンドを、どうやって合わせるのか。そして要領とは——指示の中に挙げられなかった、一つの名前。

その疑問に至りつつも声を出せないハルユキの内心を読んだかのように、黒青姫がややトーンを落として言った。

「……もう、皆も気付いているだろうが、この作戦では、謎が無制限中立フィールドに出現する時刻を秒に至るまでコントロールする必要がある。それには、誰かがフィールドを出て、謎にタイムリンドを伝える以外の方法はない。その役目を……シアン・バイル、君に頼みたい」

「了解です、マスター」

と、すぐにタカムは答えた。

しかしその応答が、いつもの打てば響くような反応と比べると、少し、ほんの少しだけ遅かったことにハルユキは気付いた。

現実世界の謎への伝令というタカムの役目も、作戦にはどうしても欠かせないものだ。しかし、その人選が、《最後に一人残った名前》であることは否めない。明敏なタカムはハルユキよりずっと早く、おそらくは黒青姫が作戦を説明する前から察していたはずだ。——自分一人だけが、四神相手の命がけの戦場に残れないであらうことを。

何か言葉をかけるべきか、とハルユキは迷った。しかし何を言っても、タカムのプライドを

傷つけるだけだろうとも解^わっていた。楓子も、こんな時はいつも場を和^やませてくれるチユリまでもが、今は無言だった。

いつときの静寂を、タカムは白らの言葉で破った。

「今回は、相手が飛行型ですしね。がちがちの近接型のばくにはちよつとキツイな、って内心思っていました。係令役、喜んで引き受けさせてもらいます。……でも、マスタァ、もし得^え来^き、ゲンブとかピヤフコとか近接っばいやつに挑む時は、ばくにも出番を下さいよ」

いつもの穏やかな声に、黒雪姫はゆっくり頷いた。

「……ああ、その時は、バイルを切り込み隊長に指名しよう。期待しているからな……奴らを叩きのめせるくらい、強くなってくれよ」

「ええ、必ず。——必ず」

自分に言い聞かせるように答え、タカムは深く頷いた。黒雪姫は体の向きを戻すと、大きく息を吸い、言った。

「さて、それでは……質問、言いたいこと、何かあるかな？ 何でもいいぞ、何せ時間はある。メイデンには、最長で五十分くらいは待たせるかもしれないと言っているから、その気になればまるまる三日は話せるぞ」

「えーっ、メイちゃんをそんなに待たせちゃかわいそうだよ、先輩——」

と、チユリが叫ぶ。どうやら譲^ゆのことは、加速世界ではそんな愛称で呼ぶことにしたらしい。

きつとすぐに現実側でも、親しみに満ちた呼び方を編み出すことだろう。

——いいなあ、僕も《四壁宮さん》じゃなくてあだ名で呼びたいなあ。（ニコ）みたく（ウイ）って呼んだら怒られるかなあ……。

などと一時考えてしまつてから、ハルユキは慌てて機念を振り払つた。

この機に、皆に話しておくべきかもしれないことが、ひとつある。《天梯の類、浄化計画》と同じか、あるいはそれ以上に重要だと思われる出来事。もちろん、加速世界に静かに広まりつつあるらしい謎の寄生オブジェクト——（ISSキット）の件だ。

しかし、数秒間悩んだすえ、ハルユキは発言を取りやめた。

今は、アーダー・メイデン救出だけを目標して、全員が百パーセントの力を振り絞るべき時だ。彼女と直接関係がない話を持ち出して、わざわざ皆の集中力が削がれるようなことがあってはならない。

それに、ISSキットを間近で見たのはハルユキだけではない。むしろ、キットを持つブッシュ・ウータンと直接心算をせめぎ合わせた謎のほうが、あの寄生オブジェクトの本質に迫っているだろう。ならば、この件を議題に集めるのは、謎のアバターを救出し、ネガ・ネビュラスに全面復帰してもらつてからにしたほうがいい。

そう考え、口を閉ざし続けたハルユキと同様、チユリも、タタムも、楓子も何も言おうとはしなかった。

全員の前を鳴つくりと見届してから、黒雪姫は大きく頷いた。

「……よし、皆、すでに心の準備はできているようだな。では、作戦開始前に、タイム・ペルにもう一つだけ指示しておく。——もし予想外の事態が発生し、機の上の全員がスズクに倒されてしまったら、決して助けようとしてはいけない。最寄りのボータルから現実世界に戻り、クロウのニューロランカーとホームスパーを繋ぐケーブルを引き抜くんだ。いいな」

酷とも言える命令だった。その最終セーフティに頼らねばならないということは、つまり誰のみならず、黒雪姫、風子、そしてハルキまでもが《無限E.K.》状態に陥るということだからだ。

しかしチユリは、三角帽子の綱を毅然と持ち上げてから、強く頷いた。

「わかったよ、先輩」

「頼んだぞ。……それでは、始めるとするか」

まるで、毎週の騎士防衛戦前のような何気なさで、黒雪姫は言った。まずタタムに向かって、滑らかに指示する。

「それではバイル、すぐその監視席の正門を入ったところにボータルがあるので、作戦開始の号砲として、空に向かって一発《ライトニング・シアン・スパイク》を撃ってから現実世界に離脱してくれ。君の覚醒を合図に、誰が即座にダイブする。そのリレーに現実時間一秒を要するので、こちらでは十六分四十秒が経過する計算だ。その間に、クロウとレイカーは桜田

通りを南に二百メートル下がった位置で離陸態勢に入る。話の出現一分前に私が壁に侵入、スザクの出現を見たら、レイカーが発進、そこからは手はず通りだ」

「了解です、マスター。——それじゃ、レイカーさん、ベル、クロウ、あとは輪んだよ」

返事代わりにハルニキが右拳を突き出すと、タカムはごつんと左拳を打ち付け、身を翻した。青いアバターはもう振り向くことなく、駆け足で警視庁の門の中へと消えていく。

数秒後、雪雲の垂れ込める空に向かって、一条の雷光が屹立した。向かいには総務省、その奥には東京高裁と大きな建物が林立しているのど、光はハルニキたちの位置からしか見えないはずだ。

これで、あと十六分四十秒後には、四葉宮——アバター・メイデンが大橋の向こう側に出現する。ハルニキは何としても彼女を確保し、橋のこちらにまで脱出させねばならない。

「では、クロウ。わたしたちも行きましょう。ベル、ロータスをよろしくね」

楓子がそう言い、ハルニキの肩を叩いた。

「は、はい！……先輩、あの、ええと……僕、頑張りますから……」

緊張で詰まった喉から、どうにかそんな言葉だけを押し出すと、黒雪姫はヴァイオレット・ブルーの両眼でじっとハルニキを見つめ、短く答えた。

「ああ、信じているよ」

そこからの十五分は、無眼にも等しいほど長く、それでいて激流のように速く感じられた。ゲイルスラストターを装着したスカイ・レイカーの隣に立ち、ハルニキは懸命に精神を集中しようとしたが、それに成功しているのか、逆に雑念におぼれているのかすらも解らなかった。粉雪の舞う無制限中立フィールドはしんと静まりかえり、時間すらも凍り付いてしまったかのようだ。

桜田通りの末、橋の全長と合わせて七百メートル先に鎮座する巨大な城門は、これだけ距離を取ってもその威圧感をまるで失わない。世界そのものを閉ざすかの如く、ハルニキの視線を遮っている。

「二年半も昔に……師匠たちは、あの門を破ろうとしたんですね……」

ほぼ無意識のうちにそう呟くと、すぐ隣の楓子がひそやかな笑みを漏らした。

「門を破るところか……その奥の城を攻め落とそうとしたんですよ」

「あ、そ、そうか……」

まったく、第一期オガ・ネビュラスというのは、今よりもっとでもない集団だったに違いない。そんなことを考えてため息を漏らしたハルニキは、ふと浮かんできた疑問をそのまま口に出せた。

「……でも、その戦いの時、なんて（四神）を四匹ぜんぶ相手にしようとしたんです？ 先輩

は昨日、四神は四身一体って言ってましたけど……でも門は四つあるんだから、レギオン全員

でどこか一つを攻めればよかったんじゃないや……」

「……く、さらにずっと昔に考えた人たちがいて、それを実行したんです。そして解ったのは、《四神》は相互にリンクしているということでした。どれか一匹だけを攻撃すると、残り三匹から回復がばんばん飛んできてタイヘンなことになっちゃうんですよ。今日は、例えうとしているわけじゃないから関係ないですけどね」

「……………あ、な、なるほど……………」

考えてみれば、ハルユキが思いつくようなことならもう試されていて当然だ、かくりと頷いてから、続けて喋る。

「そっか……………、きつと、ずっと昔のほうが、あの城に挑もうってレザオンは多かったんですよね。いや、密城だけじゃなくて……………米路エリアを蹂躪したり、いろいろ戦術を編み出したりして……………いいな、僕も、もっと早くパーストリンカーになってれば……………」

「うふふ、何言ってるんですか、鴉さん」

ため息まじりの言葉を微笑で返り——鴉子は、いきなりハルユキを両手でむぎゅっと抱きしめた。わああ!? と硬直する耳元に、どこか悲観っぽい囁きが響く。

「これからですよ。鴉さんのブレイン・パーストは、何もかもこれから始まるんです。いいえ……………わたしや、ロータスもそう。終わりがけなと思った道が、本当はどこまでも……………無敵に広がっていた。そう気付かせてくれたのは、あなたです」

背中に回された両手に、いつそう力がこもる。耳元で生まれる声もまた、氷雪ステージの冷気をも溶かすような熱を帯びる。

「……梅さんの銀色の翼には、世界を開く力がある。あなたの未来は、あらゆる方向に広がっています。あたしは、その羽ばたく先を見届けたい。ロータスも、きつとメイデンもそう思っているはずですよ。——さあ、彼女を速えに行きましよう。時間ですよ」

そして、すっと抱擁が解かれた。

ハルユキの精神は、いつしか完全に澄み渡り、一つの意味だけに強く満たされていた。飛ぶのだ。ただひたすらに飛び続ける。それこそが、ハルユキの心が生み出した、シルバー・タロウという移し身の存在証明なのだから。

「……はい！」

強く頷いたハルユキに、スカイ・レイカーは背を向けてひざまずいた。装着された二本のロケット・ブースター、強化外装（ケイルスラスター）の中央に右腕をあてがい、両肩をしっかりと構む。

「準備OKです」

ハルユキの声に頷くと、楓子はじつと正面の大橋を監視した。

そのたもとには、二つの小さな影がある。ブラフタ・ロータスとライム・ベルだ。約十秒後、ロータスが右手の剣を高々とかざし——鋭く前へと振り下ろした。

11

黒の王ブラクタ・ロータスが、車騎前進を開始する。

帝城南門から伸びる長さ五百メートルの大橋に突入。両手を締め後方に広げ、体を限界まで前傾させたフォームで、足元の水を激しく削りながら突き進む。

その行く先、橋の向こう側に設けられた正方形の祭壇中央に、ぼつ、と真紅の炎が生まれた。炎は渦を巻きながらみるみる勢いを増していく。たちまち、一辺が二十メートルはある祭壇全体が火の海へと変わる。その中から、何かが……恐ろしく巨大な何かが姿を現し始める。

それを視認した瞬間、ハルユキを背負う瘋子が叫んだ。

「——行きます！」

ゴッ、とハルユキの体の下で、ゲイルスラストアーが鳴った。青白い噴射炎が周囲を照らし、路面の水を一瞬で蒸発させる。途轍もない推力が、ふたつのデュエルアバターを、まるでカタパルトのように地面から撃ち出す。

耳元で空気が唸る。壁にかかる風圧に耐えるべく、ハルユキは瘋子の背の中の上で、限界まで体を密着させる。両側のビルがダイティールを薄青色の沈黙に溶かす。スラストアーの駆動音がどこまでも高まる。

二百メートルの助走路がたちまち終わりに近づく。広い丁字路の中央で、左手の釣り鐘を構えるライム・ベルを一気に飛び越す。二人はそのまま大橋の上空に突入し、高度三十メートルを限界速度で駆けける。

行く手では、炎の海から生まれ出た何かが、明確な形を取りつつある。

まず、溶けた金属のように輝く半を飛び散らせ、二つの巨大な翼が左右に広がった。差し渡した橋の幅とはほぼ等しい。羽根の一枚一枚が、まるで魔神の携える火炎剣の如き大きさだ。大気に舞う粉雪は、その翼に触れる滅か手前から蒸発していく。

展開した両翼のあいだから、今度は逞しい肩が現れ、やや長い首がそれに続く。湾曲する首がぐぐつと持ち上がり、頭部が姿を現し始める。

竜の角のように鋭く伸びる飾り羽。長く鋭い嘴。そして――炎よりもなお眩く、紅玉よりもいつそう赤く輝く、両の眼。

火炎をまとう巨鳥――帝城の守護者、胡蝶エネミー（四神スザク）は、大きく開いた嘴を天に向けると、凄まじい咆哮を放った。

無数の雷鳴に甲高い共鳴音をまとうりつかせたようなその雄叫びが世界に轟いた瞬間、ハルユキを見た。空を分厚く覆う雪雲が波紋を作って震え、一瞬にせよ、放射状に引き裂かれるのを。

——何だ。

——何なんだ、あれは。あれがエネミー？　ブレイン・バースト・プログラムが動かす、魂なきモンスターだって？

違う。あれは……あの鳥は生きている。罅りを助けられたことに怒り、侵入者を焼き尽くさんと猛り狂っている。存在そのものが、まるごと拒絶と攻撃の意思で出来上がっているかのようだ。そう、あまりにも巨大なイメージの塊……。

あれは、《破壊の心意》の純粋なる凝集体だ。

そう認識した瞬間、ハルユキは、自分の中の飛行への決意が揺らぐのを自覚した。

すくんでしまったのだ。かつて加速世界で眠にしたいかなる存在をも——数日前にハルユキをあれほど圧倒した《純色の六王》たちすらも凌ぐ、絶対的なパワーの顯現を五感のチャネル全てに焼き付けられ、呼吸が止まった。

……だめだ、あんな……あんなのに近づいちゃいけない……。

押れ切った意識の中心を、そんな思考が弱々しく貫いた。

しかし、スカイ・レイカーの飛翔は止まらない。それどころか、ゲイルスラストスターの駆動音はいよいよ高まり、噴射炎は彗星の如くどこまでも伸びる。彼方では炎の巨鳥が羽翼を羽ばたかせ、祭壇から前進を開始する。加速された感覚のなかでも、彼我の距離は恐るべき勢いで縮んでいく。

ハルユキの両手が震え、レイカーの肩から、無意識のうちに指先が外れようとした——

剝離。

眼下、もうほんの数メートル先で立ち止まったブラック・ロータスが、突如全身から眩い光線を迸らせた。

心意の（剥刺光）だ、色は――巨鳥のまとう大炎にも負けない、純粹なる赤。直後、黒雪姫の奇烈なる氣勢が、天地を切り裂く。

「オオオオオオオオ………!!」

心意の靈光が密度を倍增させる。最早、恒星の如く輝いているアバターから、爆とした声が放たれる。

「（オーバードライブ）!!（モード・レッド）!!」

ハルニキの知らないコマンドだった。そして、それが引き起こした現象もまた未知なるものだった。

ブラック・ロータスの漆黒の鎧甲の各所に、鮮やかな真紅のラインが浮き上がる。同時に、右手の剣がそのデザインを変える。元の一・五倍ほどにも長くなり、先端付近で一度くびれ、切っ先が鋭利な菱形を描く。あれはもう剣ではなく――槍だ。

黒雪姫は、その右腕を彼方一杯に引き絞ると、水平に構えた左手の剣と十字に交差させた。全身から迸っていた剥刺光が、一気に右腕へと集まり、その懸先の一点へと凝集する。

触れただけで万物を穿たんばかりにフオーカスされた威力が、高らかな枝名発声に合わせて、

迫り来る四神スザクへと放たれた。

「（零、命、撃）！！」

巨鳥の咆哮をも打ち消すほどの、ジェットエンジンを思わせる轟音とともに、真紅の巨大な槍が百メートル以上の空間を瞬時に貫き――

スザクの分厚い胸の中央を見事に捉えた。エネミーのまとう火炎が、まるで血液のように宙に散った。

そしてハルユキは、確かに見た、視界に表示される、あまりにも膨大なゆえに五段に折り畳まれているスザクのHPゲージが、ごくわずかではあったが確かに削られたのを。

先輩。黒雪姫先輩。

――あなたは、なぜ……どうして、そんなにも強く……………。

脳裏に閃いたその思考を、ハルユキは腹の底から湧き上がってきた一つの感情とともに否定した。

――あの人が（強い）だって？ 違う。そうじゃないことを、僕はもう知っている。あの人は、ただ（強くあるうとして）いるのだ。自分のために。誰かのために。胸の中で輝く、大切なもののために。

――僕も。僕も、いまは力も知事も何もかもまるで足りないけれど、でも前を向くことはできる。それこそが、誰もが最初から持っている、本当の強さなんだ。前を向いて、息を吸



つて、胸を張って……ああ、囁えろ!!

「う……おおおおッ!!」

ハルユキの絶叫に、楓子が応えた。

「飛びなさい!!」

「——行きますッ!!」

ぱつ、と背中の中の両翼を広げ——十枚の金属フィンを、ありったけの力で振動させ——ハルユキは、飛んだ。

耳元で空気が唸り、圧縮され、壁となる。それを、まっすぐ前に伸ばした両手の指先に抱した心意の翼で突き破る。ふっ、と圧力が失せる。一瞬の銀光と化し、ハルユキは突進する。

前方やや下方に、スザクの巨体が見るみる近づく。空気を焼き焦がすような、強烈なる熱気がアバターを叩く。しかしもう怖れは感じない。なぜならハルユキは一人ではないからだ。黒雪姫が、楓子が、チユリが、タタムが、背中を支えてくれている。

そして、今この瞬間、実に二年半ぶりに無制限フィールドに降り立ようとしている年下の少女も。

知り合ってまだたった一日だが、四葉宮はすでにハルユキの心の中に確たる存在感を刷している。(翼槽の銀)を浄化してくれるからではない、レギオンの戦力を強化してくれるからでもない。ただ、新しい友達として、今のネガ・ネビュラスに加わってほしい。

そのために、今は飛ぶのだ。情れず、はまず、ひたすら前へ。前へ。

白銀の矢となって高層二十メートルを駆け上るシルバー・タロウと、橋の表面を轟音とともに前進する四神スザクが、幾つかの火の粉を散らして交錯した。

スザクはそのまま、背後の黒雪姫と、その傍らに着地したはずの楓子へと殺到していく、あとは二人が、エネミーを横のずつと後方まで引いていくてくれるはずだ、信じて任せる、するべきことはそれだけだ。

ひたすら直進するハルユキの行く手、いまだちらちらと炎が上がる祭壇の中央に――ぼつ、と鮮色の輝きが生まれた。

来た。論――アーダー・メイデンだ。完璧なるタイムリング。タタムがきつちりと伝令役を務めてくれたのだ。

白と赤の色彩をまとう巫女のアバターが、みるみる実体化していく。距離はもう百メートルもない。ハルユキは顔をピクアアップするため、高度を下げようと――

した、その、瞬間。

「ハルユキ君!!」

驚愕と恐怖、そして絶望に彩られたそれは――武鳴。

加速世界では本来タプーのはずの、本名による呼びかけが、後方から迫り上がった。

「逃げろ!! 今すぐ逃げるんだ!!」

「……………!?」

状況が理解できず、ハルニキはちらりと眉蹙しに振り返った。

そして、見た。

四神スザクが、その翼を傾けて左に旋回しようとしている。長い首は弧を描き、紅の双眸がまっすぐ樹のこちら側を、いやハルニキを見据えている。

明らかに、ターゲット対象が移動したのだ。しかし、なぜ。スザクの胸には、まだ黒雪姫の《致命撃》によるダメージ・エフエクトの余韻が見える。対してハルニキは敵に触れてもいない。狙われる道理がない……………

と、混乱した思考を閃かせた刹那、ハルニキは声を聞いた気がした。

意思なきムービング・オブジェクトであるはずのエネミーの、それは怒り、あるいは嘲笑か。

……………小さき者よ、我が領域を侵さんとした愚行の代償を受けよ。我が息吹……………

灰になれ。

巨大な嘴が一杯に開かれる。

暗黒に満たされた喉奥に、ちらちらと火花が瞬く。プレス攻撃。直撃すれば間違いない即死。

逃げろ、ハルニキ君!!

再び、黒雪姫の豪鳴が聞こえた。

瞬間、という言葉ですらも使わず、極小単位の時間の中で、ハルユキは遡進した。今すぐ急上昇すれば、プレスは回避できるかもしれない。そのままシルバー・クロウの飛行限界高度である千五百メートルまで駆け上れば、スザクも追ってはこないだろう。しかし——、ああ、しかし。

ハルユキは、眼面の下で、砕けよとばかりに奥歯を噛み締めた。そして、決意した。

引けない。ここで逃げることはできない。今逃げれば、ほんの数メートル先でハルユキを待っている四壁高層がスザクに襲われ、死ぬ。

たとえそうであっても、現実世界に戻ったハルユキを、彼女は責めないだろう。いつもの超高速ダイビングで、『仕方がないのです』と言ってくれるだろう。

でも、本当は仕方なくなかない。なぜなら、今この瞬間、ハルユキは自分の行動を選べるのだから。議を散出できる可能性がほんのわずかも存在するのなら、それに向かって飛び続けるための翼を、ハルユキは与えられているのだから。

「う……………」

再び懸望へと視線を戻しつつ、腹の底から声を絞り出す。

「お……………お……………お……………」

「——」

雄叫びとともに、ハルユキは腹のシナプスが焼き切ればかりの意思を振り絞り、翼を震わ

せた。

まっすぐ突き出した両手の先に宿る光が、全身へと広がる。唯一の心意技、（光線剣）を使う時と同じ銀色の過剰光に包まれ、ハルユキは突き進む。

背後で、とてつもないエネルギーが生まれる感覚。万物を瞬時に蒸発させるであろう炎の渦がスズクのおぎとから放たれ、世界を紅に染めて襲いかかってくる。

ハルユキ君!!

鶴さん!!

ハル——っ!!

三つの絶叫が、意識にはんのわずか触れた。しかしそれすらも振り切り、一条の光となって飛ぶ。

先輩、逃げあつて言われたら逃げるっていう約束、破ってごめんなさい。あとで沢山涙山謝ります。でも……僕が使っており続けるために、今はこうしなきゃならないんです。

そんな刹那の思考が白い火花となって弾け、消え、あとにはもう前を目指すという意思だけしか残らなかった。

祭壇がみるみる近づく。その中央に出現したブーダー・メイデンは、状況を理解できないかのようにただ立ち尽くしている。

小柄な巫女の姿を凝視し、ハルユキは声ならぬ声で叫んだ。

——手を!!

弾かれたように、アーダー・メイデンが軽い両手を持ち上げた、

高度を橋の上一メートルにまで下げたハルユキも、両手を差し出す。双方の腕が触れ、しっかりと互いを掴み——

直後、ハルユキは謎のアバターを思い切り引き上げ、胸に抱いた。

——抱まって!!

再び叫び、謎の両手が首にかかるや否や再上昇に入る。このまま百八十度ループで反転して降参……

不意に、周囲の色が変わった。

オレンジからクリムゾンまでの波長で揺らめく、赤。炎の色。

もりつ、とアバターの全身が鳴る。スズクの火炎プレスが追いついてきたのだ。まだ炎そのものには触れていないはずなのに、視界左上のHPゲージが、恐ろしい勢いで減少していく。

だめだ、上昇はできない。はんのわずかでも速度が落ちた瞬間、炎に吞まれて溶ける。

直進するしかない。だが、もうすぐ目の前に、巖のごとき城門が立ちはだかっている。

せめてもの矜持として、あの門に激突して果てるしかないのか。いや、ここまできて自殺は許されない。生きるんだ。誰とともに生還する。してみせる。

「……………開け!!」

アバター^{アバター}の表面をちりちりと焼かれつつ、ハルユキは叫んだ。

同時に、胸の中の誰^{だれ}もまた声を上げた。

「聞くのです!!」

だが、分厚い藍色^{あじい}の水をまとう城門は、二人を嘲笑^{あざわら}うかのように、その門扉を堅く堅く閉ざし続けて――

いや。

光^{ひかり}が――

屹立^{きりぎりす}する左右の扉の真ん中に、

ほんの一簇、糸のような白い光が見える。

静かだ。

冷たい。そして、硬い。

しんしんと冷える平面の上に、体の右側を下にして横たわっている。

まるで、全身が凍り付いてしまったかのようだ。まったく手足を動かせない。

しかし、両腕の中に、何か不思議な温かさを感じる。とくん、とくん、という仄かな振動。

これは――

「……少し、苦しいのです」

突然、そんな声が聞こえた。

ハルユキはハッと両眼を見開いた。すると目の前に、つぶらな緋色のアイレンズがあつた。

「あ……………」

声を上げ、緊張った両手を苦勞して緩める。可憐なフェイスマスクが、ほんの少し遠ざかる。

「……………し、しのみ……………じゃない、メイさん……………」

震える声で囁きかけると、マスクがこくりと動いた。清らかな声が、小さく響く。

「そうです。あなたが助けてくれたのです、ターさん」

その言葉に、びくっと全身を震わせる。

何があったのか、よく思い出せない。祭壇に立つアーダー・メイデンをビクアアップして……迫り来るスズタの火炎プレスから逃げて……閉じた城門に、まっすぐ突っ込んで……

そのあとは、どうなったのだらう。まさか、二人して死んでしまった？　これは《幽霊状態》なのか？

——いや、それならば、視界すべてがモノトーンに変わるはずだ。しかし今は、識のアイレンズの、ルビーのような煌めきがはっきりと見える。

それでもなおハルユキは、自分たちがあの潜るべき炎熱の渦から逃げ延びたとは信じられず、擦れ声で訊ねた。

「あの……、僕たち、生きてるのかな……？」

すると、識はもう一度こくと頷いた。

「……生きています。でも……、ああ、でも……」

語尾が、擦れ、わななき、冷気に溶けて消えた。

アーダー・メイデンは、視線を周囲の冷たく薄暗い空間へと移し――。

「……ここは……この場所は、《密城》の中なのです」

あとがき

川原礫です。「アタセル・ワールド6 浄火の神子」をお届けいたします。恐らく、既刊の中でもっとも執筆に時間のかかった一冊ですが、楽しんで頂けたでしょうか……。

さて、私には小説書きとして足りていない物が山ほどありますが（根気とか、向上心とか、自宅で仕事する能力とか……）、その中でももっとも欠けていると自覚しているのが、〈お話をきちんと終わらせる力〉です。

正直に言いますと、Web小説を書いていた頃を含めてこれまでに八年以上色々なお話を作ってきましたが、そのどれ一つとして正しい終わり方はしていません！ 編集長編である「ゾードアート・オンライン」や、初投稿作の「アタセル・ワールド」にしてからが、「俺たちの戦いはこれからだぜ！」ENDですし（よく賞をもらえたなあーと今更のように冷や汗をかいてみたり……）。

別にもうすぐ完結というわけではないのですが、アタセル・ワールドもこれだけ書き続けてくると、「このお話はどういうふうに終わるのかなあー」と考えたりもするんですよ。ところが、これがまったく思いつかない（笑）。広げる方向ではあれこれ妄想できるのに、登るアイデアがこうも出てこないのは、やはり小説書きとしてはヤバイ氣がしてなりません。

と言いつつも、私は読み手としては、実は「聞いて終わる」話が大好きなのです。年代記風に、主要キャラクタターの後半生を評述して終わるのももちろん素敵ですが、やはり「彼らの物語は今後も続いていく」感じが欲しいと言いますか……。RPGでも（クリア後の世界）とかたまたまなく好きですし（笑）。もしいつかゲームを作れるようなことがあったら、エンディングが流れたあとに、本編の三倍くらいのボリニームでおまけシナリオが始まるようなやつにしたいです！むしろどなたか作ってください！

脱線しました。そんなわけなので、このアタセル・ワールドも、おそらくいつか来るであろう終わりでは「俺たちの戦いは……」みたいなことになってしまう予感ひしひしですので、今から謝っておきます。ごめんなさい！

前巻に輪をかけてスケジュールが遅れ、現在大変な迷惑をおかけしているにも拘わらず、息を呑むほど素晴らしい表紙を描いてくださったイラストのHIMMさん。財布を忘れた哀れな私に快く三百円貸してくださった編集の三木さん。今回もお世話になりました！そして、ここまで読んでくださった皆様、またしても「つづく」で終わってすみません！次巻ではちやんと決着します多分！タツくんも活躍します多分！

二〇一〇年八月某日

川原 礫

「これは、ゲームであっても

遊びではない」——天オプログラマー・夢地晶彦

クリアするまで退出不可。ゲームオーバーはプレイヤーの“死”を意味する
一万人ものプレイヤーが、その世界のデスバトルMMO
「ソードアート・オンライン」に堕じこめられた。
しかしその夢も、最高のソロプレイヤー
（後の剣士）キリトによって、
ついに禁止符が打たれる。

冒険のVRMMO「ガンゲイル・オンライン」で突然発生した「死」事件、
深淵の扉を持つアバターに堕したプレイヤーは、実際に仮想世界でも「死」に落ちる……。
その不気味な現象の調査を依頼されたキリトは、「仮想世界」が「現実世界」へ
物理的に影響を及ぼすことに強い危機感を抱く。GGGへとログインした、
一見は超一流少女キャラと見間違えるアバターにコンバートされてしまったキリト、
「GGG」に不慣れな体だったが、スナイパーの少女・シノンの
ナビゲートのより、全ガンナーの団結も剣士・チメント「GGG」に敵意を燃やした。

彼が支配するこのゲームで唯一「死」を回避し、「GGG」を勝ち進むキリト、
その才能は周囲スライムが認識となり、徐々にその知名度が上がっていく。
そんなキリトの側に、とある人物が立ちふさがった。
スナイパー・シノン。
彼女は自身のトラウマを振り払うため、キリトと真剣勝負を挑む——

そして冒険、「GGG」決戦、
最大の難関がひしめく「多人数バトルロイヤル」の中、ついに「死」が宣告する。
果たして「死」とは何なのか、
本編に「仮想世界」から「現実世界」へ影響を及ぼすことができるのか、
キリトは単身、「死」へと挑む。

「ファントム・バレット」編、完結!!

【最新のカラフルイラスト】を満載した特別限定版の「ソードアート・オンライン」が、12月10日より発売!

コミック「アクセル・ワールド」 & 「あくちえる・わーど。」
内容／「アクセル・ワールド」の
あくちえる・わーど。が、くちえる・わーど。と
「電撃文庫MAGAZINE」12月号より連載中!

電撃文庫 超人ウェブサイトからも、
閲覧数650万PVオーバーを記録した伝説の小説!

ソードアート・オンライン

最新第6巻は、電撃文庫にて
2010年12月10日発売!

イラスト abec

特報!!! アクセル・ワールド7は
2011年初春頃発売予定!!!

●川原 礫著作リスト

- 『アクセル・ワールドー機巧の帰還ー』 (電撃文庫)
- 『アクセル・ワールド2ー紅の暴風雨ー』 (同)
- 『アクセル・ワールド3ー夕陽の路を歩ー』 (同)
- 『アクセル・ワールド4ー蒼空の竜翔ー』 (同)
- 『アクセル・ワールド5ー足跡を踏み続ー』 (同)
- 『ソードアート・オンラインーアイエンタスアー』 (同)
- 『ソードアート・オンライン2ーアイエンタスアー』 (同)
- 『ソードアート・オンライン3ーフキヤキヤスアー』 (同)
- 『ソードアート・オンライン4ーフキヤキヤスアー』 (同)
- 『ソードアート・オンライン5ーフキヤキヤスアー』 (同)

本書に対する「意見」「感想」をお寄せください。



あて先

〒160-8326 東京都新宿区西新宿4-34-7
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「川原 礫先生」係

「HIMA先生」係





電撃文庫

アクセル・ワールド 6

― 神々の神子 ―

かわはら 硯
川原 礫

発行 二〇一〇年十月十日 初版発行

発行所 高野 潔

株式会社アスキー・メディアワークス

〒一六〇-八三二六 東京都板橋区西板橋四-二十四-七

電話〇三六八六六六七二二一（編集）

編集所 株式会社角川タレーバブリッシング

〒一〇二-八二七七 東京都千代田区富士見二-二十三-二

電話〇三三三三三八八八〇五（営業）

総代理 株式会社エヌ・エックス（NEX）

印刷・製本 風雨閣株式会社

本書は「原作」及び「挿絵」の著作権を所有し、複製・転写することを禁ずる権利を著者（川原礫）が保有しています。個人または団体に複製・転写して、無断で複製・転写することを禁ずる権利を著者（川原礫）が保有しています。また、本書の全部または一部を複製・転写して、第三者に譲渡することを禁ずる権利を著者（川原礫）が保有しています。

本書は「原作」及び「挿絵」の著作権を所有し、複製・転写することを禁ずる権利を著者（川原礫）が保有しています。個人または団体に複製・転写して、無断で複製・転写することを禁ずる権利を著者（川原礫）が保有しています。また、本書の全部または一部を複製・転写して、第三者に譲渡することを禁ずる権利を著者（川原礫）が保有しています。

© 2010 BEKI KAWAHARA

Printed in Japan

ISBN978-4-04-868969-4 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。古今東西の名書を、縦書きで手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の御として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オーブナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times, Changing Publishing) 時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

アクセル・ワールド1 ―黒雪姫の帰還―

川原礫
イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-867517-8

（黒雪姫）と呼ばれる少女との出会いが、デフでいじめられた子の未来を変える。ウエブ上でカリスマ的人気を誇る作家が、ついに商業大賞（大賞）受賞！

か16-1 1716

アクセル・ワールド2 ―紅の暴風姫―

川原礫
イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-867784-8

デフでいじめられっ子の少年・ハルユキの人生は、黒雪姫との出会いによって一変した。そんな彼のもとに、「黒髪ちゃん」と呼ぶ異名知らずの少女が現れてくる。

か16-3 1775

アクセル・ワールド3 ―夕闇の暗黒者―

川原礫
イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-868070-7

『ゲームオーバー』です。黒雪姫と「いんしるバー・クロウ」黒雪姫少女の中で、スクールカーストの頂点に立った新人人生。圧倒的な力の前に、ハルユキは倒れ……

か16-5 1834

アクセル・ワールド4 ―蒼空への飛翔―

川原礫
イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-868325-2

『ここから、もう一度遠い空へ飛んでみせる。僕はもう、ただけ向いて歩くのはやめたんだ』翼をもがれたシルバー・クロウ。ハルユキが、ついに覚醒する――

か16-7 1899

アクセル・ワールド5 ―星影の浮き橋―

川原礫
イラスト／HIMA

ISBN 978-4-04-868593-1

とある日、ハルユキは新たななるゲーム・ステージ出現の知らせを受ける。（平定）ステージ。そこに降り着いたハルユキは、歴史的なゲームイベントを経験する――

か16-9 1953



電撃文庫

アクセル・ワールド6―浄火の神子―

川原 礫

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-062890-4

◎最終の巻に格上げされたハルヒキは、異世界以外の六王から、〈浄化〉の命令を下される。その命を断るアバターは、意外な場所に隠れていた……。

か-16-11 2018

ソードアート・オンライン―アインクラッド

川原 礫

イラスト／あぐろ

ISBN978-4-04-060770-8

クリアするまで脱出不可視ゲームオーバーは「死」を意味する。この仮想空間は、ゲームであっても遊びではない。第15回電撃大賞〈大賞〉受賞作が輝く大作！

か-16-2 1745

ソードアート・オンラインⅡ アインクラッド

川原 礫

イラスト／あぐろ

ISBN978-4-04-060795-0

アインクラッドでは珍しい「ビーストアバター」の少女・シリカが窮地に陥ったとき、彼女を助けたのは、悪性も分からぬ謎の〈黒い剣士〉キリトだった。

か-16-4 1804

ソードアート・オンラインⅢ フェアリー・ダンス

川原 礫

イラスト／あぐろ

ISBN978-4-04-060819-9

謎のデスゲームSAOをクリア、現実世界に帰ってきたキリト。しかし、戦闘パートナーであり、永遠の誓いをたてた想い人アスナはいまだ意識していません……。

か-16-5 1832

ソードアート・オンライン4 フェアリー・ダンス

川原 礫

イラスト／あぐろ

ISBN978-4-04-060857-1

MMO〈AとO〉内へ、アスナを救うため口ダインしたキリトは、ついに〈最終巻〉までたどり着く。しかし彼の秘密も、度々露にした少女・リーファが知ってしま……。

か-16-8 1924

ソードアート・オンライン5 バレット・ファンタム

新装版

イラスト／ 中野アツヲ

ISBN 978-4-04-066393-8

「S.A.O」事件から一年、次にキリトと再会するのは、秋と暮秋のVRMMOの「ガンゲイル・オンライン」。突然発生した謎の殺人事件が渦巻く―― 新装導入。

ホ-15-10 1985

ほうかご百物語

原野ひろかず

イラスト／ 宮城しんた

ISBN 978-4-04-021466-7

真一が春の旅行先で出会った少女は偶然に聞く噂を持っていて……。ピュア可愛いイタチさんと真一の、不思議な旅路は物語。第14回電撃小説大賞（大賞）受賞作。

ホ-12-1 1586

ほうかご百物語2

原野ひろかず

イラスト／ 宮城しんた

ISBN 978-4-04-021467-4

美術館の一角として学校生活に染り込むイタチさん。しかし、そんな彼女を想う怪しい影が……。ピュア可愛いイタチさんと僕の旅路は不思議物語。第2巻。

ホ-12-2 1606

ほうかご百物語3

原野ひろかず

イラスト／ 宮城しんた

ISBN 978-4-04-021468-1

怪しい温泉宿に妖怪退治に出かけることになった僕とイタチさんと。その他の人々。シリーズ第3巻は、学校を飛び出してイタチさんたちが大活躍ですっ。

ホ-12-3 1609

ほうかご百物語4

原野ひろかず

イラスト／ 宮城しんた

ISBN 978-4-04-021469-8

3学期が始まり、平穏に「マ」妖怪討伐の日々を送っていた学園。でも、そんな彼らの妖怪討伐を邪魔する足掻き現われてや。嵐がいつぱいのシリーズ第4巻。

ホ-12-4 1729



ほうかご百物語 5

読みひろかなず

イラスト／宮藤しん

ISBN 978-4-04-0-60071-9

学校の裏山で蛇を助けた真一。翌日家に隣座をおおきさんがやってきて「買った」「つーわけで種にしなさい」の、イタチさんもややん子扱いもやう事だ。めですつ。

み-125 1778

ほうかご百物語 6

読みひろかなず

イラスト／宮藤しん

ISBN 978-4-04-0-60072-6

天才画家ニコが真一を弟子にしたいと言いつ出した。なぜか真一は、ニコを罵り断一年生と称の勝負をする。この時、イタチさんと僕の友達達も不思議物語部も弾一

み-126 1837

ほうかご百物語 7

読みひろかなず

イラスト／宮藤しん

ISBN 978-4-04-0-60073-3

ある日の放課後、妖怪対決中にイタチさんが妖力を使えなくなってしまう。え、それってイタチさんが、普通の女の子になつちやうたつてたの？

み-127 1894

ほうかご百物語 8

読みひろかなず

イラスト／宮藤しん

ISBN 978-4-04-0-60074-0

僕の前に現れた文豪を手首する妖怪。彼は、もうすぐ妖怪たちを「押さえる」時だ。大蛇（おおはらふ）が始まることを告げ——や、僕の友達達が文豪の妖怪なのです。

み-128 1962

ほうかご百物語 9

読みひろかなず

イラスト／宮藤しん

ISBN 978-4-04-0-60075-7

「佐衣衣」の代償に車を失った僕は、イタチさんと一緒に暮らすことに。そんな中、イタチさんの体にある異常が、僕らの友達達の間、ついにどうもイママッパムです。

み-129 2030



電撃文庫

ヴあんぷ！

成田良悟

イラスト／エナミカツミ

ISBN 978-4-04-071268-1

ゲルハルト・フォン・バルジンのサインは「悪魔おつの子爵さま」だ。まず彼は「吸血鬼」であり、しかも「紳士」である。だが悪魔魂を隠したはいていたもの、それは――

全 9巻 0936

ヴあんぷ！Ⅱ

成田良悟

イラスト／エナミカツミ

ISBN 978-4-04-071309-9

彼の正体は「ズン・グロウ・リースベ・ルグ・吸血鬼連合」の「破壊王」と恐れられる「食人鬼」の目的は、バルジンのサインに宿る力を盗むこと――

全 9巻 1104

ヴあんぷ！Ⅲ

成田良悟

イラスト／エナミカツミ

ISBN 978-4-04-071310-6

カミナル賢で知られるグロウ・リース馬だが、食人鬼や吸血鬼から選られた吸血鬼たちによる争奪は現実化が進んでいた。そして、吸血鬼の争奪戦になる音の戦いが降りていき――

全 9巻 1133

ヴあんぷ！Ⅳ

成田良悟

イラスト／エナミカツミ

ISBN 978-4-04-071311-3

ドイツで起きた謎の村人失踪事件。それを受けて吸血鬼の「組織」が動き出す。そしてそこに至っては、フクロノドのためにある決断を迫る、鳥を離れ――

全 9巻 1632

ヴあんぷ！Ⅴ

成田良悟

イラスト／エナミカツミ

ISBN 978-4-04-071312-0

グロウ・リース馬で知られる連続殺人事件「組織」や「血族」の影もちらつく中、小物市長は市民を、レリツクはヒルダを、殺人鬼の手から守る事ができるのか――

全 9巻 2022

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞



自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バカカーノ!』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川 浩(『花スラム』、『図書館戦争』)、川原 礪(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一端を走るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中国

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通) **大賞**……………正賞+副賞100万円
 金賞……………正賞+副賞 50万円
 銀賞……………正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ) **メディアワークス文庫賞**
 正賞+副賞 50万円
 電撃文庫MAGAZINE賞
 正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！

小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。

<http://asciimw.jp/award/taisho/>